

以下については、公開対象から除いています。

九〇～九八頁

VI 自然科学的考察

一 花粉分析

二 珪藻分析

三 鉱物分析

図版四四

埼玉古墳群発掘調査報告書 第四集

瓦塚古墳

埼玉県教育委員会



1. 瓦塚古墳全景(北西上空から、昭和57年12月撮影)



2. 昭和57年度調査区出土埴輪群

序

埼玉県は、全国に先がけて、国指定史跡「埼玉古墳群」の広域的な保存と環境整備を図る目的で、さきたま風土記の丘の建設計画を立てました。

埼玉県教育委員会では、この計画に基づいて、昭和四十三年の稲荷山古墳の発掘調査にひきつづき、各古墳の周堀等の発掘調査を継続的に実施し、その規模や形態を明らかにしてきました。また、この成果を基礎として、環境整備を促進する一方、昭和四十四年にはさきたま資料館を開館して資料の収蔵・展示の充実に鋭意努力してまいりました。

本書で報告いたします瓦塚古墳は全長七十一メートルで埼玉古墳群の中では中形の前方後円墳です。昭和五十四年度及び昭和五十七年度の二回にわたり発掘調査を実施し範囲確認を進めてまいりました。その結果、稲荷山古墳や二子山古墳と同様、二重の周堀を有することが判明しました。また、周堀からは、家形埴輪や人物埴輪をはじめとし、多くの貴重な埴輪が出土しております。

本書は、既の上梓した『稲荷山古墳』、『鉄砲山古墳』及び『愛宕山古墳』に次ぐ埼玉古墳群発掘調査報告書第四集であります。埼玉古墳群に関する基礎資料として広く御活用いただき、教育、学術、文化の振興に役立てただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土資料等の整理、及び本書の刊行に至るまで、多大の御指導、御協力を賜りました文化庁をはじめとする関係各機関並びに関係者各位に対して、深く感謝の意を表します。

昭和六十一年三月

埼玉県教育委員会教育長

荒井修 二一

目次

序	
例言	
調査の組織	
I 調査に至る経過	1
II 調査の経過	2
III 遺跡の立地と環境	7
IV 調査の成果	11
一 遺構	11
(一) 昭和五四年度調査区	11
(二) 昭和五七年度調査区	19
二 遺物	27
(一) 昭和五四年度調査区出土遺物	27
(二) 昭和五七年度調査区出土遺物	28
出土遺物観察表	60
V 結語	77
一 古墳各部の形態及び規模について	77
二 埴輪について	80

三 須恵器について	82
四 形象埴輪の配置復原について	83
五 人物埴輪腕の製作技法について	87
六 瓦塚古墳の埼玉古墳群内での位置	89
VI 自然科学的考察	90
一 花粉分析	90
二 珪藻分析	92
三 鈣物分析	94

挿 図 目 次

第1図	瓦塚古墳の位置とその周辺の遺跡……………	9
第2図	瓦塚古墳と埼玉古墳群……………	12
第3図	瓦塚古墳測量図及び各調査区的位置……………	13
第4図	昭和五四年度調査区全測図……………	16
第5図	昭和五四年度調査区土層断面図……………	17
第6図	昭和五四年度調査区遺物出土位置図……………	18
第7図	昭和五七年度調査区全測図……………	22
第8図	昭和五七年度調査区土層断面図……………	23
第9図	昭和五七年度調査区遺物出土位置図……………	24
第10図	昭和五七年度調査区遺物出土位置図……………	25
第11図	外堀外方縄文土器出土状況……………	26
第12図	昭和五四年度調査区出土遺物1(1)5……………	29
第13図	……………	30
第14図	……………	31
第15図	……………	32
第16図	……………	33
第17図	……………	34
第18図	……………	35
第19図	……………	36
第20図	……………	37
第21図	……………	38
第22図	……………	39
第23図	昭和五七年度調査区出土遺物1……………	40
第24図	……………	41
第25図	……………	42
第26図	……………	43
第27図	……………	44
第28図	……………	45
第29図	……………	46
第30図	……………	47
第31図	……………	48
第32図	……………	49
第33図	……………	50
第34図	……………	51
第35図	……………	52
第36図	……………	53
第37図	……………	54
第38図	……………	55
第39図	……………	56
第40図	……………	57
第41図	……………	58
第42図	……………	59

第43図	瓦塚古墳周堀復原想定図	78
第44図	形象埴輪群の中堤上への復原操作図	86
第45図	形象埴輪群配置復原図	86
第46図	人物埴輪配置復原模式図	86
第47図	木芯中空技法工程復原図	88
第48図	主要花粉、胞子ダイグラム	95
第49図	珪藻ダイグラム	97
第50図	鉱物組成ダイグラム	97

表 目 次

第1表	埼玉県教育委員会による古墳群調査一覧	1
第2表	人物埴輪腹部の形式分類表	88
第3表	分析試料一覧	90
第4表	昭和五七年度調査区周堀花粉分析結果	95
第5表	昭和五七年度調査区周堀珪藻分析結果	96
第6表	昭和五七年度調査区鉱物分析結果	97

図 版 目 次

図版一	瓦塚古墳と埼玉古墳群内の位置	1
図版二	瓦塚古墳全景	2
図版三	瓦塚古墳近景	2
図版四	昭和五四年度調査区全景	2
図版五	昭和五四年度調査区A区内堀	2
図版六	昭和五四年度調査区A区北西壁内堀部分土層断面	2
図版七	昭和五四年度調査区B区内堀	2
図版八	昭和五四年度調査区内堀墳丘側立上り	2
図版九	昭和五四年度調査区内堀コナナ部中堤側部分	2
図版一〇	昭和五四年度調査区B区内溝群	2
図版一一	昭和五四年度A区内堀遺物出土状況	2
図版一二	昭和五四年度B区内堀遺物出土状況	2
図版一三	昭和五七年度調査区全景	2

図版一三	2	昭和五七年度調査区外掘	昭和五七年度調査区内掘
図版一四	1	昭和五七年度調査区外掘ブリッジ	昭和五七年度調査区外掘遺物出土状況
図版一五	2	◇	◇
図版一六	1	◇	◇
図版一七	2	昭和五七年度調査区縄文土器出土状況	
図版一八	1	昭和五七年度調査区出土遺物 1 (1, 3)	
図版一九	2	◇	◇
図版二〇	1	◇	◇
図版二一	2	◇	◇
図版二二	1	◇	◇
図版二三	2	◇	◇
図版二四	1	昭和五七年度調査区出土遺物 1 (113, 114)	

図版二五	2	花粉及び胞子化石顕微鏡写真	24
図版二六	1	◇	23
図版二七	2	◇	22
図版二八	1	◇	21
図版二九	2	◇	20
図版三〇	1	◇	19
図版三一	2	◇	18
図版三二	1	◇	17
図版三三	2	◇	16
図版三四	1	◇	15
図版三五	2	◇	14
図版三六	1	◇	13
図版三七	2	◇	12
図版三八	1	◇	11
図版三九	2	◇	10
図版四〇	1	◇	9
図版四一	2	◇	8
図版四二	1	◇	7
図版四三	2	◇	6
図版四四	1	◇	5
図版四五	2	◇	4
図版四六	1	◇	3
図版四七	2	◇	2

例 言

一 本書は、埼玉県行田市埼玉四、八〇七に所在する埼玉古墳群瓦塚古墳に関する発掘調査報告書である。

二 発掘調査は、埼玉県教育委員会が主体となり、埼玉県立さきたま資料館が実施した。発掘事業は昭和五十四年度（前方部南側）、及び昭和五十七年度（墳丘西側）に、整理事業は昭和六〇年度に実施した。

昭和五十四年度発掘期間 昭和五十四年八月一日～十一月一日、（担当者、小川良祐、今泉泰之、金子真土）

昭和五十七年度発掘期間 昭和五十七年九月六日～十二月二十九日、（担当者、梅沢太久夫、今泉泰之、中島 宏）

三 昭和五十七年度、六〇年度事業については文化庁国庫補助事業として実施した。

四 各事業の組織は別表に掲げるとおりである。

五 出土品の整理及び本書の作成は埼玉県立さきたま資料館が行い主に杉崎茂樹が当たり、小久保徹、若松良一、田中正夫の協力を得た。

六 本書の執筆は各文末に記したとおりであるが、全体について横川好富が加除筆を行い、金井塚良一が監修した。

七 写真撮影は杉崎茂樹及び田中正夫が行なったが、遺構については各調査担当者が行った。

八 微化石分析及び鉱物分析は（株）パリオ・サーベイに、また、写真撮影の一部（航空写真）と空中写真測量図の作成及び調査区の基準点、水準点測量は（株）中央航業に委託した。

九 発掘調査から整理報告に至るまで左記の方々及び各機関から御指導御協力を賜った。

市毛 勲	井上 裕一	岩崎 卓也	大塚 初重	岡村 勝行
乙益 重隆	金子 正之	亀井 正道	車崎 正彦	佐藤 好可
斉藤 国夫	笹森紀美子	田中 一郎	田部井 功	寺社下 博
永沼 律朗	中島 利治	橋本 博文	細田 勝	堀口 萬吉
増田 逸朗	柳田 敏司	山崎 武	吉川 国男	
文化庁	行田市教育委員会	熊谷市教育委員会	鴻巣市教育委員会	

調査の組織

主体者 埼玉県教育委員会

教育長 石田 正利 (昭和五十四年度)

同 長井 五郎 (昭和五十七年度)

同 荒井 修二 (昭和六〇年度)

教育次長 下總 昇 (昭和五十四年度)

同 岩上 進 (昭和五十七年度)

同 佐藤 一司 (昭和六〇年度)

事務局 (企画・調整) 埼玉県教育局文化財保護課

課長 杉山 泰之 (昭和五十四年度)

同 野村 鍋一 (昭和五十七年度)

同 岩田 明 (昭和六〇年度)

課長補佐 奥泉 信 (昭和五十四年度)

兼庶務係長 木戸 一恵 (昭和五十四年度)

課長補佐 町田 勝義 (昭和五十七年度)

兼庶務係長 大村 進 (昭和五十七年度)

課長補佐 早川 智明 (昭和六〇年度)

庶務係長 持田 紀男 (昭和六〇年度)

庶務係 太田 和夫 (昭和五十四年度)

◇ 千村 修平 (昭和五十四年度)

◇ 畔上 敦志 (昭和五十四年度)

◇ 柚木 博 (昭和五十七年度)

庶務係 龜田 孝 (昭和五七、六〇年度)

文化財 栗原文藏 (昭和五十四年度)

第二係長 堀野 博 (昭和五十七年度)

埋蔵文化財係長 梅沢 太久夫 (昭和六〇年度)

◇ 文化財係 柿沼 幹夫 (昭和五十四年度)

◇ 駒宮 史朗 (昭和五十四年度)

◇ 井上 尚明 (昭和五十四年度)

◇ 宮崎 朝雄 (昭和五十七年度)

◇ 杉崎 茂樹 (昭和五十七年度)

◇ 水村 孝行 (昭和六〇年度)

◇ 鈴木 秀雄 (昭和六〇年度)

事務局 (発掘調査・整理) 埼玉県立さきたま資料館

館長 野村 鍋一 (昭和五十四年度)

◇ 坂巻 正一 (昭和五十七年度)

参事 金井 塚良一 (昭和六〇年度)

兼館長 八木原 巖 (昭和五四、五七年度)

兼庶務係長 横川 好富 (昭和六〇年度)

副館長 風間 俊克 (昭和六〇年度)

庶務係長 川崎 栄一 (昭和五四、五七、六〇年度)

◇ 島村 昌子 (昭和五十四年度)

◇ 橋本 克己 (昭和五十七年度)

- ◇ 鈴木 春美 (昭和五七年度)
- ◇ 木村 なを子 (昭和六〇年度)
- ◇ 鈴木 廣子 (昭和六〇年度)
- 学芸課長
- ◇ 小川 良祐 (昭和五四年度)
- ◇ 梅沢 太久夫 (昭和五七年度)
- ◇ 小久保 徹 (昭和六〇年度)
- 学芸員
- ◇ 今泉 泰之 (昭和五四年度)
- ◇ 金子 真土 (昭和五四年度)
- ◇ 中島 宏 (昭和五七年度)
- ◇ 杉崎 茂樹 (昭和六〇年度)
- ◇ 若松 良一 (昭和六〇年度)
- ◇ 田中正夫 (昭和六〇年度)
- ◇ 岡本 一雄 (昭和五四、五七、六〇年度)
- ◇ 大熊 達夫 (昭和五七年度)
- 病 託
- ◇ 金子 芳一 (昭和六〇年度)

I 調査に至る経過

埼玉古墳群は、わが国最大の円墳である丸墓山古墳や、県下最大の前方後円墳である二子山古墳及び金錯銘鉄剣を出土したことで有名な稲荷山古墳（前方後円墳）などがあり、古墳時代後期のものとしては、比較的大形の古墳が群集する全国的にも有数の古墳群である。

現存する九基の大形古墳は、昭和十三年八月八日付けの文部省告示により国指定史跡となっているが、稲荷山古墳以外で埋葬施設が明らかかなものは将軍山古墳のみで、古墳群及びその近接地区の発掘調査が行われるようになったのは昭和四〇年代以降のことである。

昭和四〇年、文化庁は史跡等買い上げ、史跡等環境整備、埋蔵文化財の発掘調査などを重点項目としてうちだし、このうちの史跡等環境整備の第二の柱が「風土記の丘建設」であった。この事業の主旨は考古資料、古文書等の文化財を各地方の特色ある風土と一体化して保存、活用を図るため、その収集、保管、展示のための資料館を、古墳、住居跡等の遺跡を包蔵する地区に建設、整備しようとするもので、県名発祥の地に所在する埼玉古墳群の保護、活用をはかるという当時の埼玉県の計画に合致するものであった。

こうして昭和四二年に、埼玉古墳群を中心とした「さきたま風土記の丘」建設事業が国庫補助を得て開始され、その一環として稲荷山古墳の発掘調査や二子山古墳周堀復原のための発掘調査が実施された。

これ以降も埼玉県教育委員会が主体となり、発掘調査が継続的に実施されたが、昭和四九年度までは主として周堀復原のための試掘トレンチによる確認調査で、これにより二子山、稲荷山古墳の内堀や、丸墓山、奥の山の周堀

が復原された。稲荷山古墳は周堀の他、昭和四三年に主体部の発掘調査が実施され、その後鏝梯出土の鉄剣から金象嵌銘文が発見され、昭和五五年には発掘調査報告書が刊行されている。

こうして古墳群の所在する地区は昭和五〇年代の初めには、現在のような景観となり、史跡公園としての環境が整ったが、昭和五四年度から主に各古墳周堀の範囲を確認するために古墳周堀の面的な発掘調査が継続的に実施されている。この間昭和五五年度以降は国庫補助事業としてすすめられ、五九年度からはこれまでの調査成果を報告書にまとめ公表することになって、鉄砲山古墳及び愛宕山古墳の周堀に関する発掘調査報告書が刊行された。

第1表 埼玉県教育委員会による古墳群調査一覧

年度	古墳名(調査箇所)	備考
42	二子山、鉄砲山、奥の山古墳(周堀トレンチ調査)	
43	稲荷山古墳(主体部)	報告済 (『埼玉稲荷山古墳』)
48	稲荷山、丸墓山古墳(周堀トレンチ調査)	稲荷山古墳については報告済 (『埼玉稲荷山古墳』、『館報№5』※)
49	豊梅塚、天王山等小円墳群及び二子山古墳(中堤通り出し部)	(『館報№6』)
54	瓦塚古墳(前方面南側周堀)	今回報告
55	鉄砲山古墳(前方面西側周堀)	報告済(『鉄砲山古墳』)
56	二子山古墳(後方面北方外堀)	(『館報№12』)
56	愛宕山古墳(後方面東側及び前方面南側周堀)	報告済(『愛宕山古墳』)
57	瓦塚古墳(坪丘西側周堀)	今回報告
58	鉄砲山古墳(後方面東側周堀)	報告済(『鉄砲山古墳』)
59	将軍山古墳(前方面四方地区)	(『館報№16』)
60	二子山古墳(前方面南方外堀)	(『館報№16』)
60	丸墓山古墳(東側周堀)	

※『県立さきたま資料館報』(以下同じ)

瓦塚古墳は公園の中央西部、県立さきたま資料館の東方に所在する古墳で、昭和五四、五七兩年度の二度にわたりその周堀の確認のための発掘調査が実施された。昭和五四年度は前方部南側部分を八月一日から一月まで、また、

II 調査の経過

一 昭和五四年度調査区

昭和五四年度の埼玉古墳群の史跡整備のための周堀範囲確認調査は瓦塚古墳前方部南側部分、及び鉄砲山古墳前方部西側部分の二箇所について実施した。瓦塚古墳の調査は鉄砲山古墳の調査に先行し昭和五四年八月一日より開始、一月九日に調査を終了した。以下日を追って記述する。

八月一日

調査区の草刈りを行い、座標北を軸とした三桁方眼のグリッドを設定し調査を開始する。土層観察用のセクションベルトを調査区のはぼ中央に南北に残すこととし、その東側面部分をトレンチとして掘り下げを開始、同時に調査区南部分からも表土除去作業を開始。

八月六日

トレンチ内で多数の埴輪片が出土。同時に周堀底と思われる部分を現表土下約一層で確認。調査区中央のセクションベルトにより調査区東側をB区、西側をA区と呼称することとする。(第4図参照)

八月一八日

B区の表土剥ぎを終え、全面掘り下げを開始する。各所で埴輪片が出土す

五七年度には墳丘の西側部分を九月六日より二月二九日までそれぞれ実施した。

(杉崎 茂樹)

るが、中央でやや多いようである。周堀の外側立上りをトレンチ内のはぼ中央付近で確認。

八月二七日

前方部コーナー部と思われる部分をB区北西部のセクションベルト付近で検出。墳丘東側側面は土採取で崩されているが、その崩壊部分からは一〇数片も離れている。

八月三一日

前方部東側コーナー部分をほぼ把握。周堀内からは埴輪片が多数出土している。

A区も表土除去、掘り下げを開始する。

九月六日

A区北の部分で確認した堀状の落込みは、B区の堀と連続する状況が明らかとなり周堀と判明した。検出面での幅は約六層で墳丘側の立上り肩部はB区まで連続する根切溝(SD004)により破損している。A区周堀外方ではほぼ直交するような溝(SD001、SD002)及び同形の土壁(SH002、SH003)を検出、掘り下げを開始する。

溝(SD001、SD002)は磨滅した埴輪片を含みローム粒を混える暗褐色土を覆土としており、SD002が周堀を切っていることからいずれも

周堀より新しい時期のものと判断できる。また、土壌 SH002 は SD001 に切られている。

九月七日

A 区周堀の墳丘側部分を壊している溝を発掘。表土除去作業時より存在は判明しており、上層は有機質を含むロームを主体とし、ごく新しい時期のものらしい。相当の深さが予想される。

九月九日

B 区周堀部分覆土除去作業を継続。埴輪片多数出土。

A 区では溝 (SD001、SD002) の覆土除去を継続中だが、SD001 の SD002 と交差する東側部分は別の溝 (SD003) と連結しているようである。

一〇月五日

A 区では周堀の覆土除去作業を継続。B 区では調査区南で検出していた土壌群 (SH008 以下一一基) を発掘し写真撮影。いずれも覆土は灰色系の粘質土で、古墳と直接関係を持つと思われるものはない。

一〇月二日

A 区の南西部分で幅広の溝状遺構の存在が明らかとなり、外堀の可能性が生じた。覆土は周堀と同様の黒褐色土である。

B 区では同堀内での埴輪片の出土位置を記録する。前方部コーナー付近に集中する状況である。

一〇月二七日

A 区では外堀の可能性のある溝をほぼ発掘し終えた。この時点で、底面のレベルや先に発掘した周堀との走向方向の一致などから、この溝状遺構が古

墳の外堀とみて誤りなしと判断するに至った。

B 区では A 区から連続する箱塚研状の溝 SD003 を発掘。内堀を切っている状況が明らかである。内堀内の埴輪片の出土位置を記録。

一〇月三一日

A 区内堀内の埴輪出土位置を記録し取り上げる。確認部分の中央部付近に特に多く出土している。

B 区では内堀全体をほぼ発掘し終えた。前方部東側コーナー付近の遺存状況は比較的良好であり明瞭に確認することができた。季節的な関係もあるかと思われるが堀底面では湧水しない。

一一月六日

A 区では内堀底に達する溝 SD007 を発掘、暗褐色土を覆土の主体としており表土除去時点で検出していたもので内堀の埋没以降に掘られた溝である。

B 区でも内堀底の溝 SD008、009 の二基を発掘。これも表土除去時点で確認していたもので、周堀埋没以降に掘られたものであることが明らかである。

一一月九日

A、B 両区ともほぼ発掘を終えた。B 区東南端の落込みはその位置からすると外堀と考えられる。

B 区南部の土壌群等の小遺構を写真撮影後、A、B 両区全体の写真撮影を実施し、全体の実測作業に取りかかる。

一一月一六日

実測作業も終え調査を終了。

調査終了後は、年明けの一月下旬鉄砲山古墳の調査終了後の埋戻作業と同時に埋戻を行った。遺構部分の保護を目的としてまず砂を平均約一〇センチで調査区全体に敷いた後、発掘排土で埋戻し重機で転圧し旧状に復した。

二 昭和五七年度調査区

昭和五七年度は、墳丘西側、前方部から後円部にかけての側面周堀部分を調査対象とした。昭和四年度の前方部南側の調査では、周堀が二重になることが判明していたので、今回の調査はその平面形態が長方形となるのか、盾形となるのかを主眼とするものであった。

重機を使用し表土を除去し、九月六日から調査を開始、十二月二三日に実質的な調査を終了した。

九月六日

前日までに、調査区の表土除去を終了しており、午前中に器材等運搬し、遺構の確認作業を開始する。調査区の北部、調査区全体の約半程度の範囲を終了し、内堀の中堤の立上りラインを明確に確認、後円部墳裾付近は弧を描くようにローンプロットが検出されたが、墳裾となるのか確信が持てない。

九月七日

調査区に座標南北を軸としたグリッドを設定。グリッドは六層×六層の正方形である。

九月一七日

九月一〇日から台風のため作業を中断していたが、本日から作業再開する。とりあえず内堀のプランを調査区内全面で確認すべく、北部から順次南へと進める。調査区中程に墳丘主軸と直交する土層観察用のベルトを残すことに

した。

埴輪片の他、須恵器片も出土する。

また、この日、コンクリート製の遺跡原点を調査区外の三箇所埋設。

九月二八日

本日までに内堀の中堤側の立上りラインを調査区内全てで確認した。

ほぼ直線的な状況にあり、検出面での覆土は暗褐色でこれを見る限りでは後世の攪乱と思われるものはほとんど認められない。公園となる以前は畑地として使用されていた地区ということであるが、さほど深耕が行なわれなかつたためであろう。中堤部分からは埴輪の出土量も少なく、樹立された痕跡は認められない。

九月二九日

外堀及び中堤部分の確認作業を南部分から開始。

外堀の南部は攪乱が及んでおり遺存状況が心配される。調査区中央からやや南西の中堤上、外堀への肩部付近と考えられる付近から、列を成して埴輪片が出土してきた。形象埴輪が主体を占めるようであるが、家形埴輪や人物埴輪が確認できる。

九月三〇日

外堀及び、中堤の検出作業を継続。前方部調査区の調査成果からの予想より中堤はやや幅が広く、七層前後はあるようだ。

一〇月一日

外堀、中堤の検出作業を継続。

外堀の外方で縄文土器（加曾利E式）の胴下半部分を発見。住居跡に伴う埋甕炉かとも考えられるが、そのプランの確認ができない。

一〇月五日

外堀の立上り部分は調査区の北部域では不明瞭である。検出面での幅は約七呎前後となるようだ。また外堀覆土は内堀同様暗褐色である。

調査区の北壁沿いの部分をトレンチ状に試掘を開始。

一〇月七日

調査区北壁の試掘トレンチ内で、内堀底を検出。遺構検出面のローム上面からは約五〇センチの深さで、立上りはやや急である。

一〇月二日

調査区北壁の試掘トレンチ内で外堀部分を実施。外堀は全体では平坦だが中央ではやや深くなるようである。立上りは内堀同様やや急である。

午後から内堀部分を調査区上部から発掘開始。後円部墳裾に連なると思われる立上りを確認。中堤側より立上りの角度は緩やかである。

一〇月二日

途中降雨で発掘を中断していたが本日から再開。冠水のため内堀の調査区中央からやや南寄りの部分を発掘。くびれ部西側部分で、造り出しの一部と思われるローム土を検出。前方部側がやや張り出した隅丸の方形の平面プランであるが良好な遺物の出土はない。

一二月四日

内堀の調査区南部域を発掘。前方部の立上りを検出したが、立上りは急である。根切溝により一部破損している。内堀底は全体に平坦で南部ほど前方部南側調査区のレベルに近づいて深くなる傾向がある。しかしながら、前方部南側の調査の時と同様、堀底で湧水はなく、発掘作業は比較的スムーズに進めることができた。内堀覆土内の下部から鉄器片が出土。刀子等の茎部分

かと思われる。

一二月六日

調査区の南部分から外堀の発掘を開始する。外堀の略中央部を覆土を切つて溝が走っているのが分かる(SD001)。溝の覆土は明褐色で検出面では幅は二呎以上ある。外堀南部は攪乱がほとんど堀底まで及んでいる。

一二月九日

外堀の発掘を継続。調査区中央からやや南の外堀内で頭部、腕、足を欠く男子人物埴輪が横倒しの状態で出土。

一二月二〇日

昨日出土した男子人物埴輪の出土状況を写真撮影。周辺から家形埴輪と思われる破片を確認。

調査区中央付近の外堀部分に、中堤と連結するブリッジ状のローム部分があるのを確認した。中央は南部から外堀中央に確認されていた近しい時期の溝(SD001)により切断されている。なおこの溝は覆土からわずかではあるが中世のものと思われる陶器片が出土しており、そうした時期のものと考えられるが、堀がほぼ埋まりきってから開削されたものである。

一二月二四日

男子人物埴輪付近の破片の出土位置の記録作業を終了。

外堀のブリッジの形状を確認。基底部の幅は約二呎で、中央部は溝(SD001)により完全に破壊されている。

一二月二五日

男子人物埴輪周辺の発掘を進める。男子人物埴輪の出土した中堤側に近接して家形と思われる形象埴輪片が一括して出土。また男子人物埴輪の三呎は

と北東の外堀内で新たに人物埴輪のものとと思われる円筒状の台部が出土した。

一月二十六日

外堀内出土の埴輪の発掘を継続。

昨日出土した人物埴輪の円筒台部付近から、これと接合する胴部及び頭部が出土し、鳥田髷を結う女子人物埴輪であることが判明。また、これも昨日出土した家形埴輪であるが、この破片に混じり、人物埴輪の胸が出土しており、この家形に近接して人物埴輪が樹立されていたものと考えられる。

こうした外堀中から出土する埴輪は中堤寄りに集中し、しかも、上方からの転落を想像させるものであり、中堤外堀寄りの部分に列を形成して樹立されていた可能性を示唆する状況である。

一月二日

外堀内の遺物出土状況を写真撮影。また、外堀の北部域の発掘を進める。やはり、この部分の中央に、中世の溝が延びており、外堀底を破壊している模様である。

一月四日

外堀出土の埴輪片の出土位置を記録し、写真撮影する作業を行う。

外堀中央を走る溝SD001の一部発掘を開始。

一月六日

外堀中央の溝SD001は断面が箱葉研状を呈しており、最下層には黒色土が堆積、その上に粘土層がある。

外堀中堤寄りの埴輪の出土位置記録及び取り上げ作業を継続する。

一月八日

外堀中央の溝SD001のほぼ半分を発掘。遺物の多い部分の外堀覆土を

掘り込んでいたためか、埴輪の出土も多い。

一月三日

外堀の溝SD001の発掘も終わり、調査区全体についてもほぼ、遺構面を発掘し終えた。

外堀内の遺物は意外に出土量が多く、依然継続中であり、新たに、女子人物埴輪の西側約一厨付近から円柱状の柱を有する家形と思われる形象埴輪が、潰れてはいるものの、まとまった状態で出土してきた。

一月四日

調査区中央の土層観察用ベルトのセクション図を作成する。

外堀内出土遺物の記録作業を継続。

一月七日

女子人物埴輪、円柱家形埴輪の出土状況を写真撮影、出土状況図等を作成し、遺物の取上作業を全て終了する。

一月八日

航空写真撮影後、地上からの全体写真も撮影し、直ちに遺構の実測作業に取りかかった。

一月二三日

遺構実測作業を終了し、実質的な発掘調査を全て終了した。

微化石分析用の土壌サンプル採取。調査用器材等撤収。

以上、調査終了後は埋戻し作業を一月二四日から本格的に開始した。まず、遺構全面に砂を平均約五センチ敷き、その後には排土を、重機を利用して埋戻しを行なったが、埋戻しを終了したのは、年も押しつまった一月二九日のことであった。

(杉崎 茂樹)

III 遺跡の立地と環境

瓦塚古墳は、埼玉県行田市埼玉に所在する埼玉古墳群に属する前方後円墳である。「瓦塚」の名称は、明治四〇年刊行の「北武八志第四巻墳墓志上」に記載され、明治時代の初期に、付近に瓦工が住んでいたことに由来すると言う。古墳の規模は、主軸長七一・〇呎、後円部径三三・五呎、同高さ五・二呎、前方部幅三八・〇呎、同高さ五・〇呎を測り、埼玉古墳群の現存する八基の前方後円墳の中では、中の山古墳に次ぐもので、六位の主軸長である。主軸方向角は、座標北一四八・〇度―東である。墳丘内部の調査は行われておらず、内部主体については不明である。

埼玉県の地形を概観すると、西半分を占める秩父山地から、松久、比企、岩殿、高麗、加治、狭山の丘陵が連なり、本庄、桶挽、江南、東松山、入間、武蔵野台地と呼ばれる複合扇状地性の台地へと続く、県の北部を画する利根川の右岸には妻沼、加須、中川低地が発達し、現荒川流域には荒川低地が発達している。これらの低地の中に大宮台地が存在する。行田市周辺地域は、秩父山地に源を発する荒川が、南東方向に流れを変え荒川扇状地の東方にいたり、また古利根川が南東方向に流れる地域でもある。阿河川の乱流によって洪積台地は侵蝕、分断され、北西から南東へ延びる細長い台地と、幾多もの自然堤防を残した。またこの地域は、関東造盆地運動と呼ばれる地盤の沈降現象が認められる地域であり、さらに利根川、荒川などの河川の氾濫による堆積土に覆われ、洪積台地は埋没し、自然堤防的な微高地状の地形を呈する。従って見かけだけでは洪積台地と自然堤防の区別はつけにくい。埼玉古墳群はこういった埋没洪積台地上に築造された古墳群である。

現在埼玉古墳群として、稲荷山古墳など八基の前方後円墳と、円墳とする日本最大と言われる丸墓山古墳の計九基が、国の指定史跡となっているが、古墳群としては、消滅したものを含めると、さらに広い範囲で考えることができる。稲荷山古墳、丸墓山古墳の北側を現在旧忍川が流れているが、昭和四三年に、さきたま風土記の丘整備に先立ち空中写真測量が行われ、その際撮影した航空写真に稲荷山古墳の周堀の影が認められ、それが旧忍川により開析されていることが知られる。旧忍川は、掘削されたものか、自然に流路が変ったのかは確定できないが、古墳築造以後に流路が現在の位置になったものと思われる。旧忍川を挟んだ対岸は埼玉古墳群の標高とあまり差はなく、同一の埋没洪積台地を切断するような形で流れていることから人為的な開削の可能性もある。旧忍川の北の白山古墳と稲荷山古墳の間には、すでに消滅したものが多く、神明山古墳などの円墳一基が確認されている。また稲荷山古墳の東側及び稲荷山古墳、將軍山古墳、二子山古墳、丸墓山古墳に囲まれた地域には鷹梅塚、ポッチ山、天王山、天祥寺裏、山宮古墳等の円墳一基がある。中の山古墳の北東域には前玉神社などの円墳や、すでに埋没したが、地籍図の地割から前方後円墳と思われる戸場口山古墳がある。奥の山古墳の西方には、前方後円墳と思われる大人塚古墳と、昭和二年の分布調査で小円墳一八基が確認されており、これらの古墳は同一の埋没洪積台地上に構築されたものと考えられる。したがって復原される埼玉古墳群は一〇基（推定も含む）の前方後円墳と、大小の円墳、合計四五基からなる。

埼玉古墳群の主体をなす八基の前方後円墳は、おおむね前方部を南西方向に向けるという共通性をもつが、細かく検討すると、主軸の方位、墳丘の形態、規模により、いくつかの群に分かれることが指摘されている。今までの

調査結果を総合すると、長方形二重の周堀を持つ前方後円墳は、稲荷山、二子山、鉄砲山、瓦塚、愛宕山である。盾形周堀をもつと思われる前方後円墳は將軍山、中の山、奥の山古墳であり、盾形周堀はみな従来一重であると考へられていたが、昭和五九年に行われた將軍山古墳の範囲確認調査で、外堀と思われる落ち込みが一部分ではあるが検出され二重の堀となる可能性もある。

埼玉古墳群内で内部主体が知られ副葬品が判明しているのは、稲荷山と將軍山古墳だけである。稲荷山古墳は昭和四三年に発掘され、辛利年銘の象嵌された鉄剣のほか、環状乳文帯神鏡、勾玉、帯金具、馬具、武器、武具、工具などが出土しており、遅くとも五世紀末頃には築造されていたと考えられ、当古墳群中では最古の前方後円墳とされている。將軍山は明治時代に横穴式石室が開口し、甲冑、銅鏡、金銅装馬具、蛇行状鉄器、三輪玉、須恵器、鉄鏃片等が出土して、六世紀末頃の築造と考えられ、当古墳群中では、新しい時期のものと思われる。他の古墳は、周堀の部分的な調査の結果ではあるが、出土した埴輪、須恵器、土師器などから、愛宕山古墳は六世紀前半、鉄砲山古墳は六世紀後半と考へられている。このように埼玉古墳群の中核をなす前方後円墳は、六世紀代を中心とした短い期間に次々と築造されたものである。また長方形周堀と盾形周堀の二系統があり、大規模、中規模の前方後円墳と大型円墳が南北九〇〇呎、東西六〇〇呎の範囲に密集して築造されていることなどが、他地域にみられない埼玉古墳群の特徴である。

周辺の遺跡

埼玉古墳群の周辺で発掘調査された先土器、縄文時代の遺跡は少ないが、確認されているものは、長野中学校々庭遺跡など、長野、佐間、渡柳、利田、杉原、齊条等のローム基盤上にある。弥生時代の遺跡では、熊谷市池上遺跡

から行田市小敷田遺跡にかけて中期（須和田期）の集落跡と、関東地方最古と考へられる方形周溝墓が確認され注目されている。この遺跡は荒川扇状地の扇端部東方に位置しており、小河川の氾濫原を利用した初期稲作農耕を基盤として成立したと考へられる。古墳時代の遺跡としては、池上遺跡（五領）、鴻池遺跡、武良内遺跡（五領、和果）、高畑遺跡（五領、和果、鬼高）、小敷田遺跡、池守遺跡、白鳥田遺跡（五領、鬼高）、小針北遺跡（和果）長野中学校々内遺跡、渡柳陣場遺跡、吹上町荻・台遺跡、小針遺跡（鬼高）などがある。これらの遺跡は埋設積台地や自然堤防上に立地するが、特に鬼高期頃から広範囲、長期間にわたる集落が営まれるようになったと思われる。この様相は埼玉古墳群造営の生産的基盤の成立を物語るものである。

埼玉古墳群の東方約一キロには、若王子古墳を主墳とし、円墳一〇基よりなる若王子古墳群がある。若王子古墳は現存しないが全長九五呎の前方後円墳で、幅二・七呎の横穴式石室内に石棺があり、甲冑、刀剣類、馬具、須恵器などが出土したと伝えられている。この須恵器は陶器編年のTK209に相当するといわれ、また、前五神社に残された側壁や天井石の石材の使用法、加工法が、若小玉古墳群中の八幡山古墳（出土遺物の年代の上限が7世紀初頭前後）と思われることと類似することから西暦六〇〇年前後には、若王子古墳が築造されていたと考へられる。愛宕通遺跡は若王子古墳群中の遺跡で、円墳跡三基が確認され、そのうち最も古いものは磨梅塚古墳とほぼ同時期と考へられており、若王子古墳群は六世紀初頭から七世紀初頭頃まで築造されたものとされている。

若王子古墳群は、埼玉古墳群の北方約二キロにあり、現在八幡山古墳と地蔵塚古墳の二基を残すのみであるが、かつては全長七・二五呎の愛宕山塚古墳

などの前方後円墳三基と円墳数基があったとされている。^(註10) 地藏塚古墳は一辺二八呎の方墳で横穴式石室には線刻壁画がある。八幡山古墳は、直径七四呎の大形円墳で、長さ一六・七呎を測る三室構造の横穴式石室を持つ。銅鏡、乾漆棺片、方頭柄頭、金銅裝飾尻、銀装弓弭金物、須臾器等が出土しており、七世紀後半に比定されているが、出土遺物にはやや年代の幅があるようにも思われ、また乾漆棺片、方頭柄頭、金銅裝飾尻は中室からの出土であること考え合せると、築造の年代はやや古く考えられる。^(註11)

小見古墳群は埼玉古墳群の北方三・五キロにあり、小見真観寺古墳、虚空藏山古墳の二基の前方後円墳と円墳二基が現存する。小見真観寺古墳は全長一一・二呎を測り、後円部と鞍部に緑泥片岩の板石で構築された二つの横穴式石室があり、鞍部石室から銅鏡、甲冑、裝飾大刀、鉄鎌などが発見されている。真観寺古墳は従来七世紀後半代とされてきたが、出土遺物と、それが鞍部石室からの出土であることから、その築造年代を引き上げて考えるべきであろう。また埴輪をもつのではないかとの指摘もある。^(註12) 虚空藏山古墳は、全長四〇・五〇呎程の前方後円墳で埴輪片が出土している。

真名板古墳群は、真名板高山古墳が現存するのみであるが、周辺に数基の円墳が存在したようである。真名板高山古墳は墳丘がかなり削平されているが、全長九〇呎を測り、埴輪が確認されている。

以上は埼玉古墳群に近接する、前方後円墳を含む古墳群の概要である。時期については不明な部分が多いが、埼玉古墳群中の前方後円墳の築造が終る七世紀初頭前後には、近接した地域に若王子古墳、小見真観寺古墳などの大型前方後円墳が築造され、大型円墳の八幡山古墳や、方墳の地藏塚古墳などが築造されたことは興味深い点である。

さらにこれらの古墳群の周辺の古墳群を列挙すると、利根川に近い酒巻、齊条、新郷、羽生の各古墳群や、埼玉古墳群に近接する佐間古墳群がある。酒巻古墳群には円墳数基の他、全長四九呎の前方後円墳、酒巻一号墳がある。横穴式石室から須臾器が出土しており、墳丘には埴輪列が巡る。当地域における埴輪の終末段階のものと考えられる。齊条古墳群のとやま古墳は、全長六九呎の前方後円墳で、六世紀初頭に比定される。新郷古墳群の大稲荷一号墳は円墳で、六世紀前半に比定される。羽生古墳群には全長六三呎の前方後円墳、長沙門山古墳がある。佐間古墳群の大日塚古墳は、箱式石棺と粘土樑三基を有する円墳で六世紀前半に位置づけられる。

(田中 正夫)

- 註1 「埼玉稲荷山古墳」 埼玉県教育委員会 昭和五五年
 註2 「樺原山古墳及び二子山古墳周廻範囲確認調査及び整理概要報告」 『資料短報』
 16 昭和六一年
 註3 「愛宕山古墳」 埼玉県教育委員会 昭和六〇年
 註4 「鉄砲山古墳」 埼玉県教育委員会 昭和六〇年
 註5 ①「池守・池上」 埼玉県教育委員会 昭和五九年 ②「小敷田遺跡」 『年報五』
 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 昭和六〇年
 註6 高木豊三郎 「史蹟埼玉」 昭和一一年
 註7 田辺昭三 「須臾器生産の展開」 『須臾器大成』 角川書店 昭和五六年
 註8 小川良祐、田中正夫 「各地域における最後の前方後円墳―埼玉古墳群周辺地域―」 『古代学研究 第一〇六号』 昭和五九年
 註9 「愛宕遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 昭和六〇年
 註10 「八幡山古墳石室復原報告書」 埼玉県教育委員会 昭和五五年
 註11 「第六回三県シンポジウム 埴輪の変遷」 北武蔵古代文化研究会、他 昭和六〇年

IV 調査の成果

一 遺構

瓦塚古墳については、今まで主体部は勿論、周堀の形態も明らかではなかった。古墳の東側面は古く土採取により失われており、小さな崖面を形成している。

昭和五十四年度はこの墳丘東側面前方部のコーナーの位置、及び周堀の形態等を確認するため、墳丘とその南方の屈果用水際の道路との間の部分、約五二〇平方呎を対象として発掘調査を実施した。

調査区の標高は約一八・五呎で、史跡公園として買収され具有地となる以前は畑地として利用されていた地区であり、調査前は草地となっていた。

調査の結果、前方部の位置が明らかになったほか、当初一重と予想していた周堀が二重となることが判明した。

昭和五十七年度には、これを受け、墳丘西側面東部東西に走る市道と、移築民家北の散策道間の地区約一三〇〇平方呎を対象に調査を実施した。この地区も具有地化以前は畑地（一部陸田）として利用されており、調査前は芝地となっており、標高は約一八呎であった。調査の結果は、直線的に延びる内、外堀の状況が明らかとなったが、その形態が長方形か盾形となるかの判断は下せなかった。また、この調査では、後円部及び前方部の墳丘基部の一部を確認した他、くびれ部に所在する隅丸長方形の造り出しや、中堤と外方を結ぶブリッジが確認された。そして、外堀中から多量の埴輪が出土し、中堤外堀側に樹立されていた埴輪群の様相が一部推定できるようになるなどの新たな知見が得られた。

（杉崎 茂樹）

(一) 前方部南側調査区（昭和五十四年度）

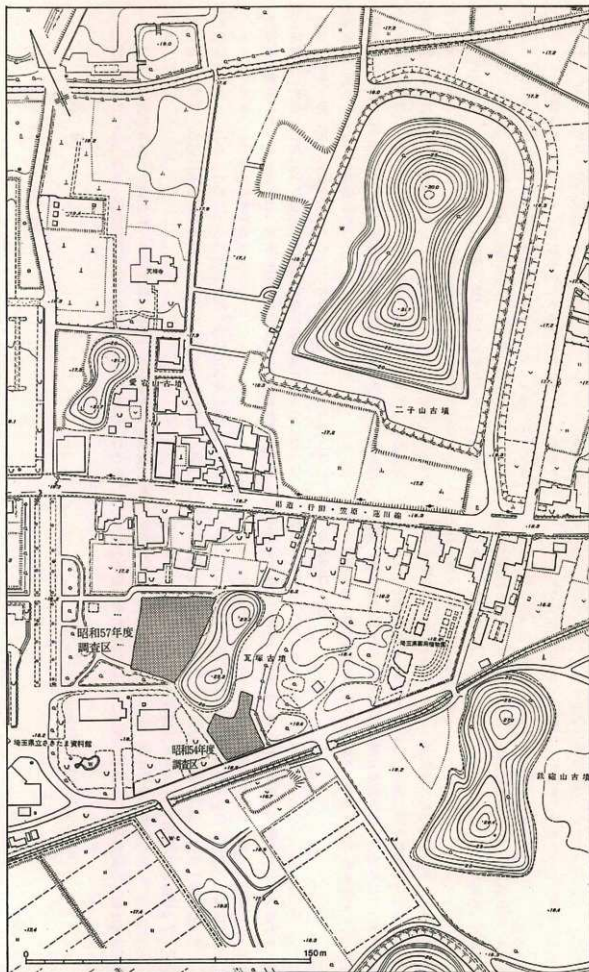
昭和五十四年度の調査区は、前方部の東南コーナー部及び周堀を確認することを目的として実施したものであり調査対象面積は約五二〇平方呎であった。調査区の設定にあたり、墳丘実測図より起こした墳丘主軸線と平行するように調査区の北西境界を設定し、前方部稜線の延長線上に土層観察用のベルトを残した。このベルトにより調査区を便宜上A区（西側）、B区（東側）とした。なおB区の北東境界は墳丘主軸線に直交するように設定した。調査区は草地となっており、標高は一八・五呎前後で、墳丘から南へ向かって緩やかに傾斜していた。

周堀及び中堤

A区では、内堀（SA）、中堤（SB）、外堀（SC）が確認され、B区では前方部の南東コーナーが良好な状態で検出された（第4図）。内堀の外堀コーナーは後世の溝により削られている。調査区の範囲では中堤の外堀コーナーは検出されなかったが、A、B両区で外堀の落ち込みが認められており、中堤外側コーナーは推定できる。

内堀は、前方部南西の底部で幅三、三呎から三、七呎を測る。前方部南西の墳裾は数条の溝により削られている部分が多いが、遺構検出面（ルーム検出面）で幅約五、五呎で深さは約七〇センチである。

立ち上がりは場所によりやや異なるが内側では仰角で二〇度から三五度、外側で三〇度で、ともにやや内側に湾曲して立ち上る。覆土は、立ち上がり



第2図 瓦塚古墳と埴玉古墳群 (1/2,000)



第3図 瓦塚古墳測量図及び各調査区の位置 (1/600 スタリントーンは周囲部分を示す)

部付近に中堤や、墳裾からの崩落土と思われる暗灰褐色土があり、堀の中央付近下層は黒褐色の有機質土であり、中央付近で一五セシ、壁側で五〇セシの堆積である。上層はロームブロックを含む暗褐色土が標準的な堆積土であった(第5図)。内堀では部分的に上層と下層の間にやや砂質の粘土化した暗灰褐色土がみられ、堀が埋まる過程で一時湛水していた可能性もある。

なお、前方部コーナーは、検出面での周堀の立ち上がりから現墳裾まで五・五層程の平坦地となっているがローム直上には江戸時代後期の天明年間のパミス(浅間火山灰)と思われる白色粒を含む暗褐色土が堆積しており、現在の墳丘はかなり破壊されていると考えられるので墳丘がどこまであったか、また墳裾部にテラスがあったかどうかは不明である。

外堀は内側の立ち上がりしか検出されず、幅については不明であるが、調査区内で確認される最大幅は底部で五・六層である。上端の線は直線的であり内堀に平行する。下端の線はやや外側にふくらみを持つ部分があり、やや乱れていて中堤が部分的に崩れていることを示す。覆土は内堀とほとんど同じ状態であるが、中層のやや砂質の暗灰褐色土はみられなかった。

中堤は、検出面(ローム面)で、幅六・四層前後である。ローム上に天明年間のパミスと思われる白色粒を含む暗褐色土が上位に三〇セシ程堆積しており、その下のローム直上に一〇セシ程の厚さで白色粒を含まない暗褐色土が堆積していた。これらの土層は周堀覆土内に連続しているため、古墳築造時の表土とは思われない。

出土遺物は、須恵器片を少量含むが、その大部分は円筒埴輪片で、ほとんどが内堀からの出土である(第6図)。内堀コーナーと、A区北西側の内堀中に集中し、特にコーナー部では中堤側に多い。A区北西側では内堀墳丘側

上端に点々と埴輪片が出土しているがこれは後世の溝の覆土中からの出土である。北西側の集中は内堀の中央部にあり中堤側にも墳丘側にも片寄らずどちらからの流れ込みかは判断できない。コーナー部の出土状況は、中堤からの流れ込みと思われる、さらに外堀から埴輪片がほとんど出土していないことから中堤の内堀寄りに埴輪は樹立されたものと思われる。

A区内堀東側の埴輪の出土がみられない部分には後述するように溝(SD002、SD003、SD008、SD009)が集中しており、溝掘削時に内堀覆土中の埴輪片が掘り上げられたことも考えられる。

その他の遺構

溝(SD001、009)九基、土塚(SH001、020)二〇基が検出された(第4図)。

SD001と002は掘り方の形態がよく似ており、T字形に交差している。SD001は検出面で上幅一・五〜一・八層、底部幅約三〇〜三五セシ、深さ五〇〜六〇セシでSD002と交わる部分近くでやや深くなり、SD002との比高は七セシ程となる。SD002は上幅一・七〜一・九層で底幅三〇〜四〇層、深さ約七〇セシを測る。SD002は調査区南西隅から内堀内側まで延びており直角に屈曲するかあるいは他の溝と重複してどこまで続くかは不明であった。SD001、002ともに断面形態は上端から緩やかに傾斜し、逆台形をなす箱葉研堀状を呈する。また両溝とも一方の緩傾斜部に傾斜角変換点をもち(SD001では北西側、SD002は南東側)、SD001はSD002と直角に交わる部分から先に続く形跡はなく、形態も似ておりほぼ同時期に掘られた可能性も考えられる。

SD003は箱葉研堀状の溝で、上幅約一層、底部幅七〇セシ前後である。

深さはローム面から七五代^{セグ}、確認できる立ち上り上端からは、九五代^{セグ}を測る。断面形は上端から内湾気味に傾斜し、中央部はほぼ直線に落ち込み、底面は平坦であった。覆土は上層から暗褐色土、暗黄褐色土、やや粘性の強い暗褐色土、褐色土、有機物を含んだ黄褐色土、灰色味を帯びた暗褐色土、黄褐色土、暗黄褐色土で、いずれもロームを混入し砂粒を含まずあまり粘土化していない土が堆積しており(第五図)覆土の状況からすると水流があったとは思われない。また覆土中には天明年間のベミスと思われる白色粒を混入せず、掘り込みも白色粒を含まない土層中からであり、少なくとも天明年間には既に完全に埋っていたものと考えられる。

SD007は内堀底部をわずかに掘り込んでいる溝で、幅四〇^{セグ}程弱であるが、A区北西壁面での断面観察の結果では、上幅約三^{セグ}で、立ち上り上端部からの深さは約九五代^{セグ}を測る。上端から緩やかに傾斜し、三〇^{セグ}程下った部分で屈曲し、内湾しながらさらに落ち込み中央に幅約五〇^{セグ}、深さ約三〇^{セグ}の垂直に近い落ち込みを持つ。覆土は中央部の落ち込み部分以外は、単層でローム粒子を含む比較的しまった暗褐色土であった。覆土中に白色粒は含まず、天明期以前には埋まっていたものと思われる。SD007は調査区北西から、途中で屈曲しSD005に向って延びており、平面図上の位置関係からは、同一の溝のように見えるが、SD005は断面観察の結果では天明年間以後のものであり別の遺構である。SD007はSD002と交わる部分で終るものと思われる。

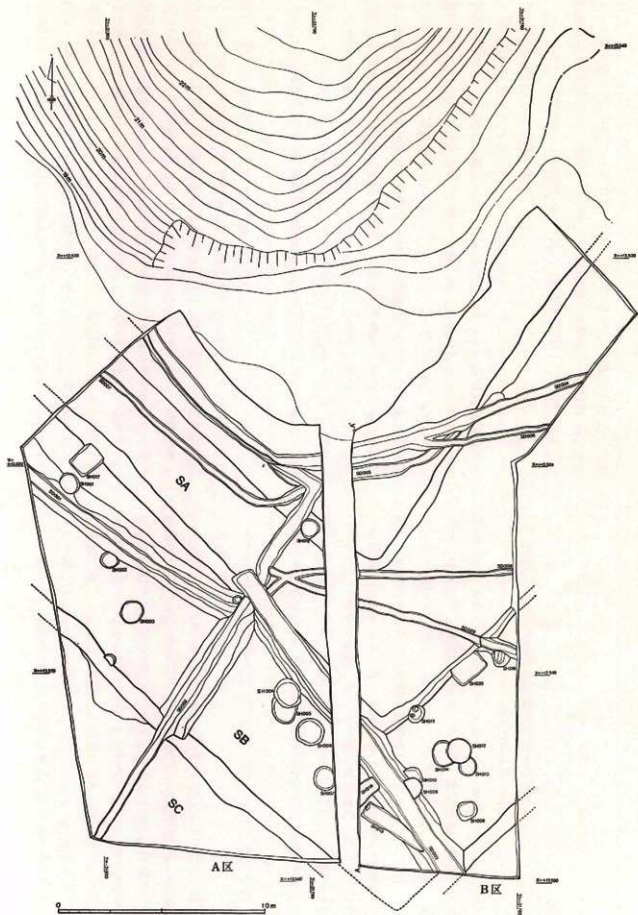
SD008、SD009はSD007と同じく内堀底部を一〇^{セグ}程掘り込んだ溝で共に幅四〇^{セグ}前後であるが、B区西壁土層断面での観察では、SD008は上端で約一・五^{セグ}と思われる、SD009は一・八^{セグ}を測るが上端から緩

やかに傾斜し中央部の五〇^{セグ}七〇^{セグ}幅の部分が深くなる形態を示す。立ち上り上端からの深さはSD008が六五代^{セグ}、SD009が七五代^{セグ}である。この両溝の間には第五図土層24に示される掘り込みがあり、それとの関係からSD008が古く、SD007が新しいことがわかる。またSD007の上には同図土層25として示される掘り込みが認められるが、これらは土壇か溝かは不明である。SD009は中堤を切る部分で段差を持つ。SD009はSD002で終り、SD008はSD003で切れることはこれらの溝との関連性があるようにも思われる。

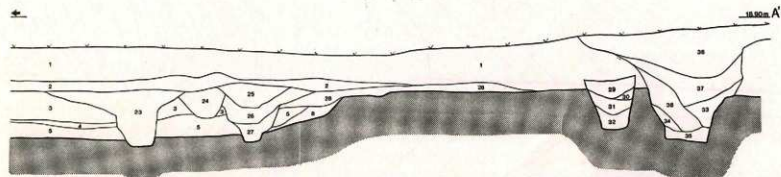
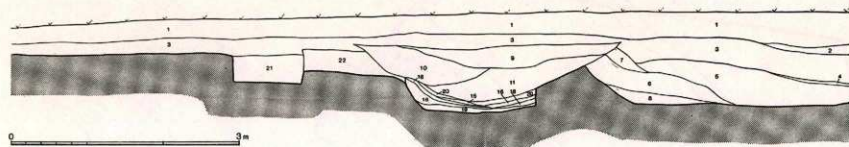
SD005は白色粒を含む土層中から掘り込まれた溝である。SD004とSD006は現地表からの掘り込みで、B区内で重複し、土層断面では、新旧関係はわからない。この三基の溝は削平された前方部コーナー上から前方部前面の墳衝に沿って掘り込まれており、この溝により墳丘が削られていることから、いわゆる根切り溝として掘られたものと思われる。前方部コーナーの開削が進行するにつれ、SD005からSD006、SD004の位置へと溝が掘り替えられたことが推定できる。

土壇(SH)は、円形、長方形、方形に大別され、大きさ、深さも様々であり、各土壇間の関連性はみあたらない。新旧関係の判明しているものをあげると古いものからSH009、SH010、SD003、SH019。またSH018、SD003、SH012、SH013である。
なお溝、土壇とも全て古墳構築後のものである。

(田中 正夫)

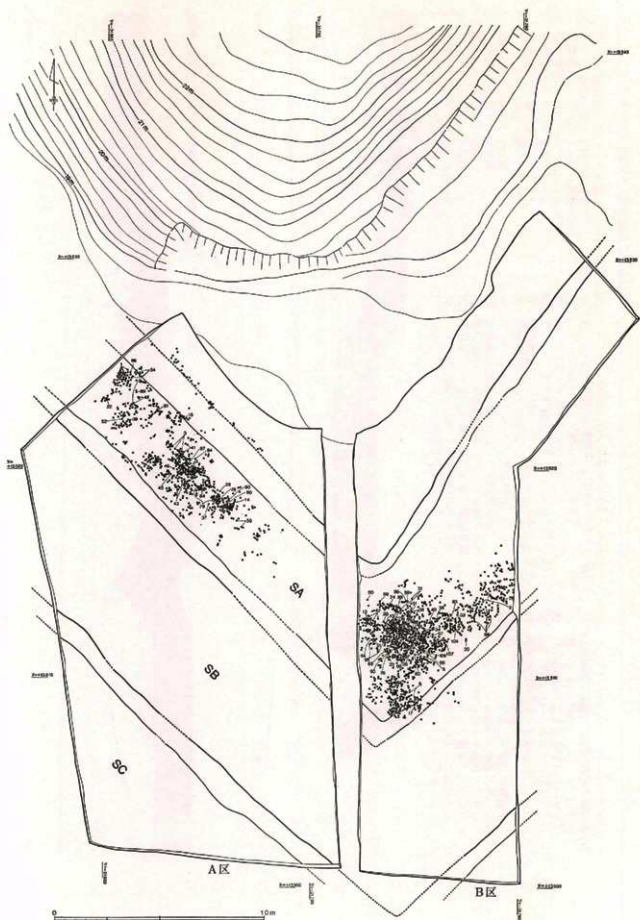


第4图 昭和54年度調査区全測図 (1/180)



- | | | |
|-------------------------|-----------------------------|--------------------------|
| 1. 暗褐色(表土 しまりあり、火山灰を含む) | 14. 黄褐色(ローム土に有機質が混入、しまり欠く) | 27. * (大径のローム粒含むしまる) |
| 2. * (1の火山灰を含まない部分) | 15. * (暗褐色土ブロックを含むローム土) | 28. 暗褐色(ローム土わずかに含む) |
| 3. * (大径のローム粒含む、しまる) | 16. 暗褐色(ローム粒をわずかに含む、灰色を帯びる) | 29. 褐色(ローム土を混入、しまる) |
| 4. 暗灰褐色(部分的に砂質) | 17. 黄褐色(小径の暗褐色土ブロックを含むローム土) | 30. * (小径のロームブロック含む) |
| 5. 黒褐色(有機質土 内埋覆土) | 18. 暗黄褐色(暗褐色土とローム土の混合土) | 31. 暗褐色(ローム粒わずかに含む 粘性あり) |
| 6. 暗褐色(灰色味のある粘質土) | 19. * (18よりロームの比率高い) | 32. 褐色(ロームブロック含む粘性あり) |
| 7. * (6よりやや明るい) | 20. 黄褐色(わずかに暗褐色土を含むローム土) | 33. 黒褐色(墳丘崩壊土) |
| 8. 暗灰褐色(中埋の崩壊土 しまる) | 21. 黄暗褐色(大径のロームブロックを含む しまる) | 34. 暗黄灰褐色(ローム土含む) |
| 9. 暗褐色(ローム粒わずかに含む) | 22. * (21と比較するとロームブロック少ない) | 35. 淡灰褐色(ロームブロック含む) |
| 10. 黄暗褐色(大径のロームブロック含む) | 23. 褐色(ローム粒わずかに含む) | 36. 黄褐色(有機質を多く含むローム土) |
| 11. 暗褐色(ロームブロック含む粘性強い) | 24. * (大径のローム粒わずかに含む) | 37. 褐色(粘性あり) |
| 12. * (微細なローム粒含む均質土) | 25. 褐色(ローム粒、黒褐色土ブロックわずかに含む) | 38. 暗灰褐色(上部に火山灰含む、粘性あり) |
| 13. 褐色(暗褐色土にロームが混入する) | 26. * (25と同様だが、しまり欠く) | |

第5図 昭和54年度調査区土層断面図(1/50)



第6图 昭和54年度調査区遺物出土位置図(1/180)

(二) 昭和五七年度調査区

昭和五七年度調査区は公園化以前、畑地として利用されていたということであり、遺構の遺存状況は良好であったが、調査区南西部の外堀部分は、陸田耕作により遺構の破壊が堀底近くまで及んでいた。

遺構は表土約六〇センチに存在するローム層上面（標高約一七・五〜一七・九）で検出することができた。

確認された遺構は内堀（SA）及び外堀（SC）、中堤（SB）、そして造り出し（SF）があり、中堤と外方を結ぶブリッジ（SJ）も発見されたが、外堀中央を走る中世の溝（SDOO）に切られている。

内堀（SA）

全体に良好な遺存状況を確認できた。中堤側の立ち上り平面プランは、土層観察用のセクションベルト付近で若干外方に膨らむ傾向が、そして、同じく南西部でわずかに蛇行するが、全体としては、直線的な状況といつてよいであろう。造り出し西方の中堤立ち上り付近には幅八〇〜一二〇センチ、長さ約七メートル及び、高さ五〜一〇センチのロームを掘り残した不整形のごくゆるやかな段が認められる。

後内堀の基底部ラインが、あまり遺存の良い状況といえないまでも検出された。その中堤との間が最も狭くなる堀底での幅は約八・二メートル、造り出しと中堤で最も狭くなる部分は、堀底幅で同じく八・二メートルである。

深さについては、後内堀基底部から西方の内堀中央付近が標高約一六・八〜一六・九メートルで、調査区内の内堀では最も深く、中堤に近づくと徐々に浅くなり約一七・一メートルと中央より一〇センチ程浅い。造り出しのすぐ北西、セクシ

ンベルト付近は約一七・二メートル、中央部から中堤際では約一七・三メートルである。ここから造り出しの西隅から四層前後の付近にかけては、内堀内で最も浅い部分であり標高約一七・三メートル、そこから一七・一メートルを測る内堀の調査区西南端まで徐々に深くなってゆく。前方部基底部付近では一七・四メートル、反対側の中堤寄りでは一七・二メートルと少々浅くなる。内堀中央の底部の深さは、以上のとおり造り出し西方部がやや浅く、後内堀西方部分で最も深くなっており、その差は二〇センチ強である。また、前方部南方部分でも約一〇センチ強のレベル差しかないが、造り出し付近から後内堀、前方部方向への傾斜を指摘してもよいかも知れない。しかしながら、前述の中堤際のゆるい段を除けば、段が付いて深さが変化している場所もなく、視覚的には全体として、平坦といえるだろう。

立ち上り部分については、直線的または外方に湾曲するような立ち上り方をしており、中堤検出面（ローム上面）とは四〇〜六〇センチの比高差を有する。後内堀基底部及び造り出しでは約二〇センチ、前方部基底部では約七〇センチの比高差がある。

覆土の堆積状況（第8図参照）は、まず、墳丘及び中堤からローム粒又はロームブロックを含む土砂が流入し、その上をローム粒を含む黄ないし黒褐色土が覆う状況である。この黄ないし黒褐色土層は上部が耕作土と考えられる明褐色土と不整合状態にあり、その一部が堀底まで達している。

覆土の珪藻分析の結果（詳細は第V章参照）によれば、その珪藻の検出状況から、流動する程度の水が灌えられた時期があったことが推定された。

中堤（SB）

表土下約五〇〜六〇センチのところでもローム層を検出し、確認したものであ

る。表土層下の明褐色土は火山灰を含み、耕作土と考えられる土層でローム層をわずかに削っているものと推定されるが、調査区内では、攪乱などによる大きな破壊は認められず、比較的遺存状況は良好であり、外堀を渡り、外方と連絡するブリッジも造り付けられている。

内、外堀の底からの立ち上り部分（基底部）での幅は調査区南部分で約七・五呎、ブリッジ付近で約八・三呎、調査区北部で約八・二呎と極端な差はなく、ほぼ直線的な状況としてよいであろう。しかし調査区が後円部北方にまで及んでいないので、中堤全体の平面形態を判断できる状況ではない。

また、外堀内から多数の埴輪が出土したので、中堤上の樹立位置を把握すべく、その樹立痕の検出に努めたが、残念ながら確認することはできなかった。

外堀 (SC)

堀の中央部を貫通するように、溝 (SD001) が開削されており、その底部は堀底のはるか下方にまで及ぶ深さを有している。また、調査区南西部分は公園化以前、陸田として利用されていたということで、南西壁から五〜七呎の範囲では堀底に達する深さで、主に立ち上り部分が破壊を被っている。

以上の破壊部分はあるものの、平面的形状は内堀、中堤の立ち上りとはほぼ平行するような状況にあり、直線的である。幅は調査区南西部の立ち上り部分で約六・五呎、土層観察用のセクションベルト南西で発見されたブリッジ付近で約六・三呎、調査区北部の、同じく立ち上り部分で、約六・一呎と、数値にさほどの開きはなく一定幅といつてよいだろう。

深さについては調査区南西の中堤側立ち上り部寄りで標高約一六・九呎で、中堤のローム上面とは約五五センチの差がある。同じくそのSD001付近、

堀中央では一六・九〜一七・〇呎と外堀内は勿論、内堀を含めて、今回の調査区内の堀のどの部分よりも深い部分である。外側立ち上り寄りで標高一七・一呎で、外側のローム層上面とは約四〇センチの比高差を有する。ブリッジ南側では中堤立ち上り寄りで標高約一七・一呎、中堤のローム上面とは比高差約四〇センチ、SD001付近で一七・〇呎、外側立ち上り寄りで約一七・二呎とやや浅目となり、上方のローム層上面とは約六〇センチの比高差を有する。ブリッジの北側では中堤立ち上り寄りで標高一七・一呎、中堤のローム層上面とは比高差約四〇センチ、SD001付近で一七・一〜一七・二呎、外側立ち上り寄りで約一七・三呎とやや浅くなり、外側のローム上面との比高差は約五〇センチである。北東寄りの部分では中堤寄りの立ち上り部分の標高が約一七・三呎、SD001付近で一七・一〜一七・二呎、外側立ち上り寄りで一七・二呎、外側のローム上面との比高差は約六〇センチである。

以上、ブリッジの南側は北側より二五〜三五センチ深くっており、やや深目に掘削されているといえるであろう。堀底の傾きについてはブリッジ北側の部分で浅深の差が約一〇センチで、調査区北東壁側で浅くなる傾向を、また、ブリッジ南側ではこれも浅深の差が約一〇センチで南西方向が深くなる傾向を認めて良いかも知れないが、内堀同様、視覚的にはほぼ平坦といえる状況である。立ち上りについては、直線のか又は外側にゆるく湾曲気味に立ち上っているが、中堤又は外方のローム上面までは約四〇〜五〇センチの比高差があり、立ち上り角度も六〇度を超える急な部分もある。

覆土の状況（第8図参照）は、中堤及び外側の立ち上り付近にロームブロック、ローム粒を含む黄〜黒褐色土が流れ込むように堆積した後、ローム粒を含む明褐色土がその上に堆積しており、さらにその上を火山灰（軽石粒）

を含む明褐色土層がやや厚目に覆っているのが一般的な状況である。

外堀覆土についてはブリッジの南西約七層付近の土層観察用セクションベ
ルトから珪藻分析及び鉍物分析用のサンプルを採取し分析を実施したが（詳
細は第V章参照）、その結果では、珪藻の含有率が少なく、内堀ほどは湛水
していなかった可能性が大きい。また、覆土上層部分の土層には浅間B降下
スコリア・軽石と考えられる火山灰が含まれており、このことから外堀は、
その降下年代が示す一二世紀前後には、遺構検出面であるローム層上位まで
埋没が進行していたことを物語っている。

遺物の出土についての詳細は、後述するが、ブリッジの南西から形象埴輪
がまとまって出土した。それらの主要なもの出土状況は中堤側立ち上りか
ら、堀底中央のSD001にかけての出土であり、堀底等の遺構面にはとん
ど接する形で出土しているので、堀の埋没の開始後あまり時間を経ずに中堤
側上方から転落してきたものと考えられる。本来の樹立位置は中堤の外堀寄
りと推定される出土状況だが、その痕跡が発見できなかったことは中堤の項
で述べたとおりである。

前方部基底部

調査区南西端でわずかに前方部の基底部分（周堀の掘削により形成される、
墳丘の載るローム部分）を検出した上面であるローム面と堀底の比較差は六
〇〜八〇センチで、立ち上りは直線的かつやや急な立ち上りである。調査区外
にさらに直線的に延びるような状況にあるのは前方部コーナリーの封土が流出
していることを示すものであろう。

後円部基底部

調査区東部で、わずかな部分が検出された。上面のローム面と内堀底との

比高差は一〇〜二〇センチ、最大でも二〇センチ強であり、調査区の後円部墳丘
側壁面付近は、根切溝と考えられる、ロームブロックを含むしまりのない土
を覆土とする溝により破損しており遺存は良いとはいえない状況である。平
面形態をみても、立ち上りラインが蛇行するように、鈍い弧を描いており、
後世の耕作等による破壊が考えられる。

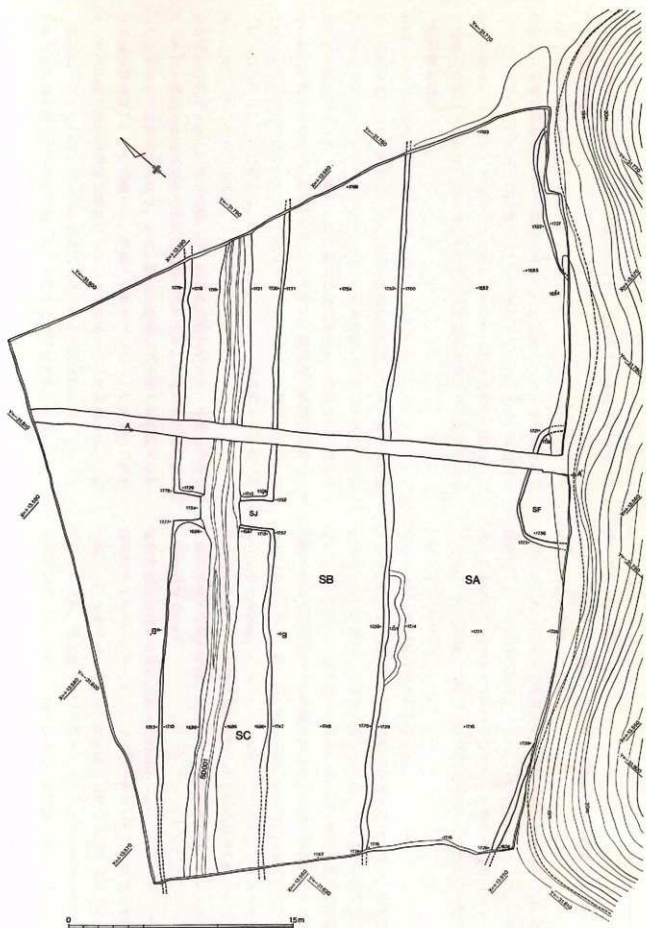
造り出し(SF)

調査区東南の壁の中程、ちょうど土層観察用のセクションベルトにかかっ
て検出された。ローム層を削り残してその基底部を形成しており、盛土があ
ったか否かは確認できなかった。内堀底と上面のローム面との比高差は二〇
〜三〇センチであり、墳丘側の部分は後円部基底部で検出されたのと同様の根
切溝と考えられる溝により破損している。平面形態は、そうした破損がある
が、長辺が約八・二層を超える隅丸の長方形（前方部側の外方隅がやや張出
す状況なので、必ずしも適切な呼び方とはいえないかも知れない）である。
なお、造り出し部分では、須恵器片の出土があったが、祭祀行為と考えら
れるまとまった遺物の出土はなかった。

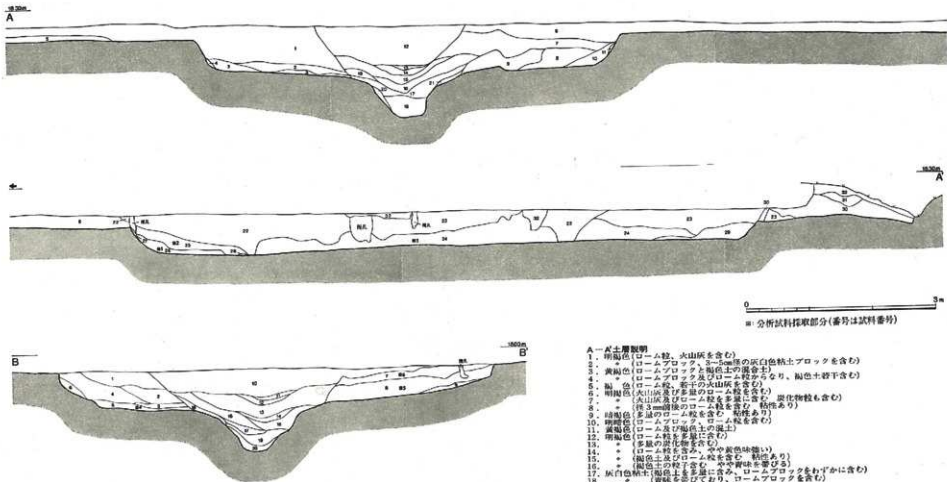
ブリッジ(SI)

当初、二子山古墳や稲荷山古墳と同様の造り出しの存在を期待していた中
堤の外堀側部分で発見されたものである。基部での幅は二・一〜二・五層、
確認面ローム上面での幅は一・六〜二・〇層で、ロームを掘り残して作られ
ている。立ち上りは西側部分でやや緩慢な状況であるほかは、外堀の中堤側、
外方側と同じ状況といつてよい。

なお、ブリッジ中央は、外堀の中央を走る後世の溝(SD001)により破
壊されている。



第7図 昭和57年度調査区全図(1/250 調査区内の数値は標高を示す。単位:m)



日一土層説明

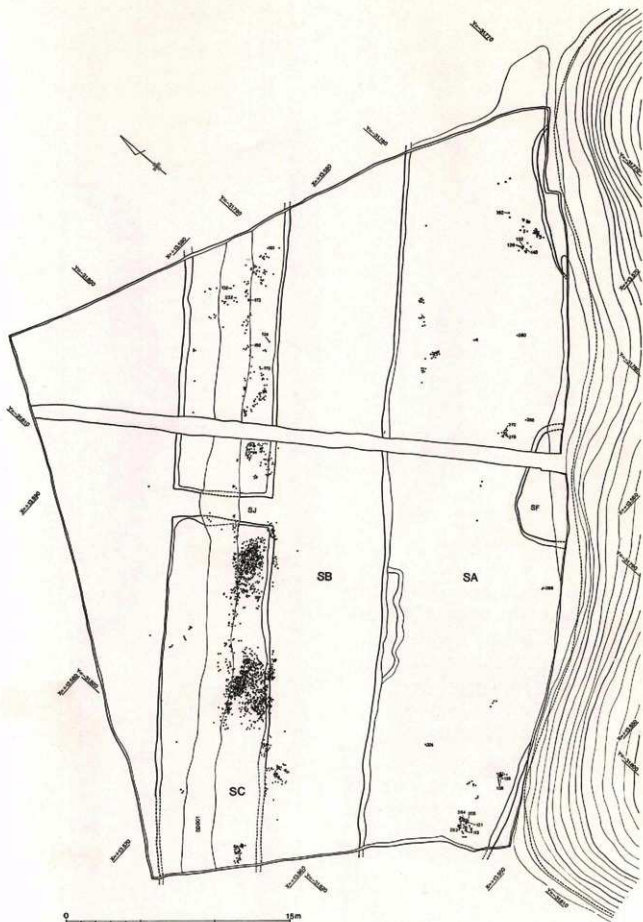
1. 黒褐色(ローム粒を含む)
2. * (ローム粒を若干含む粘性あり)
3. * (ローム粒を若干含む)
4. * (ローム粒わずかに含む粘性あり)
5. 黄褐色(ローム及び褐色土の混土)
6. * (5よりやや暗い)
7. 黒褐色(褐色土と黒色土の混土、火山灰を含む)
8. * (ロームブロックを多量に含む、若干の褐色土、火山灰を含む)
9. * (ロームブロックを多量に含む)
10. 褐色土(ロームブロック、ローム粒を含む)

11. 褐色土(炭化物粒を多量に含む)
12. * (ローム粒、灰白色粘土ブロックを含む)
13. * (きめが荒く、ロームブロックを含む)
14. 灰白色粘土(ローム粒を含む、やや黄褐色を帯びる)
15. * (ローム粒含む、やや青味を帯びる)
16. * (部分的に褐色土を含む)
17. * (ローム粒わずかに含む、青味を帯びる)
18. 暗褐色(ローム粒をわずかに含む)
19. 灰白色粘土(多量のロームブロックを含む)
20. * (チャゴレト色の粒子を多量に含む)

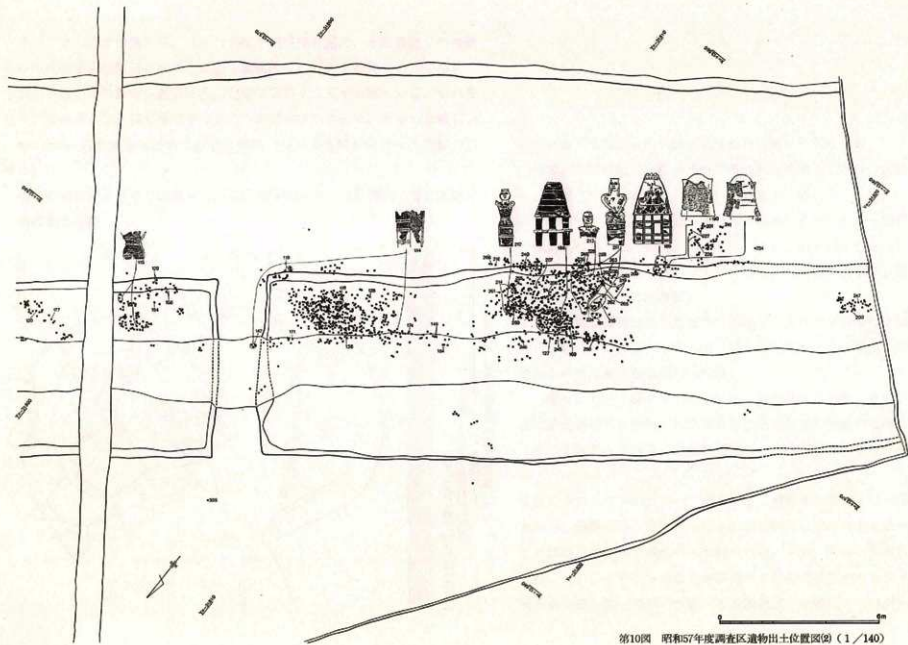
A—土層説明

1. 暗褐色(ローム粒、火山灰を含む)
2. * (ロームブロック、2-3mm程度の灰白色粘土ブロックを含む)
3. 黄褐色(ロームブロックと褐色土の混土)
4. * (ロームブロック及びローム粒からなり、褐色土若干含む)
5. 褐色(ローム粒、若干の火山灰を含む)
6. 暗褐色(火山灰及び多量のローム粒を含む)
7. * (火山灰及びローム粒を多量に含む、炭化物粒も含む)
8. * (径3mm程度のローム粒を含む、粘性あり)
9. 暗褐色(多量のローム粒を含む、粘性あり)
10. 暗褐色(ロームブロック、ローム粒を含む)
11. 黄褐色(ローム及び褐色土の混土)
12. 暗褐色(ローム粒を多量に含む)
13. * (ローム粒を含む、やや黄褐色強い)
14. * (褐色土及びローム粒を含む、粘性あり)
15. * (褐色土の粒を含む、やや青味を帯びる)
16. * (褐色土の粒を含む、やや青味を帯びる)
17. 灰白色粘土(褐色土を多量に含む、ロームブロックをわずかに含む)
18. * (青味を帯びており、ロームブロックを含む)
19. 暗褐色(径1cm程度のロームブロックを含む)
20. 灰白色粘土(褐色土の粒子を多量に含む、粘性あり)
21. * (褐色土を多量に含む、明るい色調)
22. 暗褐色(ローム粒を含む、白っぽい)
23. * (ローム粒を含む、白っぽい)
24. 暗褐色(径3-5mmのローム粒を含む)
25. 暗褐色(ローム粒と若干の火山灰を含む)
26. 黄褐色(しまりを欠き、多量のロームブロックを含む)
27. * (ロームにわずかに褐色土が混入)
28. * (ロームブロック)
29. * (ローム塊褐色土の混土、しまりを欠き、傾丘及び盛り出しの崩壊土と思われる)
30. 暗褐色(全量にローム粒を含む)
31. * (青味の強い粘性土)
32. 黄土(耕作土)

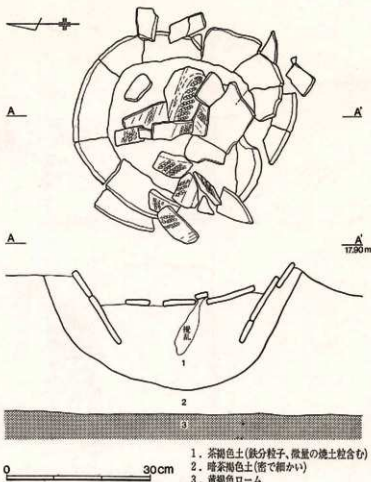
第8図 昭和57年度調査区土層断面図 (1/80)



第9図 昭和57年度調査区遺物出土位置図(1) (1/250 外堀ブリッジ南西部分は第10図を参照)



第10图 昭和57年度調査区遺物出土位置図(1/140)



第11図 外堀外方縄文土器出土状況(1/8)

1. 茶褐色土(鉄分粒子、微量の焼土粒含む)
2. 暗茶褐色土(極めて細かい)
3. 黄褐色ローム

その他の遺構

古墳に直接係りのない遺構としては、溝SD001及び縄文土器の埋蔵がある。

SD001は外堀中央部をわずかに蛇行しながら縦断するように位置しており、深さについては外堀底から六〇〜八五センチを有する。断面の形態は、一旦やや緩やかな傾斜で堀底約三〇センチ位のレベルまで掘り下げ、そこからさらに急角度で底面に至る。所謂「箱葉研」の形態を基本としている。

ブリッジ付近から東では、こうした堀が重なる状況が、平面形態からも看

取できるが、粘土層などの覆土の堆積状況から数回に及ぶ掘り直しが推定される。また、そうした灰白色系の粘土が底部に堆積する状況から、流水していた時期が長期に及んだことも誤らない。また、同じく断面の観察の結果であるが、掘削面は、外堀覆土の上方から及んでいることは明らかで掘削面の幅は少なくとも三層以上、深さも一・五層前後はあったものと推定される。

溝の時期については、外堀を破壊しているもので、その覆土中に含まれる埴輪及び須恵器片を出土しているほか、中世のものと考えられる陶器片がわずかにある。外堀の覆土を上方から切り込む状況にあり、中世の、館跡を囲む堀削や農業用水利の可能性もある。

この他、これも明らかに古墳と係りを持たないが、縄文時代中期のキャリパー形土器の体部上方を利用した埋蔵が、ブリッジ北西約一層付近から発見された。(第10、11図参照)

遺構の検出作業時に発見されたもので、直径約五五センチ、深さ約二五センチの半球状の掘り込み中に埋設されたもので、掘り込みの下方は、ローム層に達していない。土器の内側の覆土には微量ではあるが焼土粒が包含されており、炉囲いとして機能していたことを窺わせる。

なお、住居跡内に付設された炉の可能性もあったので、周囲を精査したが、柱穴と考えられるような掘り込み等は発見されなかった。

(杉崎 茂樹)

二 遺物

昭和五四、五七、両年度の調査区で出土した遺物とは埴輪、須恵器片、土師器片、鉄器片、縄文土器、等がある。しかし、調査区が古墳の周堀及び中堤ということで、大部分は埴輪であり、しかも、周堀の覆土内からの出土で、本来の樹立位置に留まっていると考えられるものは皆無である。しかし、昭和五七年度調査区の外堀部分からは比較的多まった点数の形象埴輪が出土し、瓦塚古墳の埴輪祭祀を考えるうえで良好な資料を得ることができた。

また、昭和五七年度調査区から、型式を同定できる須恵器が出土しており、古墳の年代を考えるうえで重要である。

以下、各年度の調査区出土遺物の出土位置及びその概要を記す。各遺物の詳細については観察表を作成してある。

なお、円筒埴輪として扱ったものの中には形象埴輪等の台部の可能性のあるものも含まれること、須恵器、土師器片については細片で、図示にやや難のあるものもあるが、年代考定上重要であることから極力作図掲載したことを付記しておく。

第12図以下に掲げる円筒埴輪の実測図の断面で、口縁部内外及びタガの周堀の細線の範囲は、仕上げのためのヨコナデの施される範囲を示している。

円筒埴輪の場合、こうしたヨコナデは例外なく施されるものであり、観察表ではその、記述は大部分の場合省略した。また、遺物出土状況図(第6、9、10図)及び写真図版中の遺物に付した番号は、実測図の番号と共通のものである。

(一) 昭和五四年度調査区出土遺物(第12、22図、1、112)

昭和五四年度の調査区は前方部南側コーナーの内堀及び外堀である。出土量は調査面積にもよるが、外堀では少なく、内堀に多かった。内堀内ではA区内の前方部前面部とB区内のコーナー部に、集中する箇所があり(第6図参照)、このうち、A区、前方部前面部の集中部分では堀底に近いレベルでの出土も多く、堀の埋没開始後あまり時間を経ないうちの上方向からの転落を示す状況にある。また遺物の種類は須恵器片もわずかに出土している。埴輪はいずれも破片の出土で、本来の樹立位置は前方部墳丘基底面上とも、中堤上とも決しがたい。一方、B区のコーナー部の集中部分でも円筒埴輪片が多数出土したが、編覆土下層からの出土が大部分で、上方からの転落を示している。これらは中堤側にやや片寄った出土状況にあり、中堤の内堀寄りの樹立品の破損、転落を推測させるものである。なお、調査区内の中堤上、及び前方部基底面上で、埴輪の樹立痕跡は発見されなかった。

出土した遺物は、埴輪片が大部分で、破片数は多いが、完形品はなく、確認し得る限りでは全て円筒埴輪である。製作技法としては粘土紐を巻き上げて成形し外面をタテ、ハケメで仕上げ、内面にはハケメ及びナデを施しており、ごく一般的な技法によっている。底部に押圧やケズリを加えて調整するものは見られない。タガについては、やや扁平な台形のもの「M」字形を代表としているが、その中間的なものや、ごく扁平なもの、くずれたものも多い。

スカシについては確認し得る限り、2、57、59のように円形(又は不整形)で穿孔後、その穿孔面をナデやオサエにより仕上げているものもある。

底面には3、84、86、94に見られるような禾本科植物の茎と思われる棒状の
圧痕を残すものが多く、そうした上で製作が行われたことを示している。こ
の他、円筒埴輪の内面にヘラ描による黒印の認められる破片があった(80、
108)。いずれも「x」という記号と考えられる。

埴輪以外では、甕と器台の一部と考えられる須恵器の小破片がA区内堀か
ら出土した。甕は内外にタタキメが認められ、器台は表面に桶描波状文が施
されている。小破片のため形式は判然としない。

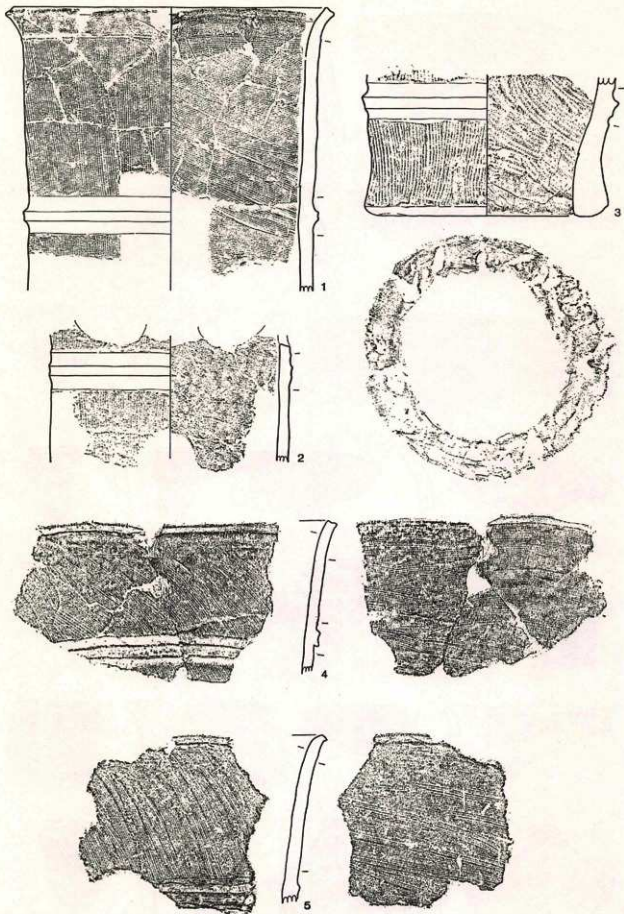
(二) 昭和五七年度調査区出土遺物(第23、42図、113、323)

昭和五七年度調査区内では、主に内堀、外堀から遺物が出土した(第9図
参照)。埴輪では普通円筒、朝顔形円筒の他、形象の家形や器材(盾形、大
刀形)、馬形、人物(男子、女子)などがあり、その他須恵器、土師器片な
ども出土した。このうち、形象埴輪の多くは外堀内のブリッジ南西部分の中
堤寄りから集中して出土し(第10図)、188、189の家形埴輪を中心とし、それ
を巻くような形で配置される211、212などの人物や190、191などの盾形から構成
された形象埴輪の密集して樹立された区域の存在が推定される。なお188の家
形は、桁行、梁行ともに2間で寄棟造の屋根を有し、これを支える8本の柱
が円柱を表現し、吹放ち高床を有する家屋で、類例の稀なものである。人物
は212の女子(ほとんど完形)のほか、頭部を推定して復原したが、211の胡座
弾琴の男子などがあり、この他、人物に付属すると考えられる大刀の破片や、
鉄留を表現する冑、あるいは天冠の一部と考えられる破片もあるので男子埴
輪は武人や盛装男子など総数8体以上、女子人物は、島田髷や鈴鏡の破片な
どから巫女を含め6体以上の樹立が考えられる。この他、ブリッジのすぐ南

側の外堀中堤寄りの部分にも埴輪の集中して出土する部分があり、ブリ
ッジの北側でも、中堤寄りに形象埴輪を含む埴輪の出土が認められるので、
中堤上の外堀寄りには、前述の密集樹立区域以外にも円筒埴輪を中心とし、
これに形象埴輪が点々と加えられた埴輪列の存在が考えられる。

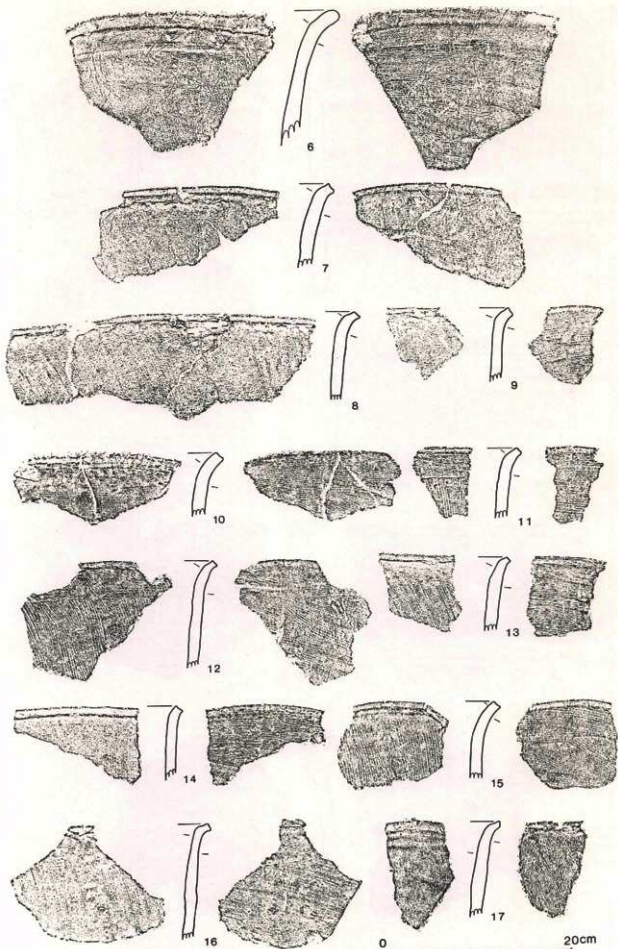
円筒埴輪については、破片は多数あるが、完形品またはそれに近い形にま
で復原できたものはなく、ある程度、形骸が判明したものが数点であった。
113はそのうちの一点だが、口縁径は約三五センチ、高さはプロポーションから
すると七〇センチ前後となるうか。図示した最下位のタガの下方に上方のもの
と直交する位置にスカシが認められ、最下段(基底部)ので、さらにこの下
に一条のタガの存在は確実である。そうした場合、四条タガの五段構成の円
筒埴輪ということになる。114はこれより、一回り大きな個体かと思われる。
前方部出土品の4や6のように口縁部径が四五センチ近くと推定されるものが
あり、145、149等は直径も三五センチ前後あるので、そうした大形品の一部と考
えられる。また、160、165のように直径がやや小さいものもあり、円筒埴輪の
形状は数種の類型を持つようである。115、116は朝顔形円筒埴輪で、体部の径
は115が二五センチ、116が二四センチである。なお、円筒埴輪の成形、調整、スカ
シ等の特徴は、昭和五四年度調査区の項で述べたものと変わるところはない。
須恵器は、269、270、286が造り出し周辺からの出土で、造り出し上の祭祀に関
係する可能性がある。その他のものも多くが内堀内からの出土である。
この他内堀から出土した。刀子等の茎と考えられる。鉄製品(324)や、古墳
と直接関係ないが、縄文土器片が数十片ある。305は外堀ブリッジ北から出土
した埋壙炉に使用が考えられるもので、これを含め中々後期にかけての破片
が大部分を占め、外堀ないし中堤部分の出土である。

(杉崎 茂樹)

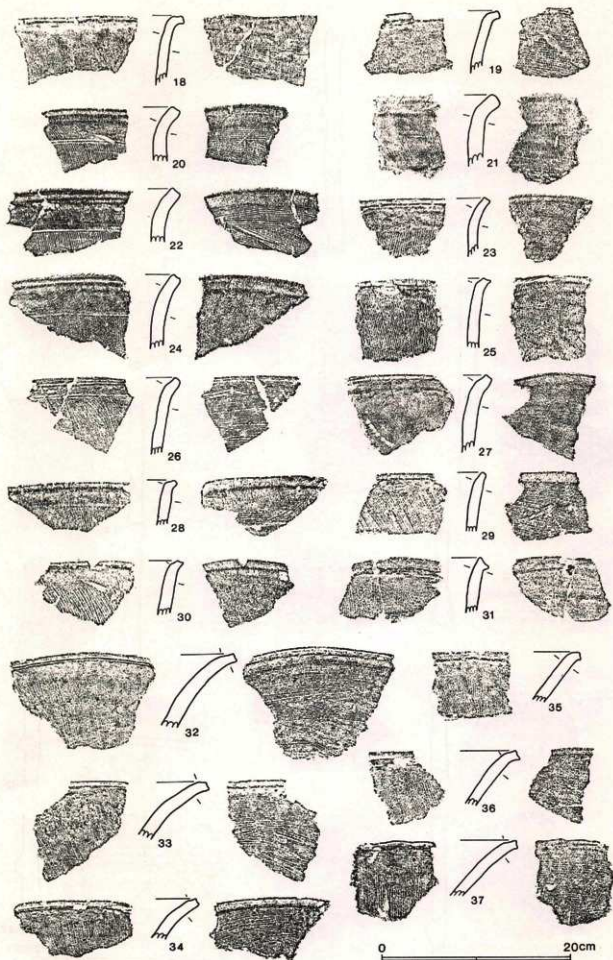


0 20cm

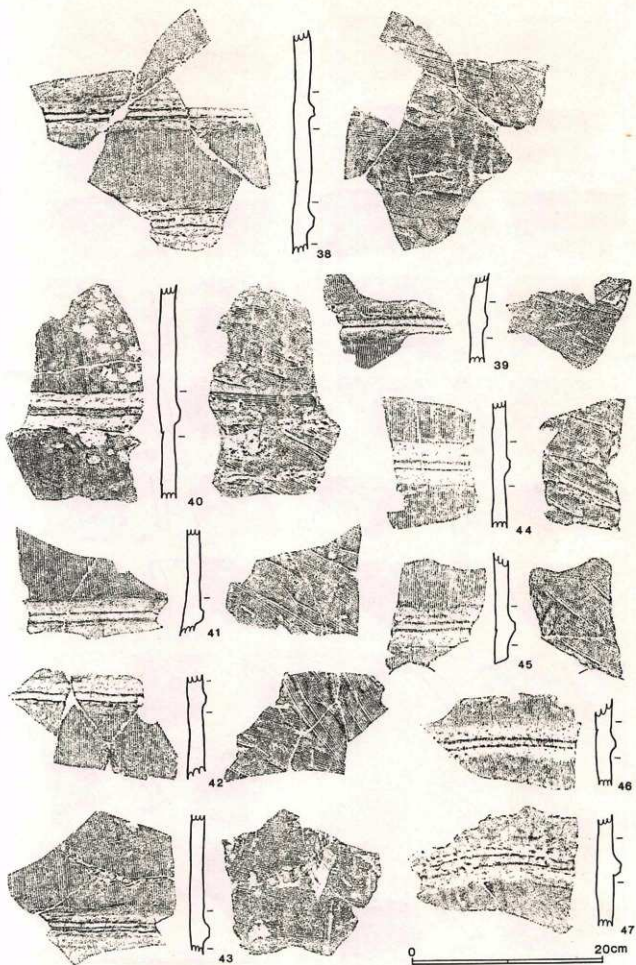
第12图 昭和54年度調査区出土遺物 1 (1~5)



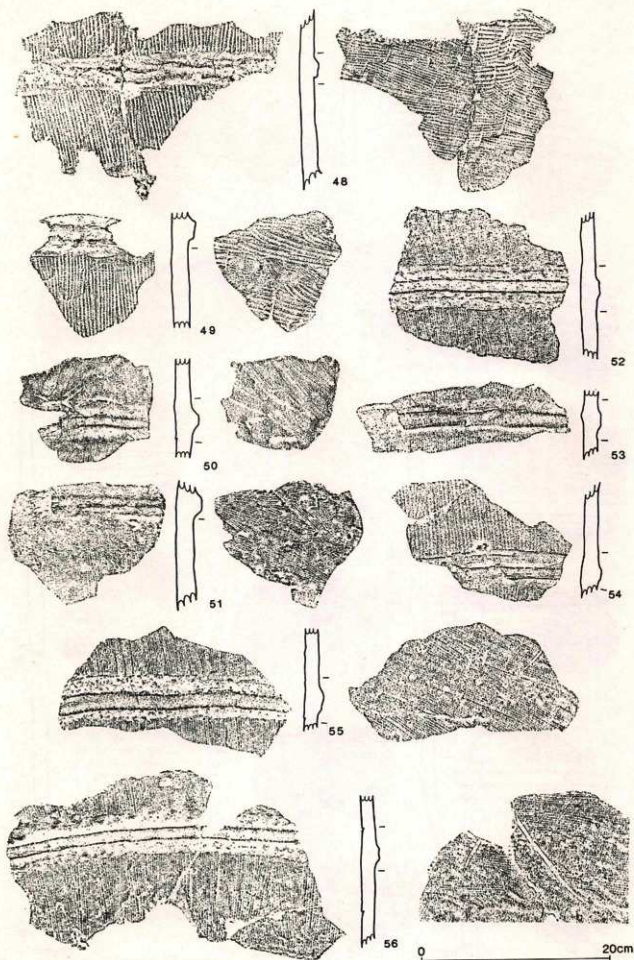
第13圖 昭和54年度調査区出土遺物 2 (6~17)



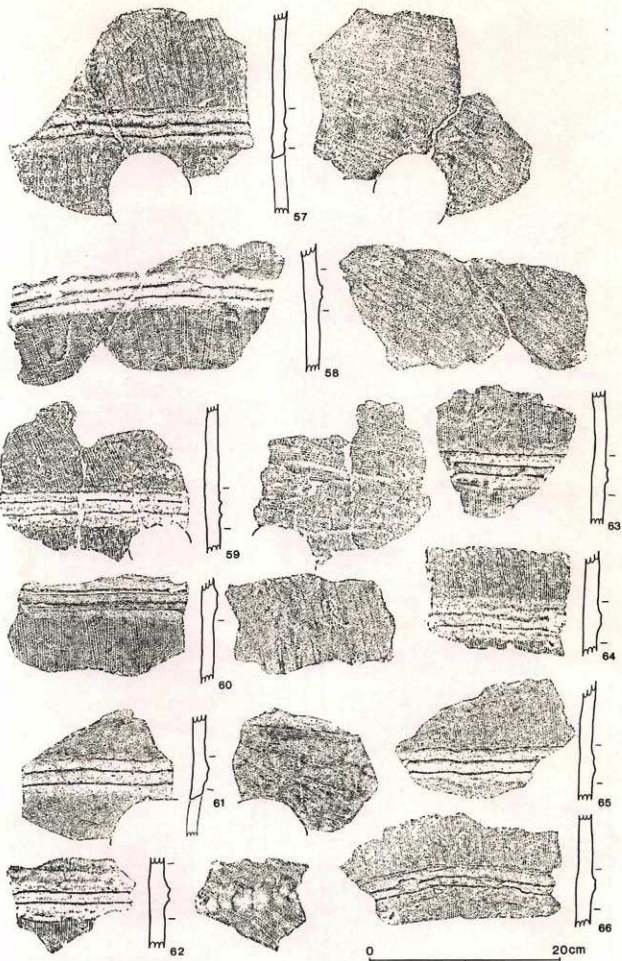
第14图 昭和54年度調査区出土遺物 3 (18~37)



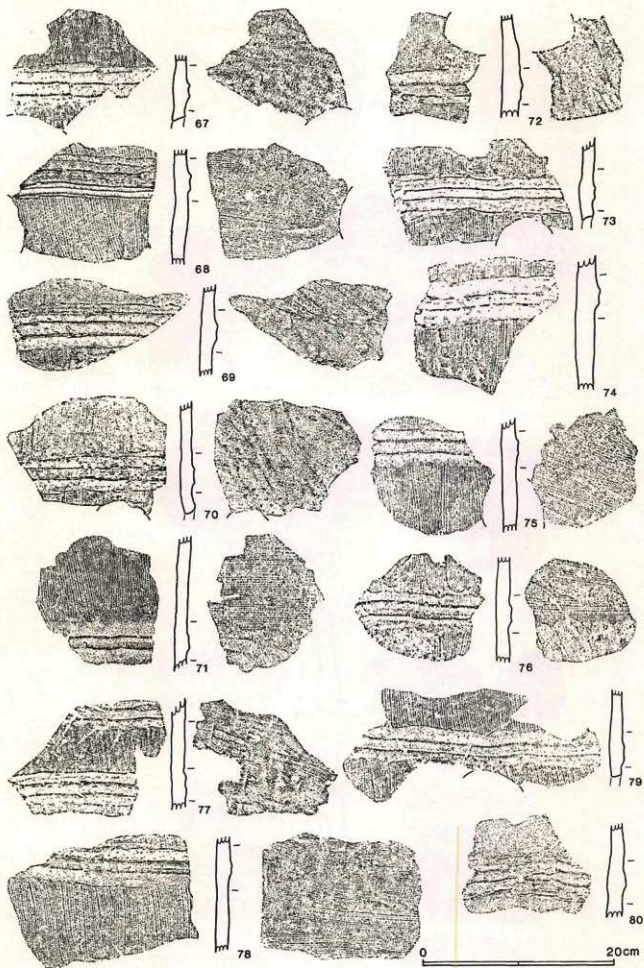
第15图 昭和54年度調査区出土遺物 4 (38~47)



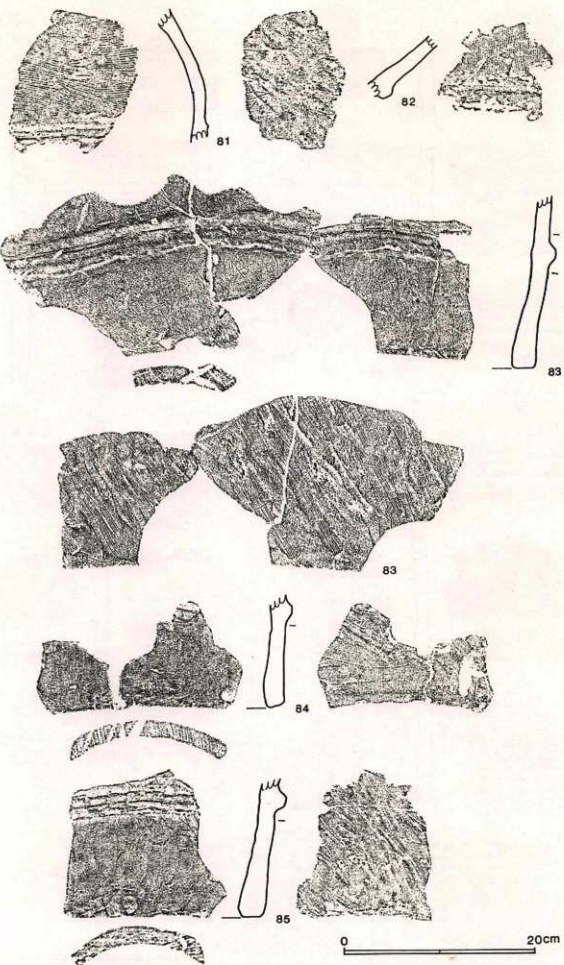
第16图 昭和54年度調査区出土遺物 5 (48~56)



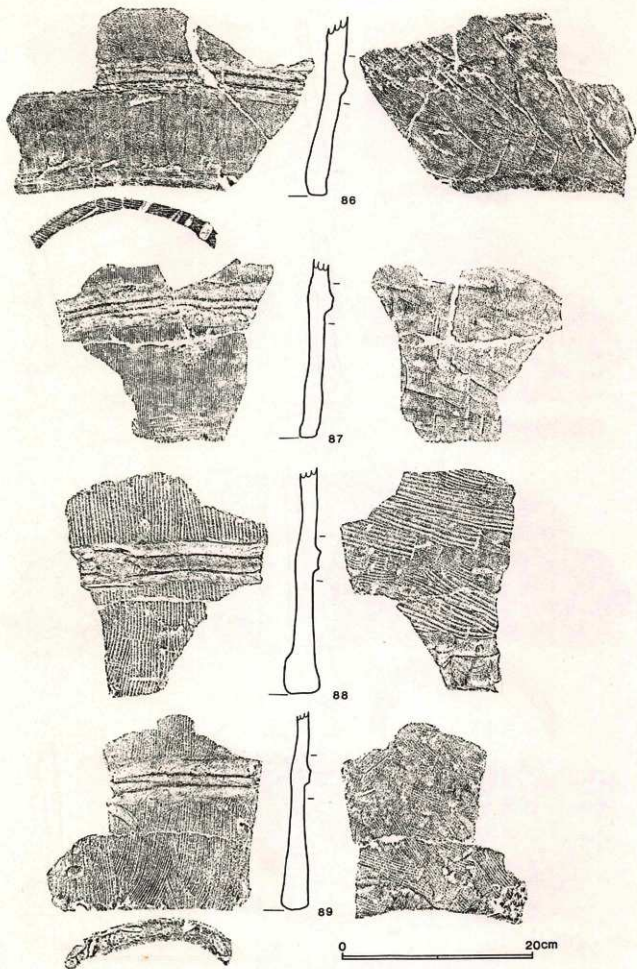
第17图 昭和54年度調査区出土遺物 6 (57~66)



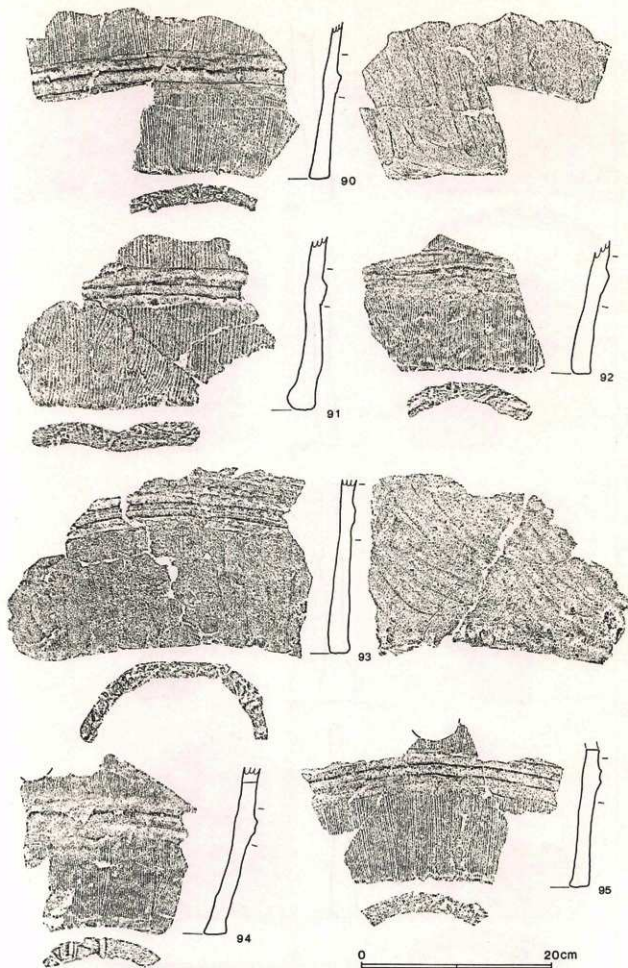
第18图 昭和54年度調査区出土遺物 7 (67~80)



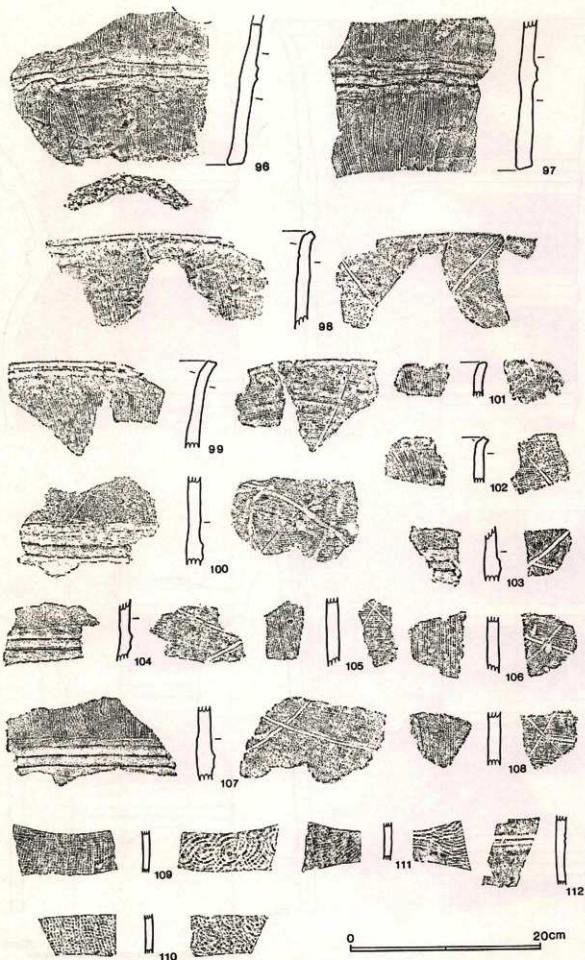
第19圖 昭和54年度調査区出土遺物 8 (81~85)



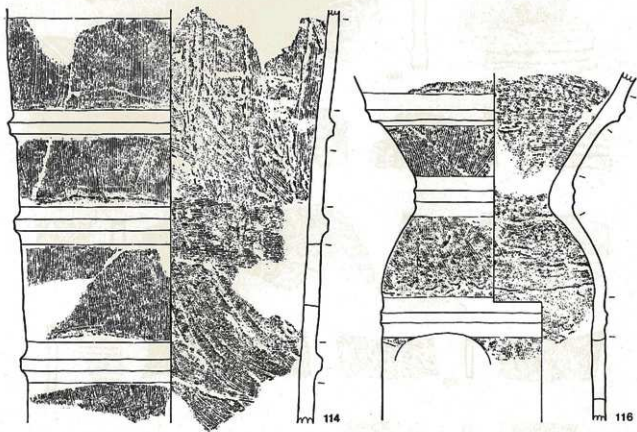
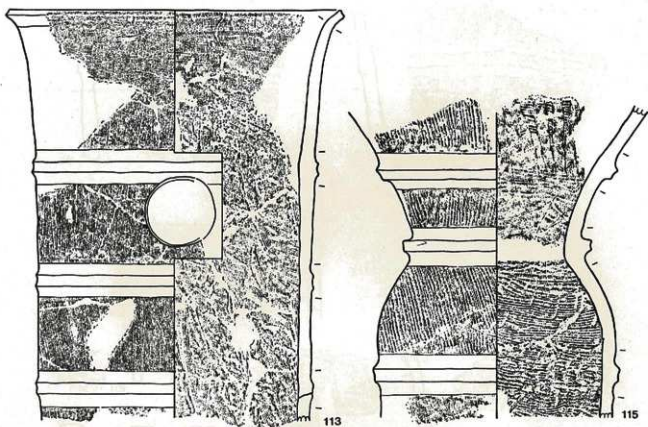
第20图 昭和54年度調査区出土遺物 9 (86~89)



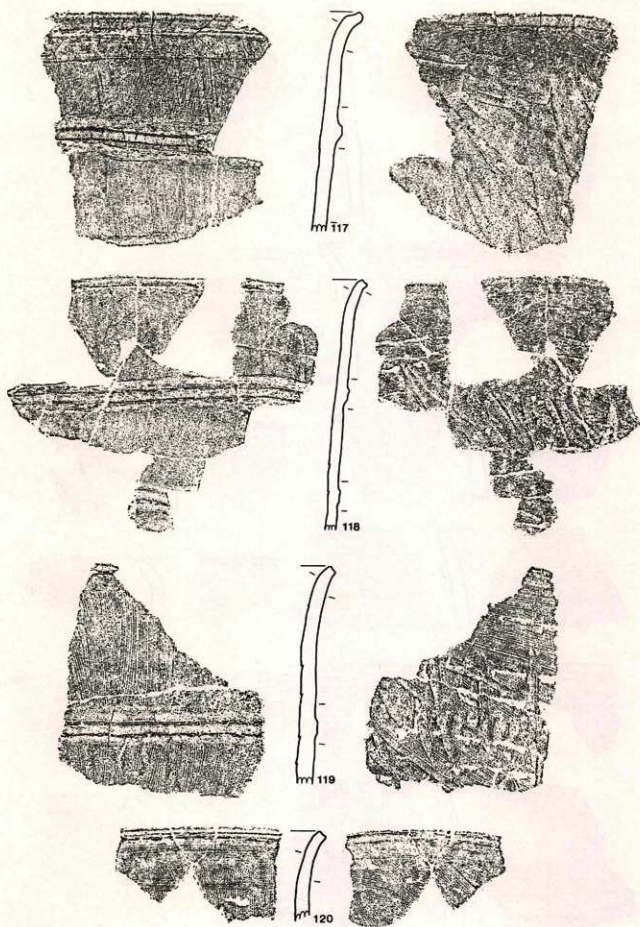
第21图 昭和54年度調査区出土遺物 10 (90~95)



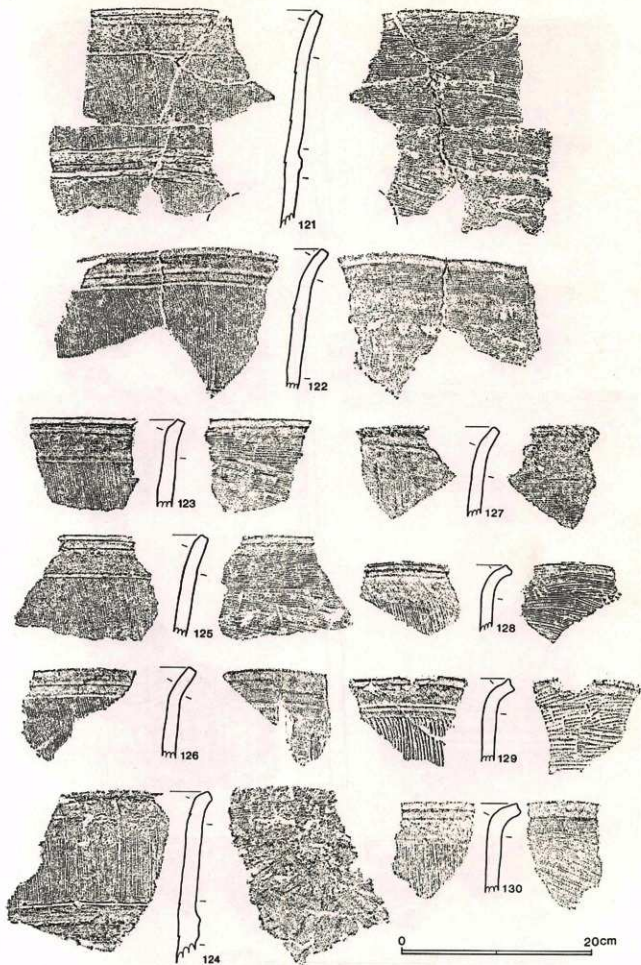
第22图 昭和54年度調査区出土遺物 11 (90~112)



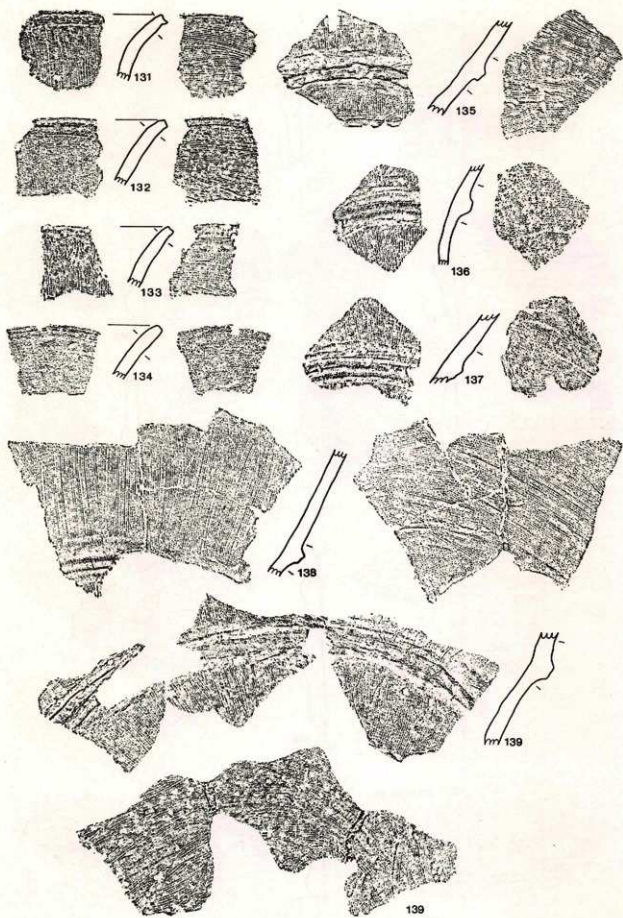
第23图 昭和57年度調査区出土遺物 1 (113~116)



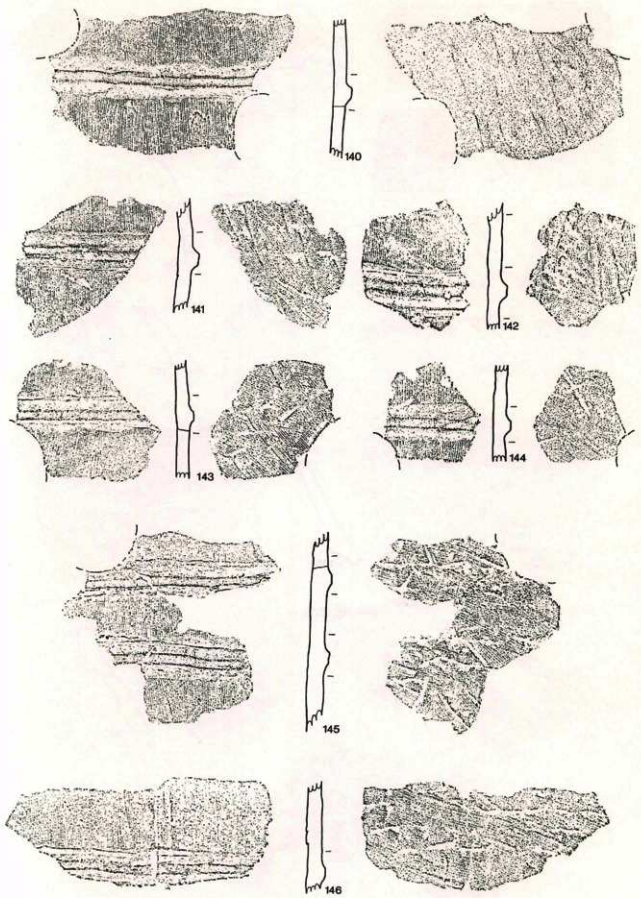
第24图 昭和57年度調査区出土遺物 2 (117~120)



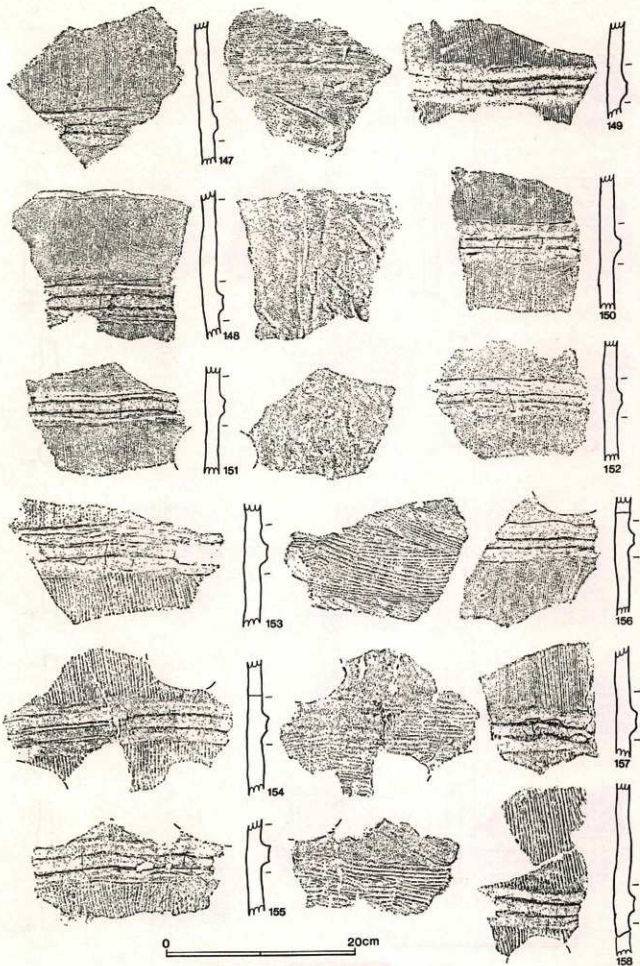
第258图 昭和57年度調査区出土遺物 3 (121~130)



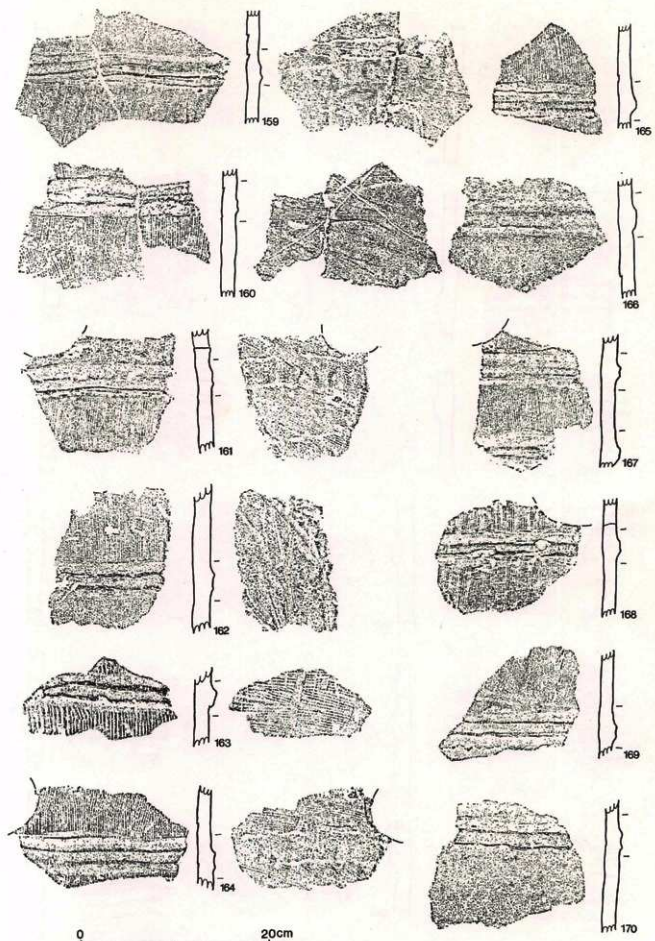
第26图 昭和57年度調査区出土遺物 4 (131~139)



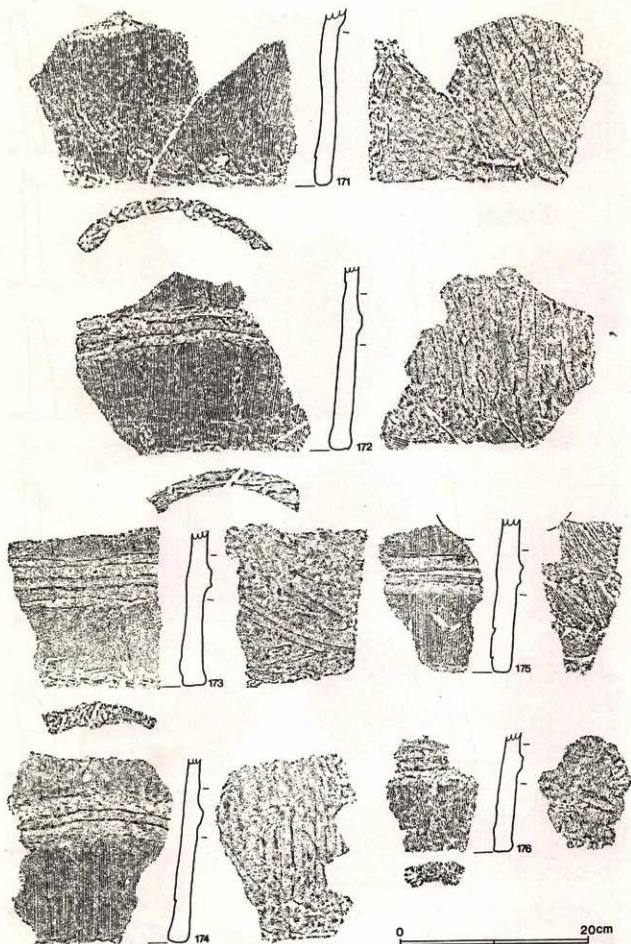
第27图 昭和57年度調査区出土遺物 5 (140~146)



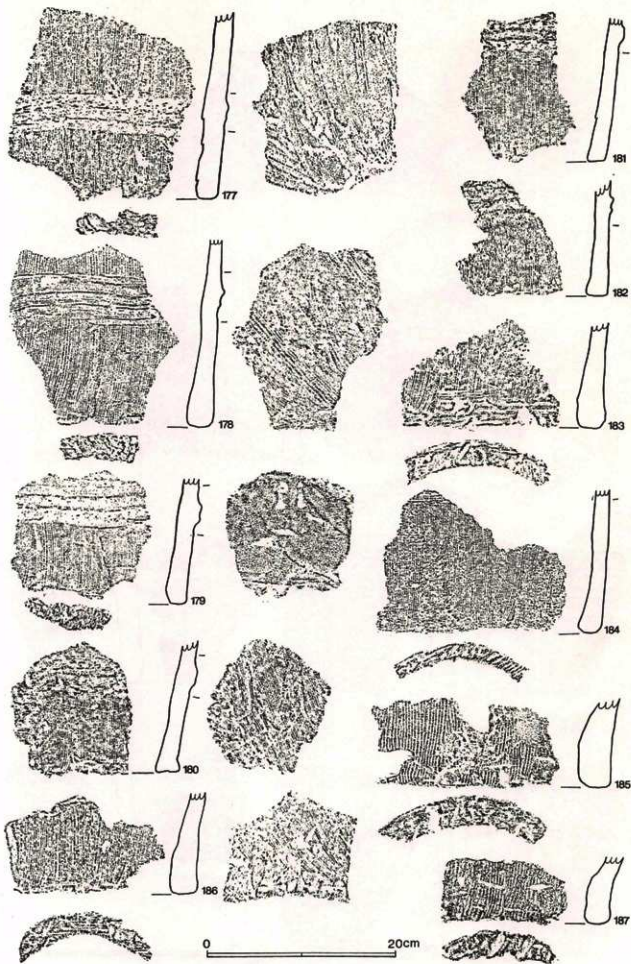
第28图 昭和57年度調査区出土遺物 6 (147~158)



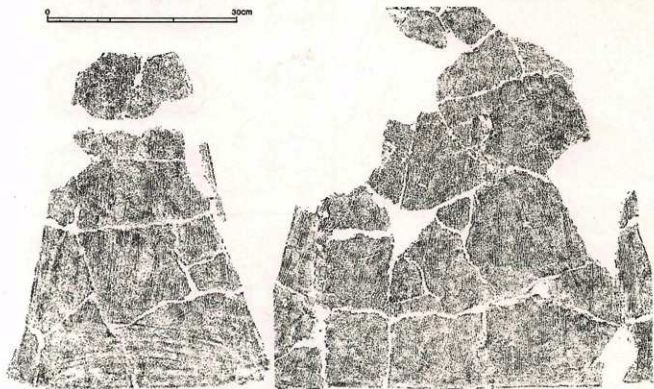
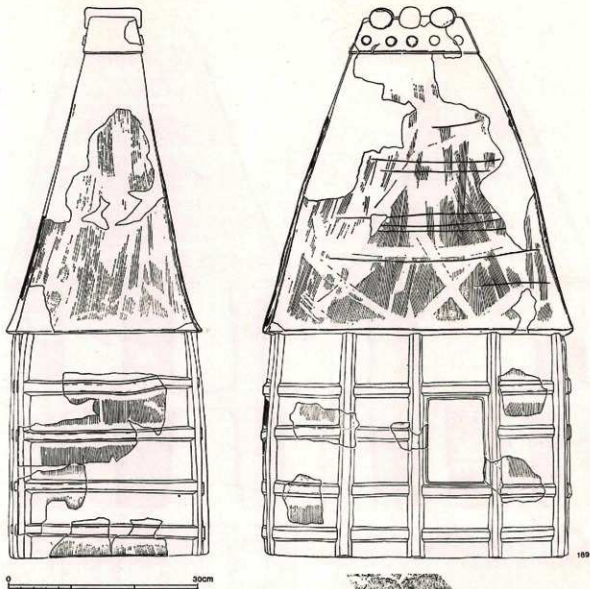
第29回 昭和57年度調査区出土遺物 7 (159~170)



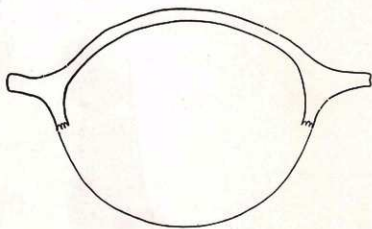
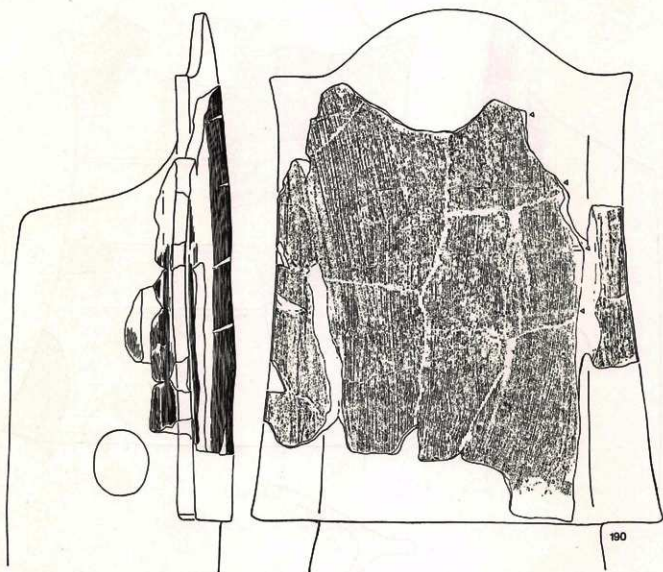
第30图 昭和57年度調査区出土遺物 8 (171~176)



第31图 昭和57年度調査区出土遺物 9 (177~187)

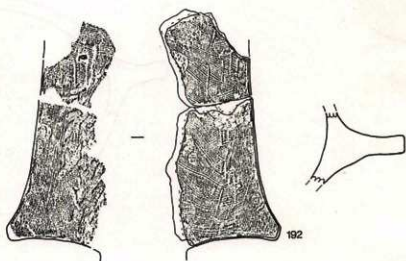
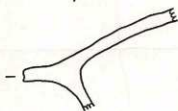
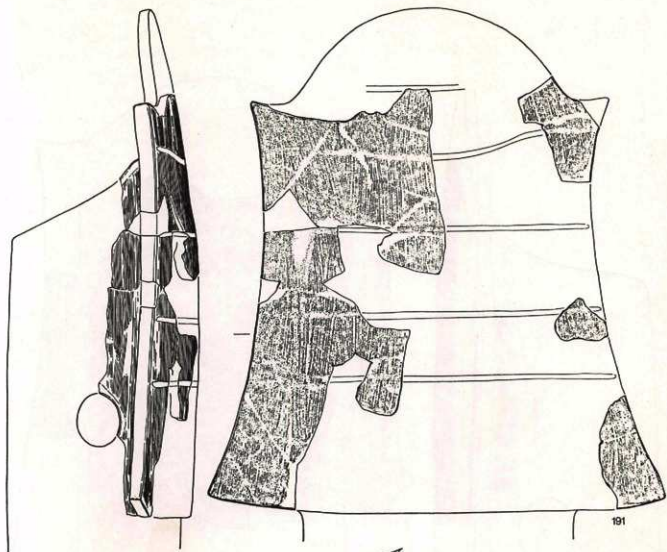


第338图 昭和57年度調査区出土遺物 11 (189 号、拓影のみ)



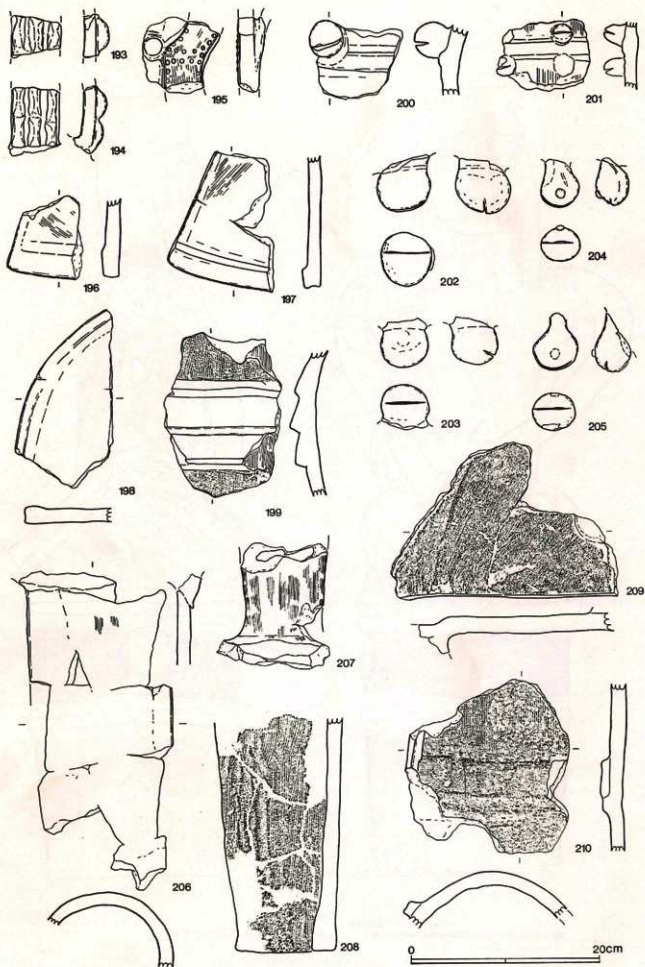
0 20cm

第34回 昭和57年度調査区出土遺物 12 (190)

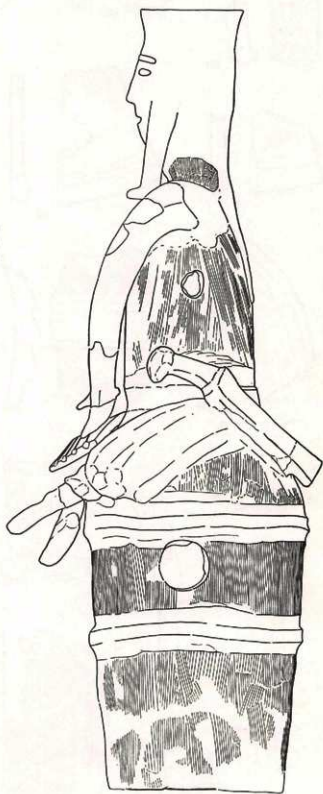
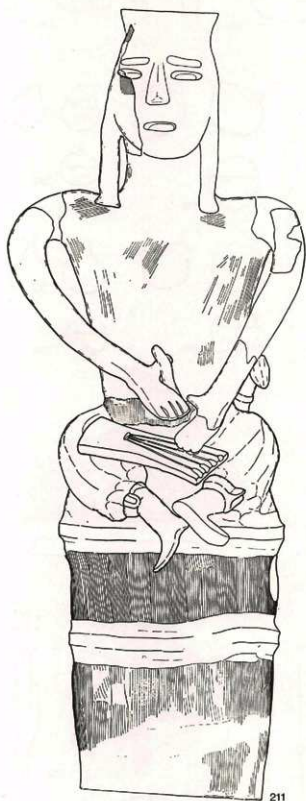


0 20cm

第35图 昭和57年度調査区出土遺物 13 (191~192)



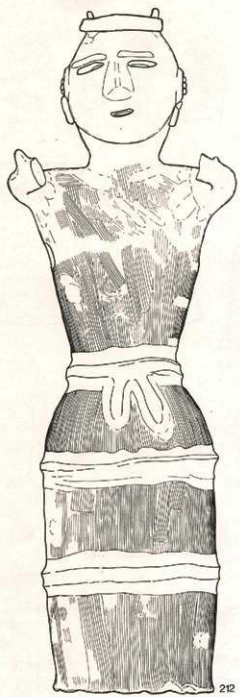
第36图 昭和57年度調査区出土遺物 14 (193~210)



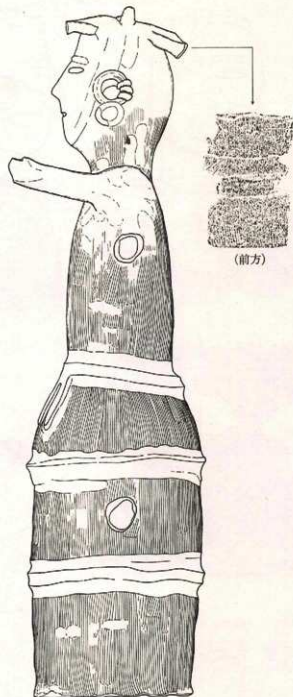
0 ————— 20cm

(スクリーントーン部分：赤彩)

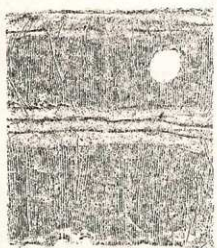
第37図 昭和57年度調査区出土遺物 15 (211)



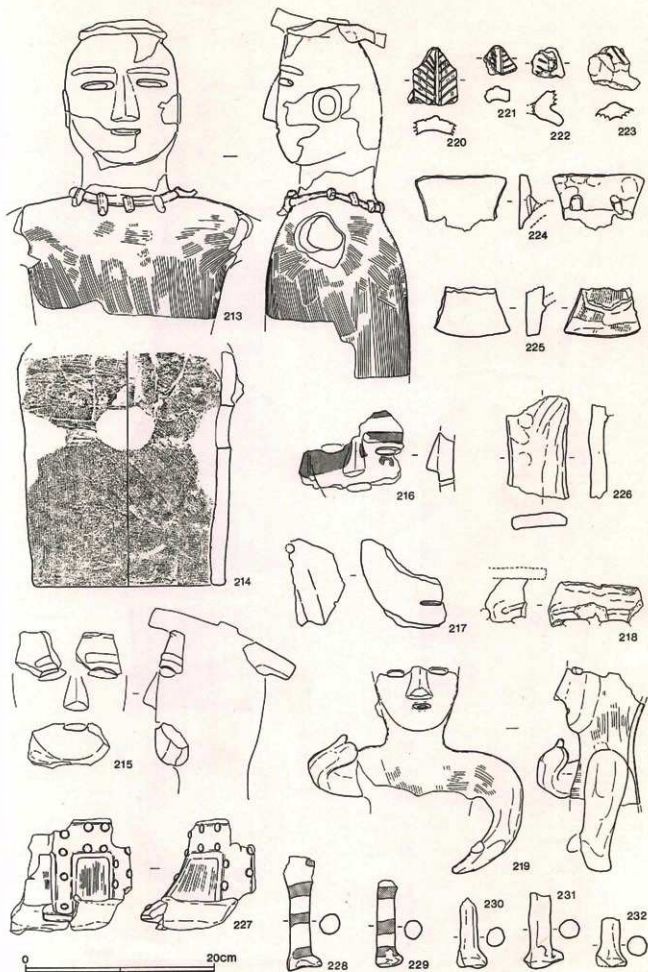
212



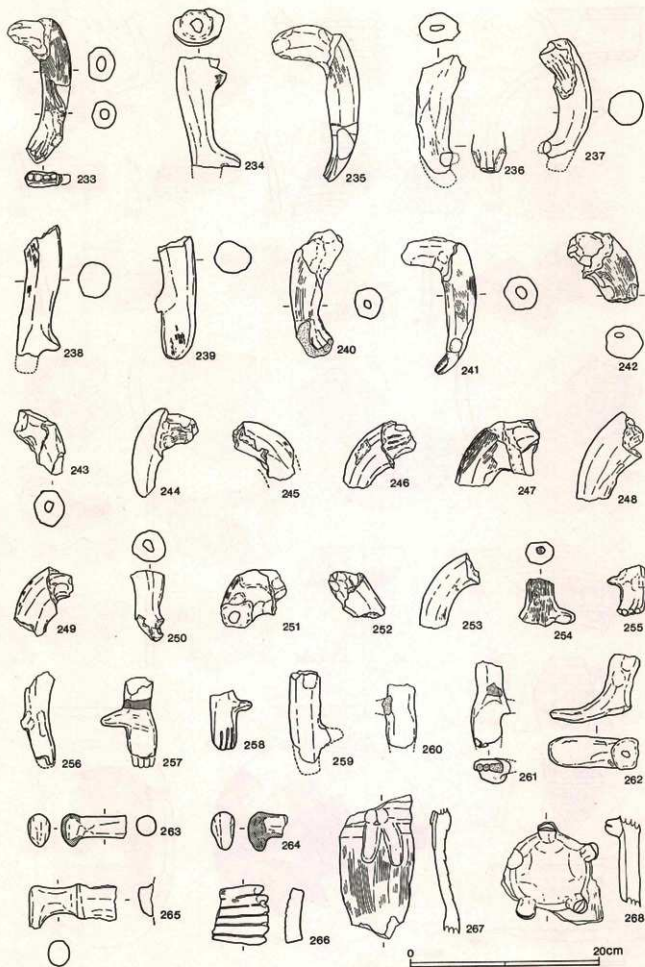
(前方)



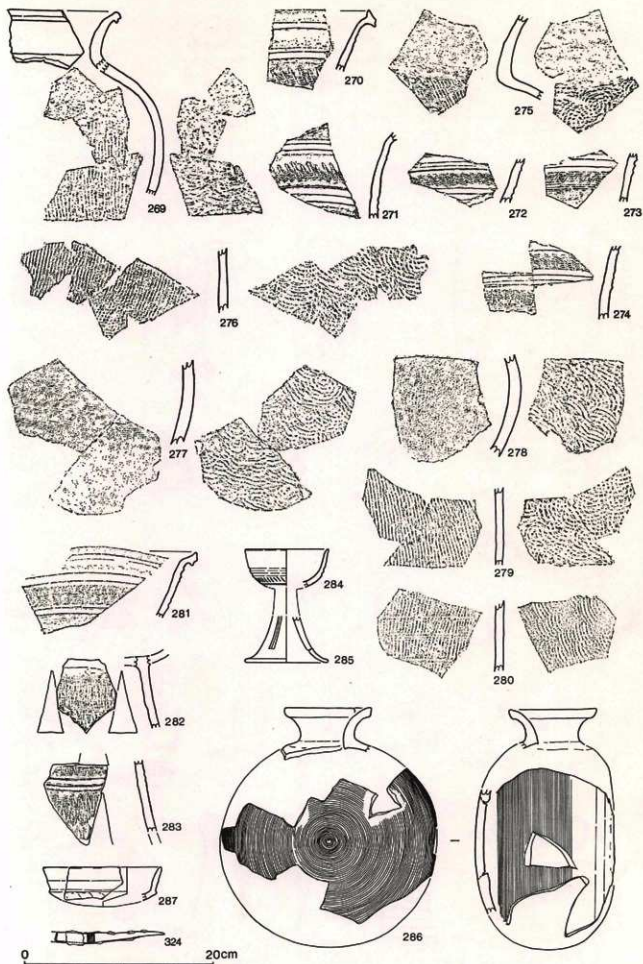
第38图 昭和57年度調査区出土遺物 16 (212)



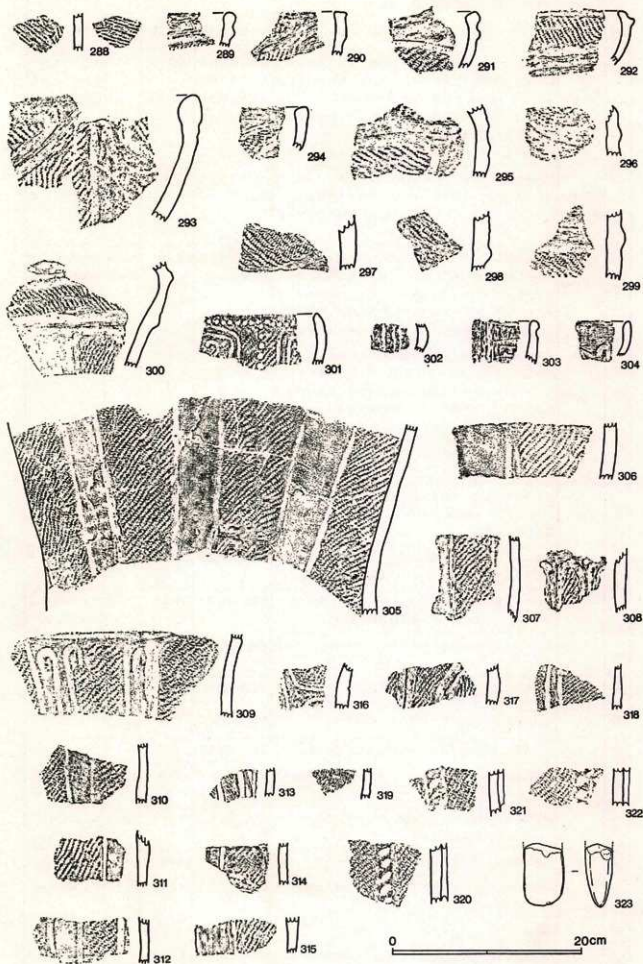
第39图 昭和15年度調査区出土遺物 17 (213~232)



第40图 昭和57年度調査区出土遺物 18 (233~268)



第41圖 昭和57年度調査区出土遺物 19 (269~287、324)



第42图 昭和57年度調査区出土遺物 20 (288~323)

昭和54年度調査区出土遺物観察表

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土、装成等の特徴	色調	ハケム (cm ³)	備考
1	円筒埴輪 口縁部	口縁部に至るにしたがって径がわずかに増大する。端部は外方に外反して開き端部に面を作り出している。復原口縁径約35cm。タガは上辺がわずかに凹凸合形で周囲をヨコナデ。(以下、タガはその周囲を含めヨコナデすることに例外はないので説明を省く。)体部外面はタテハケ、内面はナナメハケで、口縁直下はヨコハケ。端部内外面はヨコナデで仕上げる。	細砂を含む精良な胎土で、焼成も良好。明るい黄灰色の焼上り。	7.5YR 7/6	2.2	A区内堀北西壁寄り出土。(第6図参照)
2	円筒埴輪 体部	約25cmの復原径を有する。タガはごく扁平な「M」字形。円形のスカシあり。外面タテハケ、内面はナナメないしヨコナデ。ユビオサエ痕、タガ付近の内面に横に並び認められる。	小石粒を含み堅緻。	7.5YR 8/3	2.2	B区内堀中央やや西寄出土。(第6図参照)
3	円筒埴輪 底部	底部は肥厚して上方はゆるく外反気味に径を増す。タガは底部から約11cm付近にあり、潰れた「M」字形で周辺を強くヨコナデして仕上げている。外面タテハケ、内面ナナメハケ、最下位は一部オサエ及びナデで指紋を残す。底径約26cmで、底面には禾本科植物と思われる細い棒状の圧痕がある。	荒砂を含め、堅緻に焼成される。	10R 4/8	外 3.0 内 4.0	A区内堀中央やや西寄出土。(第6図参照)
4	円筒 口縁部	端部に向い口径を増す。端部は短かく外方に湾曲しわずかに凹凸端面を形成する。タガは潰れた「M」字。外面ナナメハケ、内面ヨコハケ、端部内外面ヨコナデ。復原口縁径約44cm。(以下、口縁部破片については端部内外はヨコナデして仕上げることに例外はないのでいちいち記さない。)	荒砂、小石粒含む。比較的堅緻。	2.5YR 5/6	1.9~2.1	
5	〃	端部は外方に小さく屈曲する。内外ナナメハケ。復原口縁径約38cm。	荒砂、小石粒を含む。	5YR 6/8	1.9~2.1	B区内堀出土。(第6図参照)
6	〃	端部は外方に屈曲して開き、丸く仕上げている。外面タテハケ、内面ナナメないしヨコハケ。内外赤彩の可能性あり。復原口縁径約46cm。	微細砂含みやおらかい。	7.5YR 8/3	1.7~1.9	
7	〃	端部は外方に小さく屈曲気味に開き、端面を形成。外面左傾するタテハケ、内面ヨコハケ。復原口縁径約38cm。	荒砂含み堅緻。	5YR 6/6	1.6~1.8	A区外堀出土。
8	〃	7よりやや屈曲度が強い。外面ナナメハケ、内面下方ナナメハケ、上方ナナメナデ。復原口縁径約36cm。	荒砂、小石粒含む。	5YR 6/8	2.2	B区内堀出土。(第6図参照)
9	〃	8よりさらに強めに屈曲。外面左傾するタテハケ、内面ヨコハケ。	砂粒、小石粒を含む。	5YR 6/6	外 1.6 内 2.5	A区内堀覆土出土。
10	〃	湾曲気味に開く。外面タテハケ、内面ヨコハケ。	微細砂含み軟質。	10YR 8/3	1.8~2.0	A区内堀出土。
11	〃	端部は小さく外方に屈曲。外面タテ、内面ヨコハケ。	荒砂含み堅緻。	5YR 6/8	外 1.6 内 2.5	B区内堀出土。
12	〃	やや薄手で、端面も小さい。外面左傾するタテハケ。	砂粒、小石粒含む。	5YR 6/6	1.8	
13	〃	内面端部直下にやや強いナナメナデの部分がある。端面小さい。	荒砂含む。	5 YR 6 / 6	1.7~1.9	B区内堀出土。
14	〃	端部は小さくわずかに外方に屈曲。外面タテ、内面ヨコハケ。復原口縁径約36cm。	砂粒、小石粒含む。	5YR 6/6	1.8~2.1	A区内堀出土。(第6図参照)
15	〃	外湾して開く。外面タテ、内面ヨコ、ナナメハケ。	砂粒含む。	2.5YR 6/6	2.2~2.4	B区内堀出土。
16	〃	端部は外方に短かく強目に屈曲する。外面左傾するタテハケ、内面ナナメハケ。	砂粒、小石粒含む。	5YR 6/6	外 1.7 内 2.0~2.2	B区内堀出土。
17	〃	端部はすぼまり、端面は小さめでやや丸味がある。		7.5YR 7/8		B区内堀出土。
18	〃	端部は外方に短かく強目に屈曲し、上面に凹面が形成される。外面左傾するタテハケ、内面はナナメハケ。	砂粒、少量の小石粒含む。	5YR 6/8	外 2.0 内 1.6	A区内堀内側立上り出土。

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土、焼成等の特徴	色調	ハケメ (cm/204)	備考
19	〃	18よりやや屈曲が弱い。内外磨減。	荒砂含む。	5YR 6/8	1.7~1.9	
20	〃	外湾気味に固く。端部はやや凹みのある端部が形成される。	細砂多量に含む。	7.5YR 8/4	1.8~2.0	B区内堀出土。
21	〃	端部はやや肥厚し、丸味がある。赤彩の可能性あり。内外磨減。	微細砂含む軟質。	7.5YR 8/3	外 1.6 内 2.4	B区内堀出土。
22	〃	やや厚手で、わずかに凹む端面を有する。	微細砂含む。		1.9~2.0	A区内堀出土。
23	〃	薄手で、外方にゆるやかに湾曲し固く。	荒砂小石粒含む。	7.5YR 8/4	2.0	B区内堀出土。
24	〃	外方にゆるく湾曲し、端部は丸味を持ち、わずかに凹む端面を有する。内外やや磨減する。		5YR 7/6		B区内堀出土。 (第6図参照)
25	〃	ゆるく開き、端部はやや角ばっている。	細砂多量に含む。	5YR 6/6	1.8~2.1	B区内堀出土。
26	〃	端部はゆるく外方に屈曲し、やや丸味を持つ。	小石粒含む。	2.5YR 6/6	1.6~1.8	B区内堀出土。
27	〃	端部はゆるく外方に屈曲する。内外面タテハケメは細かい。内面はヨコハケメ及びナデ。	微細砂含む、やわらかい。	7.5YR 8/3	0.8~1.0	A区外堀出土。
28	〃	端部は外方に「く」字に小さく屈曲する。	砂粒、小石粒含む。	5YR 6/6	1.8	A区内堀出土。
29	〃	端部は細かく丸味を持つ。外面タテハケメ。	荒砂含む。	5YR 6/6	1.8~2.0	
30	〃	25と同様の形態。	荒砂、小石粒含む。	7.5YR 7/6	2.0	B区内堀出土。
31	〃	端部の外方が小さく突出している。赤彩の可能性あり。	荒砂含む。	7.5YR 8/3	1.9	B区内堀出土。
32	溝口縁部	ゆるやかに湾曲して固く朝顔形円筒埋輪口縁部の破片(以下37まで同。)調整は普通円筒の口縁部と全く共通といって良い。外面のタテハケメ、内面ヨコハケメ、端面を作り出しており、その内外はヨコナデにより仕上げている。復原口縁径約42cm。		2.5YR 6/6	1.6~1.8	B区堀底一括出土。
33	〃	32と同一個体か。	32と同様。	2.5YR 6/6	〃	
34	〃	〃	〃	5YR 6/6	〃	B区内堀出土。
35	〃	端部はごく僅かく小さく外方に屈曲する。	砂多量に含む。	5YR 6/6	1.7~1.9	B区内堀出土。
36	〃	端面はやや凹み、外方はやや突出気味。	荒砂含む。	2.5YR 6/6	1.8~1.9	A区堀底出土。
37	〃	端部直下内面はヨコナデによりやや凹む。	砂粒含む。	5YR 7/8		A区内堀出土。
38	円筒体部	約11cmの間隔で扁平な台形のタガが付けられている。外面はタテハケメ、内面はナメハケメが明瞭。内面に接合痕あり。ハケメの内に赤彩が残る。タガの間隔での復原径約31cm。	微細砂含む。	7.5YR 8/3	1.8~1.9	B区内堀コーナー部出土。(第6図参照)
39	〃	タガは扁平な台形で、本体部分より茶色味が強い。	胎土精良。	7.5YR 8/3	1.8~1.9	A区内堀出土。
40	〃	タガは扁平でくずれた台形。器立面剥落目立つ。	微細砂含む。	5YR 7/4	1.7~1.9	B区内堀出土。
41	〃	やや内湾気味。タガはくずれた台形。	胎土精良。	10YR 8/2	1.8~2.1	A区内堀出土。
42	〃	タガは扁平な台形。	微細砂含む。	10YR 8/2	外 2.1 内 1.6	B区内堀出土。
43	〃	〃。復原径約35cm。		5YR 7/4	外 2.1 内 1.7	A区内堀出土。
44	〃	タガはくずれた台形。	細砂含む。	7.5YR 7/3	1.9~2.0	
45	〃	円形と思われるスカーシあり。タガは縦長でくずれた台形。	〃	2.5YR 6/6	1.7	A区内堀出土。
46	〃	タガは低く鈍い台形。復原径約34cm。	細砂多量に含む。	5YR 7/4	1.8~1.9	A区内堀出土。
47	〃	外面は細いタテハケメ。内面はナメハケメ。	微細砂含む。	10YR 6/6	外 0.8 内 1.4	

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	粘土、焼成等の特徴	色調	ハケム (cm)10分	備考
48	＊	外面及び内面の一部のハケムは粗い。復原径約19cm。形象の 台部か。タガは粗雑な作り。	砂粒含む。	2.5YR 6/8	外 4.0 内 3.2	A区内堀出土。 (第6図参照)
49	＊	タガは幅広く偏平な台形。内面のハケムは粗、細2種を使用。	砂粒含むのみ。	10YR 4/6	外 3.2 内 1.4	
50	＊	タガは偏平で鈍い台形。外面は細いハケム、47と同一個体か。	微細砂含む。	10YR 8/3	外 0.7 内 1.4	B区内堀出土。
51	＊	底部に近い部分。タガは幅広く低い台形。復原径約36cm。	細砂含む軟質。	10YR 8/2	1.5~2.0	＊
52	＊	タガはごく偏平。内面ナナメナデ・復原径約34cm。	荒砂含む。	5YR 6/6	1.7	A区内堀出土。
53	＊	タガはやや巾広でごく偏平。内面はナナメハケム。	荒砂、小石粒含む。	2.5YR 6/6	外 2.2 内 1.4	
54	＊	タガはごく偏平。内面ナナメハケム。	小石粒多く含む。	2.5YR 6/6	3.8	A区内堀出土。
55	＊	タガは巾広でくずれをみせる。内面に焼成前の窯印わずかに 認められる。復原径約33cm。	荒砂含む。	5YR 7/4	2.0	＊ (第6図参照)
56	＊	タガは偏平な「M」字形。内面はナデ及びヨコハケムで焼成 前の窯印(「×」と思われる。)あり。復原径約25cm。	砂粒、小石粒含 み堅緻。	5YR 8/4	1.9~2.1	＊ (第6図参照)
57	＊	タガはごく偏平な「M」字。円形のスカシあり。外面はタテ ハケム、内面はナナメハケムでスカシ付近にオサエ痕、復原 径約25cm。	＊	2.5YR 7/4	外 2.1 内 1.5	B区内堀出土。
58	＊	タガはごく偏平な「M」字形で粗雑な作り、内面はナナメナ デ。復原径約31cm。	荒砂含む。	5YR 6/4	2.3	＊
59	＊	タガはごく偏平な「M」字形。外面はタテハケム及び左傾す るタテハケム。円形のスカシあり、穿孔面をユビオサエ。	荒砂含み堅緻。	7.5YR 5/4	1.8	＊
60	＊	タガは巾広で偏平。内面はタテのナデ。復原径約30cm。	荒砂含む。	2.5YR 6/4	1.8	A区内堀出土。
61	＊	タガはごく偏平な「M」字形。円形の切放しのスカシあり。	荒砂、小石粒含む。	7.5YR 8/4	1.9~2.1	
62	＊	タガはくずれた「M」字。内面はナナメハケムでオサエ痕あり。	砂粒含む。	10R 4/6	1.0~2.0	B区埋蔵土出土。
63	＊	タガはごく偏平な「M」字形。	荒砂、小石粒含む。	5YR 5/5	1.7	
64	＊	タガは偏平な「M」字形。復原径約29cm。	荒砂含む。	5YR 7/4	1.8	B区内堀出土。
65	＊	＊。内面に窯印あり。復原径約33cm。	荒砂、小石粒含む。	7.5YR 7/4	1.4~1.7	A区出土
66	＊	タガはごく偏平な台形。内面ナナメナデ。	荒砂含む。	5YR 7/4	2.0	B区内堀出土。
67	＊	タガは62と略同様。円形切放しのスカシあり。	荒砂含む。	2.5YR 6/4	1.6	B区内堀出土。
68	＊	タガは偏平な「M」字。内面ナナメハケム、部分的にタテナデ。	荒砂、小石粒含む。	5YR 7/4	2.0~2.5	＊
69	＊	タガはごく偏平な「M」字形。復原径約25cm。	＊	7.5YR 8/4	1.7	＊
70	＊	やや薄手の作り。円形のスカシがあり穿孔面をオサエている。 タガはごく偏平な「M」字形。内面はナナメナデ。	石粒を含む。	5YR 7/3	1.9	＊
71	＊	タガはごく偏平。	荒砂含む。	2.5YR 7/4	1.8~2.4	A区外堀出土。
72	＊	不整形円形のスカシあり。タガは粗雑な作り。	荒砂、小石粒含む。	5YR 7/4	2.0	B区内堀出土。
73	＊	タガはごく偏平でくずれた「M」字形。円形のスカシが右回 りで穿孔される。内面ナナメナデ。復原径約23cm。	砂粒、小石粒含 み堅緻。	2.5YR 6/6	1.9	＊
74	＊	タガはごく偏平な「M」字。復原径約35cm。	砂粒含む。	10YR 5/6	1.5~2.1	A区内堀出土。
75	＊	タガはごく偏平。円形と思われるスカシあり。	荒砂、小石粒含む。	2.5YR 7/4	1.7~2.0	B区内堀出土。
76	＊	タガはごく偏平。	＊	7.5YR 7/3	2.0~2.1	＊
77	＊	タガ間約8cm、復原径約24cm。タガ付近の内面にオサエ痕。	微量の細砂含む。	2.5YR 6/6	1.4	＊

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土、焼成等の特徴	色調	ハケメ (cm/304)	備考
78	＊	扁平で帯長のタガ。復原径約38cm。	荒砂少量含む。	2.5YR 5/6		A区内堀出土。
79	＊	タガはごく扁平、スカンあり。	砂粒含み堅緻。	2.5YR 5/4	1.9	＊
80	＊	タガはごく扁平で粗雑な作り。復原径約33cm。	荒砂、小石粒含む。	7.5YR 7/6	1.9~2.4	B区内堀出土。
81	朝顔体部	朝顔形円筒の肩部と思われる部分。外面はココハケメ、内面はナナメにナデ、接合痕残る。	＊	7.5YR 7/6	2.3	＊
82	朝顔口縁部	口縁部中程部分と思われる。タガは鈍い台形。内面磨減。	荒砂含む。	5YR 6/8	1.9	＊
83	円筒底部	底部から上方に向い径を増す。タガは内の取れた丸味のある台形で粗雑な作り。外面やや細いタテハケメ、内面ナデ及びナナメハケメ、底面に棒状の圧痕あり。復原底径約25cm。	微細砂含む。	10YR 8/3	外 1.2 内 1.2~1.8	B区内堀中央部出土。(第6図参照)
84	＊	外面は細かいタテハケメ、内面は下位をココにまで、上方がナナメハケメ。底面には棒状の圧痕の他、細かい平行する圧痕がある。復原底径約29cm。内外磨減。	＊	10YR 8/3	外 0.9 内 1.1~1.8	A区内堀中央部出土。(第6図参照)
85	＊	タガは鈍い台形。外面細いタテハケメ、内面ナナメハケメ。底面には棒状の圧痕の他、細かい平行する圧痕あり。	＊	10YR 8/3	外 0.9 内 1.4	B区内堀コーナ一部出土。
86	＊	内湾気味に立上っている。タガは扁平で崩れた台形。外面は細かいタテハケメ。底面に棒状の圧痕あり。復原底径約25cm。	細砂含む。	10YR 8/4	外 0.8 内 0.8~1.8	＊
87	＊	タガは扁平で崩れた台形。外面最下位にタテハケメに先行する広いココハケメ。底面に棒状の圧痕あり。復原底径約26cm。	微細砂含む。	10YR 8/3	1.8~2.0	A区内堀出土。(第6図参照)
88	＊	最下位は肥厚する。タガは扁平な「M」で、一部潰れて指紋が残る。内面は荒、細2種のハケメを使用。復原底径約28cm。	荒砂を含み堅緻な焼成。	10R 5/8	外 3.3 内 3.3~1.5	A区内堀北西壁寄り出土。
89	＊	タガは扁平な台形。内面に不整のナナメハケメ。	荒砂含み堅緻。	10R 4/8	2.2	A区内堀出土。
90	＊	タガは扁平で下方が潰れ、楔のような三角形をしている。外面タテハケメ、内面はタテにナデ。復原底径約32cm。	砂粒、小石粒含む。	5YR 5/6	2.2	＊ (第6図参照)
91	＊	最下部は丸く肥厚し、蛇行気味に立上る。タガは90と略同様。底部はヒズミが顕著。復原底径約35cm。外面一部還元色。	荒砂、小石粒多量に含む。	7.5YR 7/6	外 3.6 内 2.6	＊ (第6図参照)
92	＊	タガは90と略同様。内面ナナメナデ。復原底径約20cm。	砂粒含み堅緻。	5YR 6/6	2.1	B区内堀出土。
93	＊	タガは崩れた「M」字形。外面タテハケメ、内面ナナメナデ。復原底径約22cm。表面一部還元色。	荒砂、小石粒含む堅緻。	5YR 7/6	2.0	B区内堀コーナ一部出土。
94	＊	内湾気味に立上る。外面タテハケメ。内面ナナメハケメ。	砂粒含む。	5YR 7/4	1.9~2.2	＊
95	＊	タガは扁平な「M」字形。内面はナナメハケメ及びナナメナデ。内外還元色。復原底径約24cm。	荒砂、小石粒含み堅緻。	7.5YR 5/2	1.8	B区内堀コーナ一部出土。
96	＊	外方に開くように立上る。内面ナナメナデ。復原底径約20cm。	砂粒含み堅緻。	2.5YR 4/4	1.9	＊
97	＊	タガは崩れた「M」字形で、内面はナナメハケメの後タテにナデ、最下位はココにナデ。復原底径約20cm。	荒砂含み堅緻。	10YR 8/3	1.9	＊
98	円筒破片 ~100 (蓋印付)	いずれも「×」と思われる蓋印のある破片を一括した。(56)にもあり。101が焼成後に陰刻している他は焼成前にヘラ状工具で浅く陰刻している。口縁部以外の破片も内面の部分的な制約から口縁部直下部であろう。				B区内堀出土。 (第6図参照)
109	須恵器 ~111	いずれも外面は平行タタキ、内面は同心円タタキで、109は外面にさらにカキメ様の条痕が施される。	いずれも堅緻。 109は微細砂含む。	10S-N 7/10 110SPB5/1 1117.5Y4/1		A区内堀底出土。
112	須恵器 台	断面の形状からすると器台であろうか。外面には浅い2条の沈線が横走し、ココナデして、その上下に浅い櫛歯状文が施される。内面はココナデ。		7.5GY 6/1		

昭和57年度調査区出土分

円筒埴輪

番号	種別、部位	形態、調整技法等の特徴	胎土、焼成等の特徴	色 調	ハケム (cm単位)	備 考
113	円筒埴輪 体→口縁部	体部は口縁部に近づくにしたがい、ごくわずかに径を増す。口縁部はゆるやかに外湾して開き、わずかに凹む端面を形成。タガはごく扁平な「M」字形で粗雑な作り。上から1、2段目の間及び3段目の下に入り口のスカシか各段2個一対、互いに直角位置に穿孔され穿孔後の調整はしない。外面タテハケム、内面は口縁直下付近がヨコハケムのほかは不整のナナメハケム、復原口縁部径約35cmで、全体のプロポーシオンヤスカシの位置から全高65～70cm、4本タガの5段構成か。	荒砂を含むが焼成比較的良好。	表2.5YR6/8 裏2.5YR6/6	1.0-1.4	内堀南部(前方部)横溝出土。 図示部分約1/2周割遺存。
114	体 部	上方に向かい直線的にゆるやかに径を増す。下位のタガ間に円形のスカシがあり、穿孔後は調整しない。タガは扁平な台形。外面はタテハケム、内面はナナメナデ、上方は不整のナナメハケムで、部分的にタテハケム。上部での復原径約35cm。	砂粒含み堅緻。	2.5 YR 6 / 6	1.6-2.0	出土位置は第10図参照。 上部で約1/2周遺存。
115	朝顔形 円筒埴輪	肩部は丸味を持ち、口縁部は外湾気味に開く。タガは崩れをみせる扁平な「M」字で、口縁、肩部境のものはやや高い。外面はタテハケム及び傾斜するタテハケム、内面は肩部以下はヨコハケム、口縁部は肩部直上はオサエのように強くヨコにナデ、上方はナデ及びヨコハケムの後、部分的に強くタテにナデ。ハケムはいずれも荒い。遺存する体部での復原径約25cm。	荒砂を多量に含み軟質。	10R 4/8	3.0	図示部分はほぼ全周遺存。 外堀ブリッジ北側中堤寄り出土。
116	体 部	115に比べやや肩部の丸味が少なく、口縁部はわずかに内湾気味に開く。タガはごく扁平で崩れた「M」字形。体部に不整しまりを欠く。円形のスカシがあり、穿孔面をオサエにより仕上げる。外面はタテハケムを基調とするが肩部はナナメハケム。内面は口縁部最下位以下をナナメないしヨコに丁寧にナデ、口縁部はナナメないしヨコハケム。遺存する体部の復原径約24cm。	荒砂含み、ややしまりを欠く。	5YR 6/6	2.0	外堀ブリッジ付五出土。
117	円筒 口縁部	口縁に向かいゆるやかに開き端部は外方に小さく屈曲し明瞭な端面は形成されない。内面は仕上げのヨコナデでわずかに凹む。タガは扁平な台形。外面は左傾するタテハケム、内面は口縁部下方がヨコハケムの他、ナナメにナデ復原口径約31cm。	砂粒含み堅緻。	2.5YR 5/6	1.0-1.1	外堀出土。
118	体 部	形態、調整等113とほぼ同様。下位のタガ内面にオサエ肌。タガはごく扁平で崩れた「M」字形。復原口径約31cm。内外磨減。	砂粒含み焼けしまりを欠く。	2.5YR 6/8	1.4	外堀ブリッジ南西部出土。
119	体 部	端部はゆるく外方に湾曲して開く。内面はヨコハケムで部分的にタテハケム、接合痕顯著。復原口径約35cm。内面還元色。	砂粒含み外面に軟質部分あり。	7.5YR 7/6	1.9	ブリッジ南西中堤肩部出土。
120	体 部	ゆるく外反して開く。端部のヨコナデ、外面は比較的幅広い。	砂粒含み堅緻。	2.5YR 6/6	1.8-2.2	外堀出土。
121	体 部	他の口縁部に比べ端部の開き方がゆるやかである。端部内外のヨコナデは比較的強い。復原口径約23cm。内外還元色。	砂粒含み堅緻。	10YR 6/4	1.7-1.9	内堀南部出土。
122	体 部	端部はゆるく屈曲し、端面はその両端が丸味を持つ。復原口径約34cm。	〃	5YR 6/8	1.8-2.0	内堀造り出し東方出土。
123	体 部	内面端部直下に、ヨコナデにより鈍い稜が形成されている。	〃	5YR 6/6	1.9-2.1	外堀出土。
124	体 部	内面端部直下に、ヨコナデにより鈍い稜が形成されている。タガは幅広くごく扁平な「M」字形。復原口径約35cm。	荒砂含む。	5YR 6/6	1.8	外堀北方中堤寄り出土。
125	体 部	121とほぼ同形態。内外還元色。	砂粒含み堅緻。	10YR 7/3	1.8-1.9	S D 001出土。
126	体 部	端部はゆるく「く」の字に屈曲する。122と同一個体か。	122に酷似。	2.5YR 6/6	1.7-1.9	内堀出土。

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	動土、焼成等の特徴	色調	ハケム (cm)厚	備考
157	＊	タガは幅広く「M」字と台形の中間的形態。	細砂含み堅緻。	2.5YR 4/6	2.8-3.4	S D001内出土。
158	＊	タガは崩れた「M」字。スカシは雑に穿孔される。タガの内面部位にユビオサエの痕跡あり。内面はヨコハケム。	砂粒含み軟質。	2.5YR 4/8	2.8-3.4	外堀ブリッジ北 脚付壁寄り出土。
159	＊	タガはごく扁平で粗雑。内面に顕著な接合痕あり。	砂粒含み軟質。	2.5YR 6/6	1.3-1.5	外堀出土。
160	＊	タガはごく扁平な「M」字形。外面タテハケム。内面ナナメのナデ及びハケムで、焼成前の除刻による「M」の窠印あり。	砂粒含むが、比較的堅緻。	5YR 6/8	1.6-1.9	ブリッジ北外堀 出土。
161	＊	タガはごく扁平な「M」字形。円形のスカシあり。タガの内面部位にハケムに先行するオサエの凹凸がある。	砂粒、小石粒含みやや軟質。	5YR 6/6	1.5	外堀覆土。
162	＊	タガはごく扁平な「M」字形。内外磨減。	荒砂含み軟質。	5YR 6/6	1.6	内堀出土。
163	＊	タガは下方が潰れた台形。外面ハケムはやや粗い。	＊		外 4.0 内 3.0	外堀覆土。
164	＊	タガはごく扁平で崩れた「M」字形。円形のスカシあり。内面はナナメハケムだがタガの内面部位にオサエ痕残る。	砂粒を多量に含むが堅緻。	5YR 6/6	1.3-1.9	外堀覆土上層。
165	＊	タガは角が取れたような崩れた台形。内面ナナメナデ、一部ナナメハケム。接合痕残る。	砂粒含み堅緻。	7.5YR 7/6	1.9	S D001内出土。
166	＊	タガは幅広く扁平な台形。内面はナナメハケム。内外磨減。	砂粒含み軟質。	2.5YR 5/8	1.7-1.8	＊
167	＊	タガは鈍く崩れた台形で、中心間は約9cm。内面ナナメないしヨコハケム。スカシあり。	砂粒含むが堅緻。	5YR 6/8	1.9-2.1	＊
168	＊	タガは扁平で台形と「M」字の中間的形態。内面ナナメハケム。スカシがあり、穿孔面をナデで仕上げる。	細砂含み堅緻。	2.5YR 6/8	1.8-1.9	＊
169	＊	タガは扁平な「M」字形。内面はナナメハケムだが、タガの部位にオサエ痕残る。	微細砂含み、やや軟質。	10YR 7/4	1.5	188の西側出土、 第10回参照。
170	＊	タガはごく扁平な「M」字形。内面ナナメナデ。内外磨減。	小石粒、微細砂含み。	5YR 7/6	2.0	外堀北方出土。
171	内 底 部	基部は板状の粘土を一周させ接合していると思われ、その接合痕が内面に残る。外面タテハケム、内面ナナメナデ、底部には禾木科植物の茎と思われる棒状の圧痕あり。復原底径約28cm。	砂粒含み堅緻。	2.5YR 5/8	1.9	S D001内出土。
172	＊	タガは幅広くごく扁平な台形。基底部分はやや肥厚する。外面タテハケム、内面はナナメハケム及びタテのナデ。底面には棒状の圧痕残る。復原底径約28cm。	＊	2.5YR 5/8	1.9	＊
173	＊	タガはごく扁平で幅広い「M」字形。内面はナナメのナデ及びハケム。底面に棒状の圧痕あり。復原底径約35cm。	荒砂含み堅緻。	2.5YR 5/8	1.5	＊
174	＊	上方はやや直線的に開く形態か。タガは下方が潰れて楔形のような三角形となる。内面は主にタテにナデ、上位部分は復原径が約17-18cmと考えられ、形象の台の可能性が高い。	砂粒含むが堅緻。	2.5YR 5/8	1.9	外堀出土、第10 回参照。
175	＊	タガはごく扁平でくずれた「M」字形。内面下位に接合痕。	荒砂含み堅緻。	5YR 6/6	1.5	S D001内出土。
176	＊	上方で径をやや増す形態か。内面はヨコにナデ。	砂粒含み軟質。	5YR 6/6	1.8	＊
177	＊	タガはごく扁平で崩れた「M」字形で、タガの中心で、下面から約9cmと、他よりやや低い位置にある。復原底径約26cm。	荒砂含みややしまり欠く。	5YR 6/8	1.4	外堀中堤寄り出 土。
178	＊	タガは下方が低い「M」字形。基底部分は体部から連続的に肥厚して、底面には棒状の圧痕が残る。復原底径約26cm。	砂粒含みやや軟質。	2.5YR 4/8	2.0-2.1	外堀出土。
179	＊	タガは鈍く扁平な「M」字形。内面ナナメハケム及びナデ。	砂粒多量に含む。	2.5YR 6/8	1.5	S D001内出土。
180	＊	基部外面に粘土が余って突出する部分がある。ごくわずかに内湾気味に開く形態。タガは扁平で鈍く崩れた台形。	荒砂含み、ややしまり欠く。	5YR 6/6	1.9-2.0	外堀出土。

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土、焼成等の特徴	色調	ハケメ (cm/10本)	備考
181	〃	タガは扁平で刷れた台形。内面はナナメナデ。	やや軟質。	5YR 6/6	1.8	外堀出土。
182	〃	タガはごく扁平で刷れた「M」字。基底部は内側にやや肥厚。	砂粒含み堅緻。	5YR 6/6	1.9	S D 001内出土。
183	〃	基底部は肥厚し外面はタテハケメに先行し、ハケメ状の横走する平行の条痕(1.5cm/5本)が施される。内面は最下部がオサエの他はナナメハケメ。底面は棒状の圧痕あり。186と同一個体か。	細砂含み、比較的堅緻。	2.5YR 4/6	1.6	〃
184	〃	基底部内面がやや肥厚する。内面ナナメないしヨコのハケメ及びナデ。	荒砂を含みややしまりを欠く。	2.5YR 4/8	1.7	S D 001内出土、第10図参照。
185	〃	基底部はかなり肥厚する。内面最下位はオサエ。他は磨滅。	砂粒含みもろい。	5YR 6/8	3.6	外堀出土。
186	〃	基底部は肥厚しやや外湾気味。内面は最下位がナデで指紋を残す他はナナメハケメ。	183と酷似。	2.5YR 4/6	1.6	S D 001内出土。
187	〃	基底部肥厚。内面は最下位をオサエ、他はナナメハケメ。	ややもろい。	10YR 3/6	3.3	〃

形象埴輪

番号	種別、部位	形態、調整技法等の特徴	胎土、焼成等の特徴	色調	備考
188	家形埴輪	密棟造りの高い屋根を有し、柱は円柱状で桁行は2間、梁行も2間と考えられる。高床の家屋。柱は粘土細を巻きあげ直径8~10cm、高さ約16cmの円筒を作り、さらにその上にやや直径が小さく、長目の同様な円筒を載せて継いでおり、外面はタテハケメを施し、内面はツキアゲ肌が著しい。そしてこの継目の部分の周囲に厚さ約2.5~3cmの粘土板を貼り高床を作り出す。柱の屋内側部分にも床の割落痕が認められ、床下の柱の数も9本存在するので床は全面があったと考えられる。柱心間距離は桁間で17~19cm、梁間で13~14cmである。屋根は桁側に上辺約16cm、下辺約46cm、高さ約45cm、厚さ1.5~2.0cmの粘土板を、梁側には底辺約40cm、高さ、厚さは桁側と同様の粘土板を各2枚用いて作られている。外面は主にタテ方向のハケメを残しており、さらに桁側の一面は横立に5条のナデを加え屋根の押え材を表現すると考えられる。屋根は高床からは8本の柱で支えられる。屋根は簷の部分がやや上方に反り気味で、その軒の内側と柱の外端部で接合されている。棟の周囲部分には割落痕があり、189の家形と同様押縁があったものと推定される。現存高約78cm、高床は復元で桁側約49cm、梁側約41cm。	砂粒を多く含みしまりを欠く。脆弱なため、バインダーを含浸させており、本来はもう少し明るい色調である。	10R 4/6	外堀底のS D 001に近い位置から出土。(第10図参照) ハケメ 屋根1.7~1.9 柱1.8~1.85 (cm/10本)
189	〃	屋根は密棟造りの高屋根で、棟の部分は前後に押縁を表現し、その上に直径約1.5cmの円形の扁平な粘土粒を貼付し、縄質を表現する。この円形の粘土粒は前側部分で4個遺存しているが、割落痕の状況から3~4cm間隔(中心間)に5個貼付されていたものである。梁側は妻懸しのようなものがあつたかは不明。また、棟の頂部には直径3~3.5cm、長さ約9cmの榎木が3本載るが、1本は欠落。この屋根部分は上辺約16cm、底辺48cm、高さ50cm、厚さ約2cmの粘土板を桁側に、底辺約29cm、高さ、厚さは桁側と同様の三角形の粘土板を梁側に用い、貼合わせて用いたものと思われる。屋根はその上部分でやや外方に翻れ、さらに裾部分はゆるやかに反り気味で、約5%の部分を欠く。屋根の外面は主にタテ方向のハケメにより調整され、桁の一方の面は斜格子風にナデを加える部分があり、さらに横走するヘラ先による細い沈線も認められ屋根の押え材の表現と考え	胎土に砂粒を含み、やや焼けしまりを欠いている。	10R 4/8	外堀中堤側立上り部分から出土。(第10図参照) ハケメ 屋根1.65~1.80 側面1.80 (cm/10本)

番号	類別、部位	形態、調整技法等の特徴	粘土、焼成等の特徴	色調	備考
		られる。壁は梁側の一方が写影遺存する他は部分的な遺存だが、横走する凸帯が4条あることは確実である。また、凸帯に近接して穿孔のある破片が何点あり、桁行部分に窓を、梁行の一方に出入口をそれぞれ推定し復原した。この他図示しなかったが、同様な形態と考えられる別個体の破片が数点存在する。			
190	盾形埴輪	本体の中心部分が写影が接合、復原できた。糸巻き状の立面彫造の本体部分は、括れる部分で幅約37cm、厚さ約1cm。上方はゆるく弧を描くように丸くなるものと思われ、本体の高さは約50cm前後であろう。わずかに残る台部の状況から、翼状の部分と上位部分を除く箇所は台部の円筒部分の一部として粘度のマキアゲ成形によるものと考えられ、内面はナナメハケメを施すが、横走する接合痕を残す。本体表面はタテハケメで仕上げ横走する幅約0.5cmの弱いナゲが4条加えられ、モデルの盾の材の接合部分又は文様の表現と考えられる。背面に付く円筒部分にはスカシが認められる。器表にヒビ割れが目立つ。	細砂を含み、焼成はあまり良くない。	10R 4/8	外堀の中堤立上り部分、189の家形と混在して出土。 ハケメ 1.6~1.8 (cm/10本)
191	〃	190と同様な形態と思われ、体部の写影遺存。糸巻状の本体上位の突出部で幅38cm、下方の突出部で約49cm、高さは54cm前後と推定される。厚さは1~1.5cm。製作の順序も190と同様と考えられ、内面はココハケメで仕上げ、横走する接合痕の残る部分がある。本体表面は主にタテ方向のハケメにより仕上げるが横方向の弱いナゲが5条認められ、盾材の接合部又は文様を表現するものと思われる。背面の台部の円筒部分には凹彫と思われスカシが認められる。器面の荒れが目立つ。	砂粒を少量含みややしまりを欠く。	10R 4/6	189、190の南西、外堀の中堤立上り部上方から出土。 ハケメ 1.5~1.8 (cm/10本)
192	〃	190、191と同形態かと思われる盾形埴輪本体の向かって左の翼状の裾部分と考えられる。190とは接合せず別個体。表面は不整のハケメ、裏面はナナメハケメ及びナゲ、周縁はナゲで、厚さ1.8cm。内面はナナメナゲ及びナナメハケメ。	砂粒を少量含み焼成は良好。	2.5YR 6/6	外堀出土。 ハケメ 1.5~1.9 (cm/10本)
193 194	大刀形埴輪	勾金の一部と思われ、193はその中程の、194は柄に取り付けられる部分で割落痕があり同一個体と考えられる。幅約4.5cm、厚さは約1.3cmの断面長方形で、その表面に幅1~1.3cm、高さ約0.8~1.3cmの断面三角形の粘土紐を貼り、約2.5cmの間隔でこれを置して三輪玉を表現する。	砂粒を少量含み堅緻。	193 5YR 6/4 194 5YR 5/4	193は S D001内、194は外堀覆土から出土。
195	形象 (馬形?)	「f」字形鍍板の部分かと思われ、表面に顔を表現すると考えられる直径約5mmの扁平な粘土粒が貼付けられている。ナゲで仕上げるが、ハケメがわずかに残る。	砂粒を多量に含み、ややしまりを欠く。	7.5YR 7/6	外堀出土。
196 197	形象 (不明)	靴形の翼状部分の一部かと思われる破片で、厚さは1.2~1.5cm、縁は断面四角形に肥厚している部分がある。表、裏ともナゲで、周縁は縁に沿ったナゲを加える。	砂粒を含み比較的堅緻。	196 2.5YR 6/6 197 2.5YR 4/6	196は S D001内出土、197は188等の密集区出土。
198	形象 (不明)	外縁がゆるい弧を描く、板状の破片、厚さ約1.5cmで縁辺はやや肥厚する。図示した右側は直線的な破損面を呈し、円筒状の本体部に付属していたものと考えられ、髻等の一部であろうか。表、裏ともにナゲ、縁辺は縁に沿ったナゲ。	砂粒を多量に含みややもろい。	2.5YR 6/6	S D001内出土。
199	形象 (不明)	内湾し、厚さ約1.5cmの本体に、断面が三角形となる凸帯を横に3条貼付ける。本体の横断面は円筒状となり、図示した中央で内径約10cm、外面はタテハケメ、内面はナゲ。器種は不明。	産砂を多量に含み、ややしまりを欠く。	5YR 6/8	〃
200	形象 (不明)	厚さ約1.6cmの本体部の外面に凸帯を貼り、これに接するように直径約3.6cmの球形の鈴を貼付け、その周囲をナゲ。本体は内外をナゲ、凸帯部分もココにナゲ。馬形の一部であろうか。	産砂、小石粒含み、しまりを欠く。	5YR 5/6	外堀西方出土、第10図参照。

番号	類別、部位	形態、調整技法等の特徴	胎土、焼成等の特徴	色調	備考
201	形 象 (不明)	幅1.5cmの扁平な凸帯の両側に孔頭状の小形の鈴を貼付している。本体部分は外面ハケメ、内面ナデ。器種不明。	荒砂含み、やや軟質。	5YR 5/6	中堤上出土、第10回参照。
202	形 象	直径約5cmの球形の鈴であり、馬形に付属していたものであろうか。202、203は胎土、色調から同一個体と考えられる。	砂粒含み、もろい。	202:5YR5/5 203:10R4/6	202、203共外堀出土。
204 205	形 象	長径約4.5、短径約4cmの蹄形の粘土塊の頭部側面に浅い切り込みを入れ、鈴を表現している。頭部には凹形の扁平な粘土粒が貼付される。(205は脱落) 割離痕から本体に斜めに貼付されていたものと思われ、馬形等の装飾と考えられる。胎土、色調から204、205とも同一個体に属すると推定される。	荒砂、小石粒含み、しまりを欠く。	204:5YR5/8 205:5YR6/8	205は内堀南部出土、第9回参照。
206	形 象 (不明)	器種不明で上方がやや広くなる筒状で、中程での直径は約15cm。下位は色調や焼成の具合から底部に近く、上方はさらに外方に粘土が貼付され、何かの脚と考えられる。外面はナデで一部にハケメが残る。内面はナメハケメ。	微細砂含み、やや軟質。	10YR 7/3	外堀、形象密集区出土、第10回参照。
207	形 象 (不明)	裾広がりの円筒状の破片で上方の欠損部分での直径は約9cm。188のような家形の柱の一部の可能性もある。	206と同質。	10 YR 7/4	〃
208	形 象 (脚部)	底径約10.5cmで上方が径を増す円筒状。内面は底部付近がやや肥厚しオヤニ痕を残す他はナメのナデ及びハケメ、外面はタテハケメで一部タテの強いナデ。馬形等の脚の可能性が高い。	細砂含み、比較的堅緻。	2.5YR 6/8	〃
209	形 象 (不明)	器種不明。厚さ1.6~1.8cmの粘土板を本体とし、図示した左側に段の付く鱗状の部分があり、半球形の台が付くのかも知れない。右上部には凹形の割離痕がある。表面はナデでナメハケメが残される。内面には横走する幅1cm程の圧痕がある。	細砂含み比較的堅緻。	2.5YR 5/6	〃
210	形 象 (不明)	器種不明。図示した左右に湾曲し約23cm前後の直径となろう。外面はハケメで幅6cmの広い凸帯を有する。内面はハケメ。	荒砂多量に含む。	2.5YR 6/6	S D001内出土。
211	男子人物 埴 輪	彈琴埴輪。推定全高83.3cm。足の表現がなされ全身像となっているが、円筒台部を伴う半身像を製作した後に脚部を貼り加えており、プロポーションはアンバランスである。脚結のついた袴を着用し、軽く胡坐を組んだ膝の上に箏の弦の四弦琴を抱く。左手は弦を押さえ、右手は換で弾奏する動作を表現する。頭部には冠状のものを戴いていたと推定され、残存部には赤彩が行われる。頭髮は下げ美豆良と垂髪 ^{カサカサ} の表現がなされる。顔面には眼下に横方行の赤彩が行われている。腰にはベルトが着用され、左側に赤彩された顔輪状の大刀を佩く。台部と胴部はタテハケメ、胴部前面はその後ナデ。脚部、腕、頭部、大刀はナデ。内面は全てナデ。腕は中空造りで、ほぞの部分を肩部に差し込んで固定する。	小礫と粗砂を多量に含む。淡黄赤褐色を呈し、焼成は良好にして堅緻。	5YR 6/4	西側外堀の中堤寄り出土。 頭部の70%、左手の60%、左足先欠失。
212	女子人物 埴 輪	半身像で円筒台部を伴う。全高72.7cm。両手を前方につき出すポーズをとっているが、両手先の間隔があいており、物を保持するスタイルではない。着衣及び乳房の表現はなく、腰に帯をまき、前方で結ぶ。丸い顔面には大きな鼻と眉が粘土貼付けにより表現されて、眼孔と口は外面からの穿孔による。目尻が下り気味で小さな口も特徴的である。頭髮は所謂つぶし島田で、平面長方形に作り、前後に大きくはり出し中間の部分に髷が表現され、その両端部が直立する。島田及び髷の上面には縁刻の斜格子文様が付される。耳は環状に作り、耳孔を穿孔し耳環と三稜の耳玉が飾られる。台部と胴部はタテハケメ。頭部と手はナデ。内面は全てナデ。	小礫と粗砂を多量に含む。黄赤褐色を呈し、焼成は良好にして堅緻。	5YR 5/6	西側外堀の中堤寄り出土。 完形。但し両手先を欠く。

番号	種別、部位	形態・調整技法等の特徴	胎土、焼成等の特徴	色調	備考
213	女子人物 埴輪	現存高31.5cm。鼻と眉は粘土貼りつけ、目と口は外面からの穿孔による。大きく面長な顔に、筋の通った鼻と、水平で切長な目と眉が印象的であり、気品が感じられる。耳は環状に作られる。頭頂には鳥田髷が乗る。着衣と乳房の表現は行われていないが、一巡する粘土紐の上に等間隔で勾玉を貼りつけ頸飾りを表わす。 胴部、頭部ともに粘土繕巻き上げて成形し最後に頭頂の穴を鳥田髷で塞ぐ。頭部外面一丁寡なナデ、内面一横位ナデ、胴部内面下半一斜位ハケメ、同下半一横位ハケメ、胴部外面下半一タテハケメ、同上半一横位ハケメ後難なナデ。腕の付け根に差し込み式の接着痕あり。	細砂を多量含むが硬さを全く含まない。肌色に近い淡乳赤褐色を呈し、焼成は良好。	10YR 7/4	西側外堀の中堤寄り出土。 頭部80%遺存。胴部下平と胸腕及び鳥田髷の一部を欠失。
214	形象埴輪 台部	円筒状の形象埴輪の台部で現存高25.0cm。上方に水平な凸帯の剝落痕が認められ、これを境に内湾しながらすぼまる器形を呈する。凸帯の直下には対向して一対のスカンが穿孔される。外面はタテハケメだが凸帯より上では断続的なヨコハケメも加えられる。内面は底部付までヨコハケメ、それより上部では左上りのナメハケメ。人物埴輪の台部とすれば一条凸帯で丈が低く、半身像でなく、全身像の台部の可能性が大きい。ちなみに267の足は胎土、焼成、色調ともに本品と共通し、ハケメ原形も同一である。	細砂を少量含む。乳白色を呈し、やや軟質の焼上り。	7.5YR 7/3	西側外堀の中堤寄り出土。 約40%遺存。
215	女子人物 埴輪	同一個体4片から復元実測。眉は粘土紐貼付で、やや目尻の下る目と小さな口は外面から鋭利な工具で穿孔される。顔面上端には鳥田髷の剝離痕があり、髷は後部のみ現存。外面は丁寧なナデ、内面はナデ。	小礫、粗砂を多量に含む。乳赤褐色を呈し、焼成は良好にして堅緻。	5YR 6/8	西側外堀出土。
216	男子人物 埴輪	顔面の主要部分が遺存する。水平で小さい目と口は外面から穿孔、一文字の眉と筋の通った鼻は粘土貼付けで表現する。向かって左側に下げ美豆良の根本が残存し男子と判る。目を中心に四分円状と推定される赤色の顔面彩色が施される。外面は丁寧なナデ、内面はナデ。	小礫、粗砂を少量含む。外面淡赤茶褐色、内面暗茶褐色、焼成は良好にして堅緻。	5YR 6/6	西側中堤端部出土。
217	人物埴輪	平板で顔の大きい人物。あごの稜線が鋭くとがる。一文字に結んだ口とあわせて居持人等の可能性が考えられる。髪型は美豆良の顔ではない。耳孔は竹管穿孔によるが、1.6cm下に穿孔ミスから埋めた耳孔痕がある。外面ナデ、内面にユビオサエ痕多数あり。	粗砂を多量含む。暗橙褐色を呈し、焼成は普通。	5YR 6/8	
218	女子人物 埴輪	顔面上部の破片。粘土紐で眉を表現し、目は鋭利な工具で穿孔。頭部上端の鳥田髷の剝落痕で女子と判る。耳孔は竹管穿孔の小孔で表現。外面ナデ、内面ヨコハケメで、水平な粘土紐接合痕がある。	細砂を少量含む。暗赤褐色を呈し、焼成は良好にして堅緻。	2.5YR 5/6	西側外堀内、外側出土。
219	男子人物 埴輪	頭頂部と胴部以下を欠失する、小型の人物埴輪。右手を曲げて眉の高さまで上げ、左手を自然に曲げて下げるのは舞踏の姿勢の表現と理解される。鼻は粘土貼付け、小さな目と口は外面から鋭利な刃物で穿孔する。後頭部から背中にかけて幅3.5cmの粘土帯を貼りつけて垂髪を表現し男子と判る。竹管穿孔による右小耳の下の粘土塊は下げ美豆良残欠の可能性あり。また、265の大刀は胎土、焼成、色調とも同一で、腹部に佩いていたものと判断される。 腕は中実で、肩部の穴に差し込み固定する方式を採る。手は拇指のみを別体で作るミット形で、4指を区別する表現はない。胴部と後頭部の外面を主にタテハケメ、腕と顔面から首にかけてはナデ、内面は胴部をヨコハケメ、首から上をナデ。	小礫及び粗砂を大量に含む。暗赤褐色を呈し、焼成は良好、但し、表面は剝離しやすい。	2.5YR 4/6	西側外堀の中堤寄り出土。

番号	類別、部位	形態、調整技法等の特徴	胎土、焼成等の特徴	色 調	備 考
220 ↳ 223	天冠状埴 輪 片	4個とも同一個体。最も残りの良い220は鳥羽状で、粘土層貼付けで中心を垂直に通る棒から、左右対称上向きに稜形状の線刻を行う。水平方向に連続すると考えられ、最低3単位が複製可能で、天冠状のかぶりものが推定される。223はその基部で、人物埴輪の頭部に接着されていたものであろう。 タテハケメの後、丁寧にナデ、最後に鋭い工具で深く線刻する。	細砂を少量含む精良な胎土。濃赤褐色を呈し、焼成は良好にして、極めて堅緻。	2.5YR 5/6	220は西側中堤上、222は西側内堀出土。
224	島田鬚片	全体の40%程の破片。側面の内湾する長方形を呈し前後相似形と推定される。表面は丁寧なナデ、裏面にはユビオサエ痕残る。裏面の内側端に頭部からの離脱痕があり、それに接して2箇所に粘土補強帯と、これを受けるはざ穴が残る。	粗砂を大量に含む。暗赤褐色を呈し、焼成は普通である。	2.5YR 5/6	西側外堀の中堤寄りから女子人物埴輪(213)と重って出土。
225	島田鬚片	224より一回り小型で、端部に丸味をもつ銅形に近い形状。外面は丁寧にナデ、裏面は長軸方向にタテハケメ。裏面に頭部からの離脱痕が認められ、鬚部と判断される。	粗砂をやや多く含む。暗赤褐色を呈し、焼成は良好にして堅緻である。	2.5YR 4/6	西側中堤の外側端部出土。
226	表状埴輪片	側面の内湾する長方形で、両端が相似形に嵌る形状は島田鬚とも共通するが、調整がやや雑である点と結髪表現のない点から他埴輪片とも考えられる。表面はナデ、裏面には作業台の木理痕を残す。裏面の端に直角方向の離脱痕がある。	粗砂を少量含む。暗赤褐色を呈し、焼成は良好である。	10R 4/6	西側中堤上出土。
227	武人胄片	上方に行くに従って内湾しすばまる円形の縦横に粘土帯が貼付される。縦の帯は2条認められ、1方は幅の狭く中央に一直線の円形の粘土塊が貼付され、もう一方は幅広で2列である。上方ではこれに直交して一条の幅広の帯があり、2列の円形粘土塊が貼付される。 外面タテハケメの後、凸帯を貼付け、ナデ。内面ナデで、粘土継接合痕を6条残す。	細砂を多量含む。淡紅色を呈し、やや軟質の土を呈し、焼成は普通。	7.5YR 7/6	西側中堤上出土。
228	美 豆 良	中実で断面円形の粘土棒の下端を、指で押圧成形する。上端裏面に離脱痕があり、右側の美豆良と判る。外側のみ等間隔で3条の横帯状の赤彩があり、結髪表現と考えられる。	小礫及び粗砂を多量含む。橙褐色で焼成は普通。	5YR 6/6	西側外堀の中堤寄り出土。
229	〃	228より一まわり小型だが、成形法は同一で、裏側まで完成しない3条の赤彩も共通する。上端裏面離脱痕で、右側の美豆良と判る。外面ナデ。	小礫、粗砂を少量含む。淡赤茶褐色を呈し、焼成は良好にして堅緻。	5YR 7/6	西側外堀出土。
230	〃	成形法、形態は228、229と同じだが、赤彩はない。図示面の調整が表面より丁寧に右側の美豆良の可能性が高い。外面ナデ。	粗砂をやや多く含む。橙褐色を呈し、焼成は普通。	5YR 7/6	西側外堀出土。
231	〃	中実の円柱状の粘土棒の端部をユビオサエで前後方向に拡張して成形する点は他と同一。調整が不十分で、ヒビ割れがある。図の裏面が平坦なため、右側の美豆良と判断される。	粗砂をやや多く含む。乳褐色を呈し、焼成は不良で、やや軟質である。	7.5YR 8/4	西側外堀の中堤寄りから女子人物埴輪(213)と接して出土。
232	〃	成形法、形態とも他に類する。下端の一部を欠失している。左右の別は判定不能である。	細砂少量含む。淡橙褐色。焼成は不良で軟質。	7.5YR 8/6	S D001内出土。
233	人物埴輪前 (I a左)	ほぼ完存の左手。肩で直角に曲がり、腕はゆるやかに内湾する。上端に肩の穴への差し込み部があり、これに連続し肘部の接着面が段をなす。掌部内面は粘土紐で四指が表現され、直交し拇指が付く。四指の外表面が覆われるのは手甲の表現と推定される。腕の内面は直径1cm弱の穴があき、中空。外面はハケメ。差し込み部はユビオサエ。掌部は丁寧にナデ。	乳褐色を呈し、焼成は普通。	10YR 8/4	西側外堀出土。

番号	種別、部位	形態、調整技法等の特徴	胎土、焼成等の特徴	色調	備考
234	人物埴輪腕 (I右)	付根～掌の上平遺存。直径1cm強の中空。腕にはほぼ直交して拇指が付けられ、右手と判る。外面はハケメとヘラによるナデを併用している。	乳白色を呈し、焼成は不良で軟質である。	7.5YR 8/3	西側中堤土出土。
235	人物埴輪腕 (Ia左)	直交して付く拇指を欠失する他は完存。全長16.4cm。掌の内側に粘土紐で四指を表現。手首に白色の部分が環状に認められ、装飾の刻離が推定される。上端部をふさぐが、内部は中空の可能性が高く、手首に刺突を一巡させるのは掌部を被覆させるためと判断される。調整はハケメの後ナデ。左手。	淡紅乳白色を呈し、焼成は軟質である。	7.5YR 7/6	西側中堤の外側端部出土。
236	人物埴輪腕 (Ia右)	拇指と四指指先を欠失。掌の内側は粘土紐で四指を表現。腕部は中空で、穴は上端で楕円形。外面はハケメの後にナデ。右手。	淡橙褐色を呈し、焼成は良好にして堅緻。	2.5YR 6/6	西側外堤の中堤際出土。
237	人物埴輪腕	指先を欠失。肩部の差し込み部の表面に曲げた際に生じたと考えられる縦じわがある。腕部はこの芯部にさらに粘土を巻きつけて成形。ほぼ直交に開く拇指の位置で左手と判る。外面ヘラナデ。中空の可能性あり。	淡橙褐色を呈し、焼成は良好にして堅緻。	2.5YR 6/6	西側外堤内溝のブリッジ南側出土。
238	人物埴輪腕 (IIb右)	中実で拇指はほぼ直交方向に付けられる。現存部からの推定では四指は別々に作られておらず、ミット形を呈する。外面ハケメの後ナデ。	暗橙褐色を呈し、焼成は良好にして堅緻。	2.5YR 5/6	
239	人物埴輪腕	二の腕を欠き、中実に製作される。拇指は開いて独立するが、四指の区別はなく、ミット形。掌部外面には作業台の木理疋痕が認められる。腕部は強いナデによって断面多角形。左手。	暗赤褐色を呈し、焼成は良好にして極めて堅緻。	2.5YR 5/6	
240	人物埴輪腕 (Ia右)	指先を欠く。中空の芯部に肉付けを行って腕を形成している。拇指は直交して作り、掌の内側には粘土紐で四指を別々に表現。外面ハケメ。右手。	淡褐色を呈し、焼成は良好にして堅緻。	7.5YR 7/6	西側中堤の外側端部出土。
241	人物埴輪腕 (Ia左)	指先の一部欠く。芯部は手首まで中空、これに粘土で肉付けし腕を成形。掌部は拇指が直交して付き、四指を粘土紐で表現。外面ハケメとヘラナデを併用。左手。	乳白色を呈し、軟質の焼上りである。	10YR 8/3	西側中堤土出土。
242	人物埴輪腕 (I)	付け根の部分。破面側で中心をはずれて小径の穴があり、中空と判る。外面ハケメ。腕下はナデ。差し込み部はユビオサエ。	橙赤褐色を呈し、焼成は良好にして堅緻。	5YR 6/8	西側外堤出土。
243	人物埴輪腕 (I)	付け根の部分。中空に製作されるが、差し込み端部で穴はふさがれる。外面ハケメの後ナデ。	淡褐色を呈し、焼成は普通で軟質。	7.5YR 7/6	西側外堤のブリッジ南側出土。
244	人物埴輪腕	掌部を欠失する。腕の破断面では中実であるが、中央部での観察不能。差し込み部はハケメの後オサエを行う。表面は磨耗するがハケメの後ナデか。	表面は橙褐色を呈するが、差し込み部は乳白色。焼成は不良で軟質。	7.5YR 8/6	西側外堤出土。
245	人物埴輪腕 (II)	二の腕の部分である。中実に製作されている。外面ハケメの後ナデ。	濃赤褐色を呈し、焼成は良好にして堅緻。	2.5YR 5/6	S D001内出土。 (第103回参照)
246	人物埴輪腕 (II)	差し込み部から二の腕にかけて遺存。中実。外面ナデ調整。差し込み部はユビオサエとしぼり痕が残る。	橙褐色を呈し、焼成は良好にして堅緻。	5YR 7/6	S D001内出土。 (第103回参照)
247	人物埴輪腕 (II)	付け根の部分で、本体側を伴い、肩部への固定方式が判る破片。中実で、差し込み部はユビオサエが認められる。腕外面はハケメ。カーブから右肩か。	橙赤褐色を呈し、焼成は普通	5YR 6/8	西側外堤内の南端中堤寄り出土。
248	人物埴輪腕	二つの腕の部分で中実に製作されている。差し込み部は細く、	濃赤褐色を呈し、焼成は良好にして	2.5YR 5/6	西側外堤の中堤際出土。

番号	種類、部位	形態、調整技法等の特徴	胎土、焼成等の特徴	色調	備考
	(II)	ニビオサエが認められる。腕外面はナデ。	堅緻。		
249	人物埴輪腕 (II)	付け根部分で中実に製作されている。差し込み部にはニビオサエが認められる。腕外面はハケメの後ナデ。	淡赤褐色を呈し、焼成は良好にして堅緻。	2.5YR 5/6	西側外堀出土。
250	人物埴輪腕 (I a 右)	二の腕を欠失。腕は中空で製作される。掌の内側に粘土紐で四指を表現し、拇指は開いて独立している。大刀か槍を握るような状態で掌を丸めている。	淡紅乳白色を呈し、焼成は不良にして軟質。	7.5YR 8/4	西側外堀の中堤寄り出土。
251	人物埴輪腕 (I)	付け根部分。中空だが、差し込み端部はふさがる。差し込み部はニビオサエ、外面はハケメ。腋下はナデ。	橙褐色を呈し、焼成は良好。	5YR 6/8	西側外堀出土。
252	人物埴輪腕 (II)	付け根部分、中実だが、差し込み端部は鈴口状を呈している。差し込み部ニビオサエ、外面ナデ。	赤褐色を呈し、焼成普通。	2.5YR 6/6	西側外堀出土。
253	人物埴輪腕	腕の中間部である。弓状に曲げた長い腕の一部分と推定される。中実に製作され、外面はハケメの後、ナデが加えられている。258は同一個体と判断される。	赤褐色を呈し、焼成は良好にして堅緻。	2.5YR 6/6	西側内堀出土。
254	人物埴輪腕 (I 右)	手首部分で、腕と指先を欠失。腕は中空だが手首の位置で止り、末端に棒または竹管状の圧痕が認められる。拇指が掌に直交して付く。外面ハケメ。右手。	乳褐色を呈し、焼成は普通。	10YR 8/4	
255	人物埴輪腕 (I a 右)	掌部分である。現存部分では中実だが、中空の腕が付くものと推定される。拇指は直角に付けられ、掌の内側には粘土紐で四指が表現される。指を内側に曲げ、物を握る形態を示している。右手。	赤褐色を呈し、焼成は良好にして堅緻。	2.5YR 6/6	西側外堀の中堤寄り出土。
256	人物埴輪腕 (II c 左)	二の腕を欠失。外側に開く状態の左腕。中実に製作され、掌は直交し拇指を付けるのみで、四指の表現を行わないミット形。外面ナデ。	茶褐色を呈し、焼成は普通。	7.5YR 7/6	西側外堀の中堤寄り出土。
257	人物埴輪腕 (II a 左)	左の掌部。腕は中実。掌には大きな拇指が直角に付けられ、掌の内側に粘土紐を貼り付けて四指を表現する。手首には一條の帯状の赤彩が施される。掌外面の粗い木理圧痕は、作業台のものが。表面はナデ。261と共通性強く、対をなすかと思われる。	淡赤褐色を呈し、焼成は良好にして堅緻。	7.5YR 6/7	
258	人物埴輪腕 (II b 右)	右の掌部。拇指が直角に付けられ、四指は外面に線刻で表現する。253中実で長い腕と同一個体と思われる、211の彈琴埴輪の腕及び掌と共通する特徴がある。	*	5YR 6/6	
259	人物埴輪腕 (II b 右)	二の腕と指先を欠失。中実で、拇指は掌の裏側から直角に粘土紐を粘り足し表現する。現状では四指の表現はなされていない。外面ハケメの後ナデ。	赤褐色を呈し、焼成は普通。	2.5YR 5/8	西側外堀内溝出土。
260	人物埴輪腕 (II b 左)	左の掌部。直角方向に拇指の脱落痕あり。指先を欠失、現状では四指の表現を行っていない。外面ナデ。	淡褐色を呈し、焼成は良好にして堅緻。	7.5YR 7/6	西側外堀の中堤際出土。
261	*	右の掌部である。腕は中実に製作されている。掌には拇指を直交して付け、四指は粘土紐を束ねて表現しているが、先端を欠失している。手首の部分には赤彩が残されている。外面ナデ。257と対をなす。	淡赤褐色を呈し、焼成は良好にして堅緻。	5YR 6/6	西側外堀の中堤寄り出土。
262	人物埴輪足	脚部は中空の高状で、これに足部を敷いて製作している。五指の表現も靴の表現も行われていない。現存部に台部との接合痕はなく、座敷の足であることが明らか。胎土・焼成や出土位置の一致から女子人物埴輪(213)の足となる可能性がある。外面ナデ。	淡橙褐色を呈し、焼成は良好にして堅緻。	7.5YR 8/6	西側外堀の中堤寄り出土。

番号	種別、部位	形態、調整技法等の特徴	胎土、焼成等の特徴	色調	備考
263	人物埴輪 佩刀	人物埴輪の左側腹部に着装されていたと推定される。現存部は柄の部分である。断面円形で柄頭は倒卵形で所謂頭椎状を呈す。柄頭裏側は全面、表面は緑線状に赤彩されている。外面はユビオサエ及びナデ。	小礫、粗砂を少量含む。赤茶褐色を呈し、焼成は良好にして堅緻。	5YR 5/6	西側外堀の中堤際出土。
264	〃	263より一回り大型である。柄頭は同じく頭椎状を呈し、赤彩が施される。彈琴埴輪(211)の佩刀との類似性が注目される。外面はユビオサエ及びナデ。	粗砂をやや多く含む。暗褐色を呈し、焼成は良好にして堅緻。	5YR 6/8	西側内堀出土、第9図参照。
265	〃	柄から鞘にかけて遺存。263・264と形態がやや異り、柄頭の前面が直線的で、木装柄頭を戴たものかも知れない。柄部は断面円形に作られるが、鞘は人物埴輪腹部に接着するため湾曲し、剥落痕が認められる。胎土・焼成・色調及び出土位置の一致から断る男子人物埴輪(219)に装着されていたものと判断される。	粗砂を多量に含む。暗赤褐色を呈し、焼成は良好だが表面が割離しやすい。	2.5YR 4/6	西側外堀中堤寄り出土。
266	人物埴輪琴	人物埴輪の抱く琴の破片で、表面に本体からの脱着痕がある。琴頭を欠失し、全体の40%程度遺存。琴尾には6個の突起が付けられ、突起の間から5本の線刻を行っており、五絃琴を表現したものである。表面ハケメの後ナデ。裏面ヨコハケメ、側面ナデ。	白色パリス粒を多量含む。乳褐色を呈し、焼成は良好だが、表面は割離しやすい。	2.5YR 5/6	西側外堀出土。
267	人物埴輪 脚部	人物埴輪立像の脚部である。上方に脚結の表現が粘土紐の粘付けによって行われている。下端は曲って足部に接続するものと推定される。粘土紐巻き上げによって中空に製作されており、下端での推定直径6.5cmを測る。外面タテハケメ。内面は粘土紐接合痕が明瞭。	細砂粒を多量に含む。乳褐色を呈し、軟質の焼上り。	5YR 7/4	
268	人物埴輪 帯鏡	女子埴輪の腹部に下げた鏡と考えられ、本体の上に貼付されたものである。円形の鏡体の縁には5個の鈴が等間隔に付けられ、五鈴鏡を模したものと判る。鈴には斜め外方に鈴口が表現されている。外面ナデ。本体外面タテハケメ、内面斜位ナデ。	小礫、粗砂を多量含む。表面淡褐色。裏面暗茶褐色を呈し、焼成は普通。	5YR 6/6	西側中堤の外側端部出土。

須恵器、土師器

番号	器種	形態、調整技法等の特徴	胎土、焼成等の特徴	色調	備考
269	須恵器 甕	小形の甕。口縁部は「く」の字に外湾して開く。端部は上、下側方に小さく突出。内外ヨコナデで仕上げ、外面は無文。体部は直接口縁部と接合しないが胎土、焼成や釉の状況から同一個体に誤りはない。外面平行タタキ、内面は同心円タタキ。口縁部内と体部外面には自然釉がかかり体部上位は特に厚い。	精良な胎土で硬緻。	5Y 4/2	造り出し南西内堀出土、第9図参照。
270	須恵器 甕口縁部	口縁部破片で、端部は上下に突出し、内外ヨコナデにより仕上げられる。外面は2条1単位の沈線下に5条1単位の櫛描波状文が施される。外面は黒色に自然釉がかかる。	砂粒ほとんど含まず硬緻。	N 2/0	内堀造り出し北方出土、第9図参照。
271	〃	口縁部端部を欠く。270と同一個体か。(施文の状況等が類似)	〃	N 2/0	内堀覆土。
272	〃	内外ヨコナデ。外面に鈍い沈線間に5条1単位の櫛描波状文。	〃	7.5Y 6/1	
273	〃	内外ヨコナデ。外面は鈍い沈線間に7条1単位の櫛描波状文。	〃	N 5/0	内堀出土。
274	〃	内外ヨコナデ。外面は上方に8条1単位の櫛描波状文が鈍い沈線の区画中に施され、さらにその下に7条1単位の櫛描波状文が施され、その下方はカキメにより区画される。	〃	N 2/0	〃
275	〃	体部付近の破片で、「く」の字に外湾して開いている。口縁部内外ヨコナデ、外面上位にはわずかに波状文あり。体部は外面を平行タタキ、内面同心円タタキ。	精良な胎土で硬緻。	N 2/0	〃

番号	類別, 部位	形態, 調整技法等の特徴	胎土, 灰成等の特徴	色調	備考
276	*	外面は格子風のタタキ、内面は同心円タタキ。	硬 緻。	N 5/0	*
277	須 恵 器 菱 体 部	やや厚手の作りで、外面は浅い平行タタキの後カキメを施す。内面は同心円タタキ。		5Y 5/1	
278	*	外面は浅い平行タタキを部分的にヨコナデにより消している。内面は同心円タタキ。	微細砂含み硬緻。	7.5Y 7/1	外堀出土。
279	*	外面平行タタキ、内面同心円タタキ。	硬 緻。	2.5Y 6/2	内堀出土。
280	*	外面平行タタキ、内面同心円タタキ。外面はタタキの後、カキメ様の条痕を施す。	硬 緻。	7.5Y 4/1	内堀より出し北方出土。
281	須 恵 器 器 台	大形の高杯形の器台の口縁部と考えられる。内外全面をヨコナデ、外面は鈍い沈線で区画された間に5~6条を1単位とした櫛歯状文を上下2段に施す。外面は全体にうすく自然釉がかかる。口縁部ひずみあり。	白色の細砂含み硬緻。	5Y 6/1	
282	*	両破片共281の同一個体と考えられる器台脚部破片で、三角形のスカンが認められる。内外ヨコナデで、外面は282が櫛歯状文を3段に施し、283も沈線下に3段からなる櫛歯状文が施されるが、沈線上位にも波状文が認められる。		7.5Y 6/1 2.5G Y 5/1	283は外堀出土。
284	須 恵 器 高 杯	長脚1段スカンを有する小形高杯で、284, 285は同一個体と考えられる。スカンは3方に穿孔されているものと思われる。復原高は約12cm、杯口縁径、脚端径共に8.8cm、内外全面をヨコナデするが、杯部外面は上2条、下1条の沈線間に帯状工具による左傾する列点文が施される。片々同遺存。	砂粒を少量含み硬緻。	N 2/0 N 2/0	284, 285共に内堀型土出土。
286	須 恵 器 提 瓶	口縁部半周弱、体部劣位の遺存、復原径は口縁部9.3cm、体部23cm、前後幅(厚さ)14.6cm、復原高25.4cm、口縁部は体部から「く」の字状に外湾する比較的確かいもので、端部外面は外方に鋭く突出する段が形成される。内外面をヨコナデ。体部は背面を回転ヘラケズリ、正面は円形の粘土板でふきぎ同心円のカキメを側面部まで施す。正面中心左右の上方にカキメの消える脱落痕があり、把手等の貼付が考えられる。体部内面はほぼ全面をヨコナデ。カキメは1.5cm/10本。	堅 緻。	2.5Y 6/1	造出し北側内堀出土、第9図参照。
287	土 器 杯	所謂「模倣杯」で、須恵器杯蓋と同形態の杯。約尾闕ほどの小破片で復原口径12.5cm、高さは4.2cm。口縁部内外ヨコナデ、体部はヘラケズリ。口縁部外面にはわずかな段が形成される。	微細砂含み、ややしまりを欠く。	7.5Y R 7/6	

縄文土器、石器

番号	器 種	形態, 調整技法等の特徴	胎土, 灰成等の特徴	色調	備考
288	縄文土器	内外面に貝殻条痕を施す土器で、前期茅山下層式と思われる。	繊維多く含む。	5Y R 6/6	
289	*	中期加曾利E式で外面わずかに認められる縄文はRL縦回転。	細砂含み硬緻。	5Y R 5/4	
290	*	加曾利EⅡ式。縄文はRL斜位回転。	細砂含みや軟質。	5Y R 5/8	外堀出土。
291	*	加曾利EⅡ式。縄文はRL縦回転で施文後に沈線を施す。	細砂含み硬緻。	2.5Y R 5/6	*
292	*	加曾利EⅡ式。縄文はRL横回転で施文後に沈線を施す。	砂粒含みや軟質。	10Y R 8/4	*
293	*	加曾利EⅡ式。縄文はRL、口縁は横、体部は縦回転。	やや軟質。	7.5Y R 5/4	
294	*	波状口縁で加曾利EⅡ式と思われる。RL横回転。	細砂含み硬緻。	5 Y R 6/6	内堀出土。
295	*	加曾利EⅡ式。RL斜位回転。	しまり欠く。	10Y R 7/4	
296	*	加曾利EⅡ式。	細砂含み硬緻。	7.5Y R 6/4	外堀出土。

番号	種別・部位	形態・調整技法等の特徴	胎土、焼成等の特徴	色調	備考
297	＊	加曾利EⅡ式と思われる。R L横回転。	297は堅緻、地はややもろい。	265Y R6/1 280Y R6/4 292Y R5/5	299は外堀出土。
300	＊	加曾利EⅡ式。R Lで口縁部は横、体部は縦回転。施文後磨酒。隆帯に沿いなゾリを加え縄文が一部消える。	細砂わずかに含み非常に堅緻。	5YR 5/6	
301	＊	加曾利EⅡ式。口縁直下に横に及び一部縦に凹形の刺突文あり。R L縦回転。表面やや磨減。	ややしまりを欠く。	5YR 6/6	外堀出土。
302 ～304	＊	加曾利EⅡ会であろう。303、304は口縁部。	302はもろい。	302.5YR4/4 303.5YR5/6 304.5YR5/8	302は外堀、303は中堀出土。
305	＊	外堀に作られたブリッジの北側で出土した埋篋で、加曾利EⅡ～Ⅲ式。縄文はR Lの縦回転で、施文後沈線を描しその間を磨酒す。図示部位は略全周遺存。	白色の砂流を多量に含みやや軟質。	5YR 6/8	ブリッジ北方出土。第10、11図参照。
306 ～315	＊	加曾利EⅡ～Ⅲ式。縄文はR Lで縦回転。313のみ無節L縦回転。	306は砂粒含み軟質。	306.10YR6/6 307.5YR5/6 308.10YR4/4 309.311.315 5YR5/8 307.5YR5/6 312.5YR6/4 313.5YR4/3 314.5YR2/1	307、310、313は外堀、314は中堀出土。
316 ～318	＊	加曾利EⅢ式。磨酒懸垂文帯中に楕円形に縄文を残すモチーフかと思われる。縄文はR L縦回転。		3167.5YR5/6 317.5YR6/6 3187.5YR5/4	316、318は外堀、317は中堀出土。
319	＊	加曾利EⅢ式。	砂粒含み堅緻。	5YR 5/6	内堀出土。
320 ～322	＊	後期 堀之内Ⅰ式。隆帯を貼付け、棒状工具でその上に斜めに押圧を加え、地文であるR Lの縄文を縦回転させて施文。	共に焦細砂をわずかに含み比較的堅緻。	3207.5YR6/4 321.5YR4/4 3227.5YR6/4	320は内堀、312、322は中堀出土。
323	石器	小形磨製石斧の刃部で、淡緑色をしたキメの細かな砂岩製。刃先が使用によるものか、部分的に小さく欠損している。			外堀出土。

V 結 語

昭和五四、五七年度の調査で得られた瓦塚古墳の調査の成果については、前章までに記載したとおりである。本章では、これらの成果にもとづき、瓦塚古墳とその周堀及び、出土遺物について若干の考察を加え、その問題点及び今後の課題を提示しておきたい。

一 古墳各部の形態及び規模について

瓦塚古墳の周堀は、両年度の調査で二重となることが判明した。また、その平面形態は、昭和六〇年一〇月の県教育局文化財保護課の墳丘北側民有地内の調査成果を考へあわせると、方形プランとなることが、推測される。

調査の成果をもとに、墳丘及び周堀等を推定復原したのが第43図である（復原線はいずれもローム検出面でのラインであり、以下の記載もそのラインによる）。主軸については後円部の標高二三呎の等高線がほぼ円形に回るので、その中心を求め、これを後円部中心とした。また、主軸線は昭和五四年度調査区で確認した前方部前面のラインが、昭和五七年度調査区の前方面のラインと交るわ地点（前方部西コーナー部）と、調査により確認した前方部南コーナー部との中点と前述の後円部中点とを通るものとして設定した。そうした場合、座標北とはN 46° Eという方位角度となる。以下、この図をもとに各部について触れる。

墳 丘

墳丘長については、基底部ローム層上面における推定で七一・〇呎であるが、墳丘盛土との間にテラス（平坦部）の存在を仮定すれば、さらに規模は

小さくなる。後円部径は、三二呎、前方部前面幅四五呎、くびれ部幅は、二〇呎と推定され、平面形態では、前方部が後円部に比べて大きく、後期古墳としての一般的な特徴を備えている。

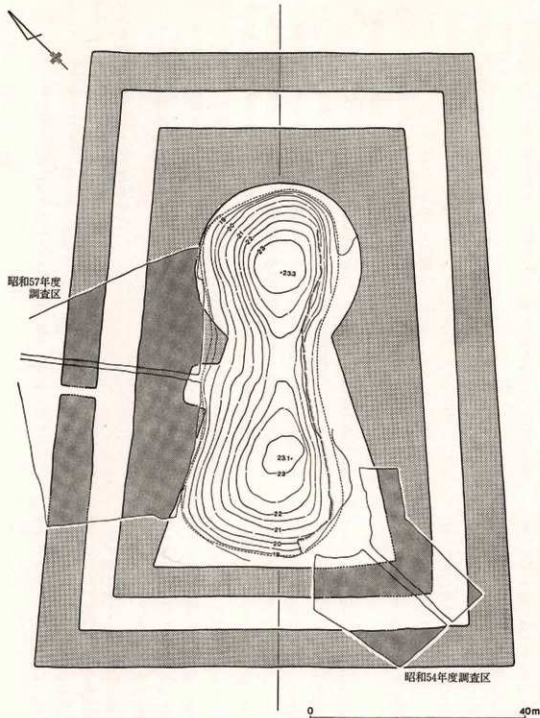
前方部西側の、くびれ部に近い部分には造り出しが確認されている。後円部墳丘とは離れており、上田宏範氏の分類によるB群である。しかし、前方部の一方にだけ存在するB群であるか、主軸と対称位置にも存在するB群であるかは今後の調査の課題ではあるが、前方後円墳の墳丘に付設される造り出しとしては、一般的な位置といえる。

造り出し部分に盛土があったかどうかは、土層観察からは不明である。現墳丘の等高線の状況からは、あったとしても小規模なものと思われる。また、埴輪や須恵器等の出土や、その樹立痕や使用の痕跡を確認することはできなかったが、造り出しの周辺の内堀からは須恵器片の出土が目立ち、造り出しでの祭祀行為を窺わせる状況にある。

周 堀

周堀は二重の長方形にめぐるが、向い合う二辺長がほぼ等しい稲荷山古墳の周堀とは形態がやや異なり、「台形」という呼称がふさわしい。以下、稲荷山古墳に代表される形態を「長方形周堀」、瓦塚古墳などに代表されるものを「台形周堀」と呼ぶことにしたい。

埼玉古墳群内の前方後円墳では、稲荷山古墳が最古と考えられ、古墳群中最大の前方後円墳である二子山古墳も、二重の台形周堀を持つことは確実と思われる。また、鉄砲山古墳も台形二重周堀と考えられる。このような周堀



第43図 瓦塚古墳周堀想定復原図 (1/700)

の平面形態にみられる長方形と台形のちがいは、主として後円部に對する前方部の幅に起因し、前方部の發達度を示すものと考えられるが、そうした点では同類と考えてよいだろう。兩者を併せて「方形周堀」と呼称したい。瓦塚古墳で確認された方形二重周堀は、埼玉古墳群の前方後円墳では稲荷山古墳及び二子山古墳、鉄砲山古墳、愛宕山古墳(後部)に続く、五番目の発掘例ということになる。

前方後円墳の周堀は、後円部付近では後円部の円弧と同心円を描き、所謂「盾形」と称される形態、もしくは「馬蹄形」のものが多く、方形の周堀を有する前方後円墳の類例は、市毛勲氏もその希少性に注目しているが、推定されるものを含めても十指に満たない。そして、その大半が埼玉古墳群で確認されている。(注5)
瓦塚の周堀は、内堀の短辺(後円部後側)が約四七呎、長辺が約五

九厨、長さが八六厨である。外堀は短辺約七三厨、長辺約八九厨、長さは約一四厨となり、周堀を含めた古墳全体の面積は約九三〇〇平方厨となる。東北方に所在する二子山古墳、北方の愛宕山古墳の外堀までは、最も近い部分で四〇厨前後の距離とならう。

ブリッジ

造り出し北西の中堤外方を結ぶブリッジが昭和五七年度調査区内で発見された。基部での幅は約二厨で、ロームを掘り残して作り出される。これまで稲荷山古墳及び二子山古墳でも外堀で、ブリッジが確認されているが、幅は稲荷山古墳のものは約二・七厨、二子山古墳は約三・一厨で、これらと比較すると瓦塚古墳のものは小規模である。また、稲荷山古墳、二子山古墳の場合には外方と中堤に付設された造り出しとを連絡するものである点も異なる。

稲荷山古墳の場合、中堤付設の造り出しは、その周囲の外堀から比較的多数の形象埴輪が出土しており、その種類も武人、巫女、彈琴人物や家形、盾形などの形象埴輪が多く、ここで、埴輪を使用した祭祀が行われたと考えられている。瓦塚古墳の場合は、こうした造り出しは存在せず、ブリッジ南方の外堀から、彈琴する男子や女子人物、家形や盾形などの形象埴輪が出土している。ここでは埴輪を使用した祭祀の場は中堤上に設定されていることが明らかである。瓦塚古墳の場合、このように後円部西方中堤部の造り出しの欠如が、埼玉古墳群の前方後円墳の造営規格上の新旧によるものか、あるいは、身分秩序による古墳築造規格の規制などに帰結するかは現状では判断できない。本古墳に後出するものと思われる前方後円墳の鉄砲山古墳や將軍山古墳の同位置の調査が要請されるところである。

(杉崎 茂樹)

註1 個人住宅用地内の範圍確認調査による。

註2 上田宏範 『前方後円墳』 学生社、昭和四四年一〇月

註3 柳田敬司、他 『埼玉稲荷山古墳』 埼玉県教育委員会、昭和五五年二月

註4 ①栗原文藏、田部井功 『天王山・梅塚古墳他周堀発掘調査概要』 『資料館報』 No. 6 1 果立さきたま資料館、昭和五〇年六月

②小川良祐、今泉泰之、金子真土 『二子山古墳外堀範圍確認調査概要』 『資料館報』 No. 12 1 果立さきたま資料館、昭和五六年二月

註5 杉崎茂樹、他 『鉄砲山古墳』 埼玉県教育委員会、昭和六〇年三月

註6 杉崎茂樹、他 『愛宕山古墳』 埼玉県教育委員会、昭和六〇年三月

註7 市毛 勲 『前方後円墳における長方形周溝について』 『古代学研究』 No. 71

註8 古代学研究会 『昭和四九年三月』

註9 前方後円墳と長方形周溝については、註5で触れたことがあるので参照されたい。

註10 註4①に同じ。

二 埴輪について

円筒埴輪

二箇所の調査区出土の円筒埴輪で、完形品又はこれに近い形にまで復原できたものはないが、形態のある程度判明したものからいくつかの類型のあることがわかった。

これらの埴輪を製作技法から検討すると、外面はタテハケメのみで仕上げがなされ、タガも比較的低く、くずれをみせる台形や、「M」字形を呈するものが多く、川西編年の第V期に相当するものである。

埼玉古墳群内で、円筒埴輪の内容の明らかなものと比較すると、タガの様子では、大部分が偏平な鉄砲山古墳のものより、台形のを混える瓦塚古墳の方が、総合的な比較では古い様相を呈するといえる。次に、二子山古墳及びこれに近接する時期と考えられる愛宕山古墳は、あまり偏平なタガを含まないこと及び古い要素とされる方形や半円形のスカンを若干であるが含んでいるという点で、円形のみ、瓦塚古墳の円筒埴輪は、二子山古墳及び愛宕山古墳に後出する可能性が高い。

大形の前方後円墳と中小の前方後円墳の埴輪を同一次元で論ずることが不適当とする向きもあろう。また、一古墳への埴輪の多元的供給の可能性、あるいは、調査区出土の埴輪が古墳全体のを代表していない可能性も考慮する必要があるかも知れないが、本墳出土円筒埴輪の古墳群内での編年の位置を、現状では以上のように考えておきたい。

円柱の家形埴輪

昭和五七年度調査区外堀出土埴輪の中に円柱を表現する特異な家形埴輪(188)があった。高床を有し、寄棟造りの高屋根の吹放ち構造で、通常、高床の家屋は倉庫と考えられるものが多いが、この埴輪の壁体の欠如は倉庫としての機能を否定せざるを得ない。こうした家形埴輪の出土例は類例がほとんどなく、円柱を持つ家形埴輪やその一部と考えられるものも管見に上るのは以下のとおり数例である。

1 奈良市平城宮下層方形周溝遺構及び溝出土例

2 奈良市平城京北辺坊出土例

3 大阪市長原5号墳(塚本大塚古墳)出土例

4 大阪府柏原市玉手山古墳出土例

5 奈良県河合町大塚山古墳出土例

1はすでに立木修氏により紹介されている。切妻屋根の平屋の建物で、壁体を有する点など本古墳例と構造を全く異にする。出土遺構は他に四世紀から五世紀全般にわたる遺物を伴い、継続的な「水に対する祭祀」の場とされ、同氏によればこの家形埴輪は、「豊饒を祈る祭祀における神殿を象徴化したもの」と理解されている。

3は周堀内の出土で、円柱を有する家形埴輪の破片と考えられる。古墳は全長一〇〇呎を超える、五世紀でも比較的早い時期の前方後円墳であろう。

4は未報告で詳細が不明だが、桁行、梁行とも二間の切妻二階屋で、一階部分が吹放ちで、円柱が表現され、二階は壁体を有するようである。おおよそ四世紀末頃の所産と考えられている。

5は出土状況等不明で、高さ一八センチ余りの円筒の側面に盾の意匠がある。

盾形埴輪として紹介されることもあるが、大阪府八尾市美園一号墳出土の家形埴輪の壁体に盾を表現する例^(註11)があり、家形埴輪の柱の可能性が高い。河合大塚山古墳は五世紀後半代の築造と考えられている。

2については包含層出土で四世紀代と推定されているが詳細は不明である。以上のように、円柱を有する家形埴輪はあまりに類例が少なくかつ、全体の内容のわかるものは稀で、柱以外の構造で、本古墳と類似する例は見出せない。いずれも、本古墳例に先行する、五世紀以前という共通項が存する位である。

他の家形埴輪及びそれ以外の遺物の家の表現から高床及び二階屋で倉庫以外と考えられるものを拾うと、

- 6 三重県上野市石山古墳出土例^(註14)
- 7 大阪府八尾市美園遺跡出土例(前出)

8 兵庫県姫路市人見塚出土例^(註15)

9 奈良興広陵町佐味田宝塚古墳出土家屋文鏡例(入母屋二階造家)などがある。

6、9は宮本長二郎氏により、3の玉手山古墳例と共に、「物見台であり、酒宴を催す場」と考えられている。8は古く和田千吉氏により、雄略紀に見える「樓閣の形を想像し得」とされたものである。いずれも、高床の壁面にやや広目で、開放的とも思える窓を有しており、本古墳例と一脈通じるところはある。しかし、基本的には壁体を有する点から、本墳例に直ちに望樓的性格付けを行う訳にもいかない。

以上、本墳の円柱の家形埴輪については、その性格等、にわかに結論を下せない状況にあり、樹立状況等の明確な類例の発見を待ちたい。なお、本墳

の場合、原位置を離れた周堀中の出土だが、周辺から壁体を有する家や彈琴人物などの人物埴輪、盾などの形象埴輪が多数出土している点は注意しておく必要がある。(杉崎 茂樹)

- 註1 川西安幸 『円筒埴輪總論』 『考古学雑誌』 第64巻第2号 『日本考古学会 昭和五三年』
- 註2 杉崎茂樹、他 『鉄砲山古墳』 埼玉県教育委員会 昭和六〇年三月
- 註3 杉崎茂樹 『二子山古墳の埴輪および須恵器』 『資料館報』 14 県立さきたま資料館 昭和五八年
- 註4 杉崎茂樹、他 『愛宕山古墳』 埼玉県教育委員会 昭和六〇年三月
- 註5 立木修 『円柱を表現する家形埴輪』 『考古学雑誌』 第67巻第一号 『日本考古学会』 昭和五六年九月
- 註6 『平城宮跡と平城京跡の調査』 『奈良国立文化財研究所年報』 一九七八 同研究所 昭和五三年八月
- 註7 木原克司、也 『長原遺跡発掘調査』 『資料編』 同遺跡調査会 昭和五一年三月
- 註8 左記の文献に写真が掲載され簡単な記述がある。
- 註9 宮本長二郎 『住生活』 『日本考古学を学ぶ』 2) 有斐閣 昭和五四年八月
- 註10 村井崑雄、他 『古代史発掘7 埴輪と石の造形』 講談社 昭和四九年一〇月 P. 39など。
- 註11 渡辺昌宏 『大阪府美園遺跡一号墳出土の埴輪』 『考古学雑誌』 第67巻第4号 『日本考古学会』 昭和五七年三月
- 註12 註8の文献に記載があり、高床家形埴輪の入母家造りのものは四方に窓を持つ開方の造りという。
- 註13 和田千吉 『播磨国飾磨郡白国村人見塚調査報告』 『東京人類学会雑誌』 第一三四号 『東京人類学会』 明治三〇年五月
- 註14 梅原未治 『佐味田及新山古墳研究』 岩波書店 大正一〇年
- 註15 註8に同じ
- 註16 和田千吉 『埴輪より見える仏教以前の日本建築』 『考古界』 第八巻 第一、四号 『明治四二年四、七月』

三 須恵器について

瓦塚古墳の昭和五七年度調査区出土須恵器の中に、高杯の小破片が3点あった(284, 285)。この他図示しなかったが脚上方部位の破片が一点ある。同一個体と思われる破片で、復原高は一一・七センチ、小形の長脚一段スカシの無蓋高杯でスカシは三方向と思われる。こうした高杯は陶邑古窯跡群Ⅱ期の前半期に特徴的なものである。

県内で小形の長脚一段スカシの無蓋高杯は、神川村北塚原7号墳^(注1)、花園町黒田1号墳^(注2)、熊谷市三ヶ尻林4号墳^(注3)、須恵器窯跡の東松山市桜山8号窯^(注4)など出土例がある。

北塚原7号墳の高杯は脚端部に上方及び側方への小さな突出帯を有し、古い要素を残しており、脚端を丸く仕上げる本墳例より先行すると考えられる。北塚原7号墳からは他に頸部がやや長目の趣が共存し、その特徴も考え併せ、陶邑古窯跡群編年MT15型式期の所産としてよいであろう。

次に三ヶ尻林4号墳の高杯は、全体のバランスからは杯部が脚に比べやや大き目がかつ浅い。脚端は下方に折るよう小さく突出させて仕上げ、本古墳のものより新しい要素を看取できる。また、黒田1号墳の高杯は器高が一六・八センチと本墳のものに比べやや大きい。脚部の仕上げは三ヶ尻林4号墳と共通し、脚外面に2条の沈線が施されるのもⅡ期後葉以降の脚に一般化する新しい要素と言える。報告者は三ヶ尻林4号墳のものを「Ⅱ型式第4段階併行期前後」、黒田1号墳のものは「TK43型式のものに類似する」としており、前者の実年代は六世紀第4四半期前後、後者は六世紀後半代でもその中ば頃を中心とした時期が考えられている。

桜山古窯跡群第8号窯出土須恵器の中には本墳と同形態の、小形高杯の脚部破片が3点存在する。脚端部を丸く仕上げる特徴は本古墳と類似し、脚部径の六・九×八・八センチという数値も、本古墳とはほぼ同様である。桜山第8号窯の場合、他に有蓋高杯や多数の杯が出土している。蓋部内面や杯一部口縁部に面を作り出すものが多いが、杯(部)端部を丸く仕上げる新しい特徴を有するものも混在し、六世紀第2四半期後半のものも報告されている。このほか、高杯以外の器種では、甕があり、口縁部に楕円波状文の施される例はTK43型式以降にはあまりなく、また、Ⅱ期中葉を境に衰退するとされる器台も出土している。

以上のように、昭和五七年度調査区出土の須恵器は破片で、しかも本来の位置の出土でないということで、型式を考定し、時期を限定しきれない状況にあるが、同形態の高杯の周辺地域出土品との比較、及び共存すると推定される器種の組合わせから、器群は、陶邑古窯跡群TK10型式の相前後する時期の所産と考えておきたい。

(杉崎 茂樹)

- 註1 田辺昭三 『陶邑古窯跡群Ⅰ』 平安学園考古学クラブ 昭和四一年
- 註2 増田逸朗 『児玉郡神川村北塚原古墳群』 『第4回遺跡発掘調査報告会発表要覧』 埼玉考古学会、他、昭和四六年
- 註3 小久保敏、他 『黒田古墳群』 黒田古墳群発掘調査会 昭和五〇年三月
- 註4 利根川章彦、他 『三ヶ尻天王・三ヶ尻林(Ⅰ)』 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 昭和五八年三月
- 註5 水村孝行、他 『桜山窯跡群』 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 昭和五七年三月
- 註6 註1に同じ。TK10以降に出現するとされている。

四 形象埴輪群の配置復原について

墳丘の西側では第9図の分布図に示すように、中堤の外側から外堀の内側に集中して埴輪片が検出された。このことは中堤上の外側寄りに埴輪が樹立されていたことを示している。埴輪片の大多数は円筒埴輪（朝顔形埴輪も含む）であり、これらが埴輪列を形成していたばかりでなく、外堀のブリッジの南側では二・三層に亘って形象埴輪が集中して出土しており、おそらくこの部分に形象埴輪群がまとまって配置されていたと考えてよいだろう。

調査区内の、形象埴輪の出土位置は限定されていた。外堀のブリッジから北側及び、五四年度に調査した前方部南側隅周辺ではほとんど認められないが、ブリッジから南の部分に集中して分布している。その区間は二・三層にも及び、特に集中度の高いのは中間の七層程の区間であった。ここでは完形の人物埴輪（212）や家形埴輪（188）が、中堤上から外堀に転落した状態で出土している。これらの埴輪は、その良好な遺存状態によって推定しても、樹立後、割合早い時期に転落し、しかも、その出土位置は原位置とあまり離れていないと考えられた。中堤の上では形象埴輪片の出土は少なかったが、中堤の外側端部から、三層以内に集中して出土した。これらの形象埴輪は、本来、中堤の外側に寄せて樹立されていたと考えてよいだろう。以上のことから、堀内の形象埴輪の原位置は、ある程度、復原することが可能であった。その概要は第10図に示したがそこで、188以降の番号を付したものは全て形象埴輪である。小片でも腕は人物埴輪の特定に重要である。鬪や美豆良は性別の判断を可能にし、大刀や鈴鏡、琴などは人物埴輪の種類を特定できる付属品である。これらの破片資料も、中堤上の元の位置を推定し、形象埴輪群を復原

するための有効な材料となる。なおSD001内出土の遺物は二次移動しているもので、ここでは扱わなかった。

個体の比定と原位置への復原

第44図は、中堤の内側に形象埴輪の位置を想定した復原図である。単体の破片はそのまま中堤立上り平面プランのラインに対する垂線を引き、複数の破片に分散しているものは、その中心部から垂線を引いて中堤上の推定位置に戻した。その結果、三個体の家形埴輪の配置が復原された。189は中堤上の形象埴輪集中区南端に、188は中央部に配置された。このほかに、188の出土位置より中堤に近い位置から出土した少数の破片によって、もう一棟の家形埴輪の存在が知られたが、これは外堀内への転落破片が少ないことからみても、188の背後に配置されたものと推定できた。

次に家形埴輪の位置を基準にして、人物埴輪の配置を検討すると、188と189の家形埴輪の前後の位置には人物埴輪は認められず、人物埴輪の樹立位置は188の家形埴輪の左側（墳丘に向かって）の部分と、188と189の家形埴輪に挟まれる部分の二ヶ所に分かれていたと判断される。そこで便宜上、前者を人物埴輪A群、後者を人物埴輪B群と呼称する。

A群は完形のもは212の女子人物埴輪のみであるが、他に216（男子人物の顔面）から一体、268（鈴鏡）から鈴鏡を腰に下げた女子一体の存在が復原され、さらに214の形象埴輪台部は267の脚部と組合わせて男子立像が復原されたが、ここには男子二体と女子二体の計四体が樹立されていたことになる。他に人物の腕が四本（240、250、255、261）出土している。いずれも右手である。212は両手が完存しているので、他に少なくとも、もう一体の人物が存在していたと判断されるが、255は焼成と色調から216の男子に伴う可能性があ

り、槍を握るように手首を返して丸めた右手であることから、武人墳輪が推定できる。250は大刀を握る所作を示した右手で、出土位置の近接、焼成、色調から214に伴い、全身像の抜刀スタイルの武人墳輪であった可能性がある。261は焼成、色調から268の鈴鏡を下げた女子の右手の可能性があるが、親指を立てるだけで握る表現は行われていない。240は第五の人物墳輪の腕ということになるが、やはり掌を丸めている。しかし、その握り方は手首を返す状態であり、槍をつき出すポーズが考えられる。また腕の全長が短かく、全身像に特有な長い腕と異なるので、半身像に付されていた可能性も考えられる。なお、男子三体を武人と推定するもう一つの根拠は、周辺出土の遺物の中に青の破片が数個認められていることによる。

A群の復元位置については、188の家形墳輪から○・八五層離れて一・四層の間に五体が並ぶことになるが、これは肩と肩とが重複するような間隔となり、一列では無理な配列と言わざるをえないので、前後二列と考えられる。

B群にはほぼ完形のものとして211の男子彈琴墳輪がある。主要部の残存するものに213の女子墳輪と219の踊る男子墳輪がある。また顔面の一部が残るものとして215の女子人物がある。この他に、人物の個体を復元できるものに231の美豆良と228の美豆良があるが、これは赤彩の有無によって別個体と判断されるので、男子2個体が復元可能である。224と225の島田髷片も、寸法や調整法の違いから明らかに別個体であるから女子二個体の復元が可能となってくる。なおこれらの部分破片と前述の半完形品との関係であるが、228の美豆良は脱落痕から右側のものであり、211の彈琴墳輪に伴わないことが確実である。231の美豆良は赤彩を欠くことから、これも彈琴墳輪に伴うものではない。また219の踊る男子は、美豆良を失っているが濃い赤褐色の特徴的な焼成品である

ことから228と231のいずれにも伴い得ないことが確実である。したがって二本の美豆良から新たな男子二個体の復元が可能となる。

互いに別個体であることが明らかなら2個の島田髷片は、頭頂部のほぼ完形する213の女子のものではないことが確かである。これも新たな女子二個体の復元を想定してよいだろう。

男女の性差を示す頭部の破片を含めて、人物墳輪の個体数を復元すると、B群では男子人物が四体、女子人物が四体存在していたことが推定される。この他外堀内出土であるが、出土地点の特定ができない破片に266の琴がある。

これもB群に属する可能性が大きいものと判断される。

B群の位置については、188の家と189の家に挟まれるとは言うものの、188の家形墳輪に寄せて、少なくとも最大一・八層の間に集中して樹立していたと考えられ、墳丘に向かって右端の踊る人物と、189の家との間には一・五層もの空間が存在していることは注目される。短区間内への人物の集中樹立については、一・八層間に一列で九体の樹立は不可能であり、二列でも一・八層間は最大幅と考えられるので五体の樹立は難しい。このような状況から考えて、人物九体は、三体づつ三列に並べられていたと推定される。

形象墳輪群の配置復元

第45図と46図は人物墳輪群の配置復元図である。人物墳輪A群は男子三体、女子二体の計五体から成り、前後二列の配置が復元される。構成員の内訳は、全身像で抜刀の姿勢を表す武人一体と半身像で槍を構える武人二体からなる武人集団、腕を前方に伸す半身像と同様のスタイルと推定される、鈴鏡を下げる巫女と思われる二体の女子からなる集団とに分れる。この場合、女子と男子を対とすることは数が対応しないことと、女子に武器を構えると

いう配置は不自然で、これは男子三体と女子二体が異った二列に配置されたと考えなければならぬ。女子の後で男子が武器を構えることも考えにくい。武人が前列、女子が後列ということにならう。二体の女子は三人の護衛に守られて、何らかの重要な儀式を行っているものと推定されるが、前方に腕をつき出す所作が物を授受するものとすれば、互に向きあっていた可能性も考えられる。人物埴輪B群は、座像の男子彈琴像二体と座像の女子一体及び、踊る男子（おそらく半身像）のほかに、男子二体と女子三体の計九体から成ると推定される。琴を弾く者と踊る者とが共存するのは最も自然な組合せであり、B群は音楽奏者と踊り手の二グループで構成されているものと考えられる。213の女子は、女子には珍らしく足のある椅座像と考えられる。特に大きく丹念に表現されていることから、楽と踊りを可る立場にある歌女と推定される。琴は一方は四弦琴、他方は五弦琴で、音楽にハーモニーの厚みを加えていたに違いない。この一人の歌女と二人の琴奏者が音楽担当グループで、これに対して残りの六人は踊りのグループと理解され、男女三人づつで対をなして踊っている状況が考えられる。この踊り手は女子は髪を島田髷に結い、男子は下げ美豆良を束ね、さらに腰に刀を佩いていることから、身分の高い者達の正装による舞踊と判断され、農民の踊りのようなものでないことが示されている。

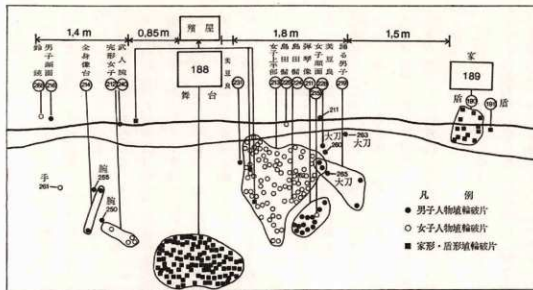
配列については三人づつ三列に復原された。背丈の高い歌女が阿脇に彈琴を従えて後列に配置され、前中列に、踊り手が男女対をなして配置されたものと判断される。このように、人物埴輪B群は、歌と琴の音にあわせて踊る、男女の集団として復原されたが、これは日常の歌舞を表現するものではなく、首長の霊をゆきふり、再生を願うたまふりの儀式を表現したものと考

えるべきであろう。ここで注意したいのは、B群が188の建物に接する形で配置されている点である。建物の構造を見ると、二間×二間の高床式建物で、床下は中央を含めて九本の総柱の頑強な構造であった。床の上は中央の柱は通っており、おろそか空間が確保されている。そして何よりも壁体の無い吹き放ちの構造のこの建物は、主屋のような常住の建造物とは考えられず、その開放性からは、後世の神楽殿のような舞台としての機能と性質が考えられる。人物埴輪B群は本来この舞台の上で行われている歌舞の有様を、そのまま舞台の脇に引き出して表現したものと推定することも可能とならう。

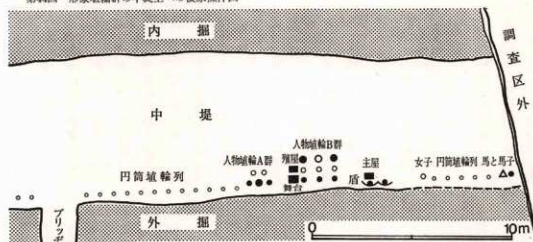
この舞台と想定された建物に対して、B群の人物埴輪集団から、一・五層の空間地を隔てて配置された189の家形埴輪は、堅魚木を載せた寄棟造りの屋根の下に壁体を表現するもので、長辺の両方に窓と、短辺の片方に入口が設けられている。これはおそらく人の住む住居と考えてよいだろう。盾形埴輪が重なり合って出土したことから、家形埴輪に接するように盾が並べられていたものと理解される。この家形埴輪の向って右側二・六層の位置には、一對の腕から人物埴輪の配置が復原された。腕の表現はひじをゆるやかにまげたもので、拇指を立てていることから武人ではなくA群の巫女と共通性が認められる。188の家形埴輪から約六層を隔て、調査区南端に近い所からは200の鈴で飾られた馬形埴輪の破片と247の人物の腕が近接して出土した。ここには馬と馬子が組み合わされて配置されていた可能性も考えられる。

第三の家形埴輪は、円柱をもつ家形埴輪の背後に配置されている。少数の破片からの復原であるが、屋根が高く、棟の上に堅魚木を載せ、垂直な壁体をもつことが確かで、189の家形埴輪と共通している。しかし、相違点も認められ、一方の長辺中央に堅長方形の入口が、そして対辺に長方形の窓が

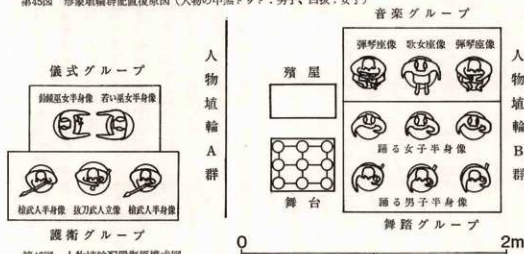
表現されている。この家形埴輪は、たまふりの歌舞を行ったと推定された、高床式の舞台の後に接して配置されていること、この二棟のグループから



第44図 形象埴輪群の中堤上への復原操作図



第45図 形象埴輪群配置復原図 (人物の中黒ドット：男子、白抜：女子)



第46図 人物埴輪配置復原模式図

補植が行われたとすると、それぞれの個体数は減少することになる。ここでは小破片であっても個体の復原可能なものを積極的に取り上げ、人物埴輪とその他の形象埴輪が表現する古墳祭祀の復原を試みた次第である。(若松良一)

距離をへだてて別に住居の機能の備った、主屋とも考えられる家形埴輪が存在することによって、被葬者を安置する殯屋と推定することが可能かもしれない。

以上の形象埴輪群の復原は、確実な個体を基にした復原であった。このほかに、中世の溝の覆土から出土した腕、出土地点が特定できない破片も存在している。このため、本来、中堤上に樹立されていた個体数は、さらに多くなることも考えられる。

五 人物埴輪腕の製作技法について

瓦塚古墳出土の人物埴輪は、腕の製作技法が中空（Ⅰ類）と中実（Ⅱ類）の二つに分かれる。両者を仔細に検討（第2表参照）すると次のような差がある。

1 中空製作のもの（Ⅰ類）は掌の表現が忠実で、その全てが粘土紐で人差指から小指までの四指を別々に製作（aタイプ）している。これに対して中実製作のもの（Ⅱ類）は掌の表現が簡略で、四指を一体に作り、線刻で指を表現するもの（bタイプ）と全く指を表現しないもの（cタイプ）とが存在する。

2 中実製作のもの（Ⅱ類）はすべて赤褐色系の色調で、焼成が良いのに対して、中空製作のもの（Ⅰ類）は色調にバラエティーがあり、乳白色や淡褐色などの白っぽいものが中心をなしており、焼成にも差がある。

3 Ⅰ類は外面調整（掌を除く腕部）にハケメを用いるか、ハケメの後にナデを加えるが、最終的にハケメの残るものが多い。これに対してⅡ類は外面調整にナデだけを用いるか、ハケメの後に強いナデを加えることによって、ハケメをきれいに擦り消している。

中空製作のものを注意して観察すると、内面の中空部分は凹凸がなく、器面に沿って擦痕、条痕をとどめるものがある。このことは棒状工具を利用して製作されたもので、粘土紐の巻上げや板状の粘土をまるめて中空に製作されたものでないことを示している。さらに、腕の付け根の屈曲部分で穴の断面が歪む場合が認められることから、棒を抜きとった後で、本体を曲げて腕の形に成形しているものと考えられる。棒を芯として使い、これに粘土で

肉づけを行って腕の粗形を作ったのか、円柱状の粘土に後から棒を差し込んで作ったかは良好な資料がなく、はっきりしない。しかし254に認められるように中空部分は手首まで及び、棒を抜き取った後、肩部への差し込み部分を細くするために、しばって穴をふさいでいることが観察される。この一連の技法は木芯中空技法とも呼び得るものである。

以上の事実から、棒を用いることは、体部への固定のためではなく、太い腕の部分で中空に作ることが目的であったと考えられる。このことは262に認められた座像人物の足にも共通している。焼成具合を検討すると、中実のものは焼成が良好で、色調が赤色系であるが、中空のものは軟質のものを多く含むことが注目される。つまり、窯の構造や焼成技術によって腕を中空に製作せざるを得なかったのではないかと推察されるのであり、腕の製作技法の差異は、それを製作した窯、ひいては工人集団の差と考えられる。

瓦塚古墳の場合は、掌の指を粘土紐で一本一本、忠実に製作しながらも焼成技術が低いために腕を中空に作らざるを得なかった埴輪工人集団の埴輪と、焼成技術が高く、腕は中実に作るが、掌の指の表現を簡略化して作る埴輪工人集団の埴輪が同一古墳の中堤上の埴輪群の中に混在していたことになる。

腕製作技法の実例を広く西日本に求めると、五世紀中葉の大府府羽曳野市菅田白鳥遺跡と五世紀後半の大府府高石市大園古墳では中空に製作されており、さらに六世紀前半の和歌山市井辺八幡山古墳と大府府高槻市曇神車塚古墳でも中空式である。ところが、六世紀前半と中葉の交る時期の東大阪市大賀世3号墳では中空式と中実式が共存し、磐井の墓の有力候補である福岡県八女市岩戸山古墳では中実式の実例が認められる。

埼玉古墳群では稲荷山古墳と二子山古墳では、中空式に製作されており、

六 瓦塚古墳の埼玉古墳群内での位置

これまでに述べてきたように、瓦塚古墳出土の円筒埴輪は、その形態的特徴からすると、隣接して所在する二子山古墳や、これとはほぼ同時期と考えられる愛宕山古墳の円筒埴輪に後出するものと考えられるが、南方に所在する鉄砲山古墳の埴輪よりは先行する可能性が強い。二子山、愛宕山、両古墳は六世紀前半の築造年代が考えられた。鉄砲山古墳は六世紀後半代と考えられるので、本古墳の築造はその間、おおよそ、六世紀中葉頃と考えておきたい。古墳群内の埴輪の比較によるこうした年代観は、昭和五七年度調査区内から出土した須恵器の年代観とも矛盾しない。

さて、瓦塚古墳の築造時期をこのように考えた場合、古墳群内ではどのような性格的位置付けが可能であろうか。埼玉古墳群の前方後円墳は、五世紀末～六世紀初頭の稲荷山古墳を初現とし、六世紀末～七世紀初頭の將軍山古墳をもって築造が終了すると考えられている。この間、六世紀前半代に二子山古墳と愛宕山古墳、中葉に瓦塚古墳、後半代に鉄砲山古墳が築造されている。中の山古墳は周堀内出土の須恵器片により、また、奥の山古墳は粗雑なタガを有する埴輪片により、それぞれ六世紀後半代と考えてよいであろう。

これら八基の前方後円墳の規模の大小に着目してみると、墳丘主軸長一三五呎で古墳群内の盟主墳であり、武威最大の前方後円墳でもある二子山古墳と主軸長一一〇呎の稲荷山古墳、同じく一一二呎の鉄砲山古墳、そしてかなり墳丘が破損し、現存墳丘主軸長が一〇一・五呎の將軍山古墳の四基の大形古墳、主軸長が八〇呎に満たない中の山、瓦塚、奥の山、愛宕山古墳、四基の中小の前方後円墳との格差が注意される。

埼玉古墳群の首長層は、北武威地方を統轄する強力な支配権力を保有していたと考えられている。^(考)一〇〇呎を超える前方後円墳はまさにその最高首長層にかかわる古墳と理解してよいだろう。しかし二子山古墳の築造と前後して出現した愛宕山古墳は前方後円墳という墳形によって、二子山古墳と稲荷山古墳との間に築造された小円墳群の被葬者より明らかに上位身分の者の墳墓と考えられるが、かつて増田逸朗氏も論じたように、最高首長と比較的近い関係にありながらこれに従属する傍係小首長の古墳として理解しなければならぬように思われる。瓦塚古墳も愛宕山古墳同様、大形前方後円墳との格差が明らかであり、傍係首長の奥津城と考えられよう。こうした、愛宕山古墳の出現に見る傍係首長墓の系譜は瓦塚古墳の後も絶えることなく、やがて奥の山古墳や中の山古墳の構築をみることになるのであろう。^(考)

(杉崎 茂樹)

註1 行田市教育委員会の南側遺跡部分の調査による。(斉藤園夫「埼玉古墳群をめぐる諸問題」『原始古代社会研究』6、校倉書房、昭和五九年八月)
註2 甘粕健、久保哲三「古墳文化の地域的特色」関東「日本の考古学」IV、河出書房新社、昭和四一年六月

註3 増田逸朗「辛支銘鉄剣出土古墳の概要と埼玉古墳群」『月刊考古学ジャーナル』No.21、ニューサイエンス社、昭和五七年三月

註4 杉崎茂樹、他「愛宕山古墳」埼玉県教育委員会、昭和六〇年三月
ここではあえて触れなかったが、円墳と考えられる丸森山古墳も直径が一〇〇呎以上、高さも八呎を超え、墳丘の土量に於て大形前方後円墳と遜色はない。昭和六〇年度の周堀部分の調査で出土した埴輪片は、二子山古墳と近い特徴があり、

六世紀前半代の可能性が大きい。丸森山古墳と古墳群内の前方後円墳との関係については稿を改めて論じたい。